

ある。況んや就眠時夢みて、次に熟睡期来て、それから曉に目醒める迄は普通の人では六七時間以上も経るのであるから根本から忘却し終るのだと考へられぬこともない。

併し、もつと精細に、論理的に考へるとやはり覺醒時に多夢なることは、自然の數なるを知る。何となれば

第一、普通健康人の睡眠は睡を催して以後一時間乃至一時間半で、其の最も熟睡に達する。此の時は重量十疋の眞鍮球を斜面上に落下せしめて、漸く覺醒するがもはや次の三十分乃至一時間では五疋の重さの球で覺醒せしめ得る。以後追々と其の淺さを増して、四五時間乃至七時間の頃に自然に目を醒すのである。第七〇頁の第一表參照。そして三乃至二疋の重さで覺醒し得る状態は已に就眠後第二時間の終りに初まり多少の弛張はあつて第五時間目位迄も續くのである。斯くの如き淺度の睡眠状態で曉の三四時間を過すのであるから、夢は睡眠の初期に生起するよりも中乃至終期に於て頻繁に現れ得べしと考へるのが至當である。

第二に、睡眠者自身の身心状態から觀ても、其の初期は終日の勞苦作業で唯、快眠熟睡を望む許である。且、腦髓機能の分解作用は急に行はれ並に身體諸器官の疲勞等は外界に對して、無關心になるから、夢を起すべき刺激は生理的に少い。之に反して一度熟睡した後は、心身の疲勞も恢復に向ひ、再生作用も行はれて、内外の刺激に對する受感性が鋭敏になる、故に中乃至末期には夢も多からうと考へるのが至當である。

第三、外界の影響が多大の關係がある。曉に及べば、太陽の光線が眼瞼を通して視覺を刺激する。雀や鳥の啼聲、納豆賣の呼聲、豆腐屋の笛、附近隣家等よりの雜音等は聽覺を刺激する。各種の刺激が、淺き程度の睡眠者を今や意識活動も身體の活力も恢復しつつある時に臨んで襲ふのであるから、曉に夢の多いのは至當である。

Ⅲ 就眠直後の夢——之は覺醒直前の夢よりも頻繁でないことは上述の通りであるが、決して全然稀なものではない。殊に、消化不良にて胃腸に故障ある際などは、恐怖夢や夢魘を経験することは、皆の知つて居る所、又習慣上の朝型の睡

眠者に於ては第一時間目では四、五疋位で目を醒し、第二時間では七又は八疋、やつと第三時間半に至つて、普通人の第一時間目に近き熟睡をとるもの及び神經質の人は中々睡る能はずして、極淺度にて第一時間を過ごしやつと二時間後熟睡しても、五疋の球で、目を醒して、健康中の熟睡の半ばに當るに過ぎないもの等に於ては此の種の就眠直後の夢が多いに違ひない。次に

IV 夢と覺醒との關係——であるが、此れにも種々の場合がある。  
(a) 得意愉快、歡喜等を以て覺醒の例。

〔第一例〕余は幼時十三四歳の頃古錢集輯に大に興味を持ち、和銅開寶だの開元通寶だのと言つて喜んでゐた時代がある。當時一夜余は堤防の邊を歩みつゝ、芝生の生ひ茂る所に、あすこにも、こゝにも、そこにも、珍貨、奇寶だらけ、思ふ存分に拾ひ集め得たりと、大得意の中に目醒めて、あはれ夢であつたかと思つては、大に失望しものゝまだ兒供心の無邪氣さに、枕の邊りを掻き搜したが、勿論何も無かつた。

〔第二例〕性慾夢にも随分此の種類がある。

小野の小町が、

思ひつゝぬればや人の見えつらむ。

夢と知りせば覺めざらましを。

うたゝねに戀しき人を見てしより、

夢てふ物はたのみそめてき。

(古今集卷十二)  
戀歌ノ二

と歌うて、覺めるのを悔しがつたり、夢見るを嬉しがつたりしてゐる。要するに同じ事である。

更た大伴宿禰家持が坂上大嬢に贈れる歌十五首のうちには萬葉集卷四相聞

夢の逢ひは苦しかりけり驚きて

掻き探れども手にも觸れねば。

醒めて、失望することの大なる丈夢中は嬉かつたに違ひない。

〔第三例〕六才の小兒(日、日坊)が飛行機の周圍に多勢の兵隊がゐて、飛行機が舞上るや彼等は萬歳を叫び、自分も共に萬歳を大呼した夢は「行動と夢」の條に書いてあるが、此の時は夢中大に歡喜しつゝ、目を醒ましたのであらう。

(b) 失意、不快、恐怖等を以て覺醒の例。

三四二

第一例 R. M. 氏(年齢五六十歳)嘗て他の下級の職員にも其の範を示す爲、自己は斷じて禁烟を約し、もし誤らば割腹すべしと誓ひたり。ある夜夢にその禁煙の決心を破ぶりたれば、今更前言を食むべからず、あはや誓言通りに割腹せんとして、ハツと目醒む。——この時は全身冷汗に潤ひしといふ。

第二例 十歳前後の小兒 T. U. 氏が當時の常習的の夢として座敷の扁額に畫ける大袋に倚れる布袋の姿が現れ、見る見る、その袋が大きくくくなる。夢者は之を捕へざる可からざる運命の如く、近きて、今や手を延ばさん許の處へ來れば一時に、サア—と距離懸隔して、遙か彼方に袋が移動し、且つ再次第々々に途方もない大ききとなる。かゝること幾度ともなく繰返へして疲れ切つて目醒む——但稀には捕ふる事に成效して目をさます事もありき。其の外恐しいゆめ、墜落の夢などで、ハツと思ひし時、目を覺ますことの多きは併し夢の醒めるのは、必しも愉快な刹那、又は不快な最中に目を醒ますのみで

なくて、

(c) 中斷的に覺醒する例も随分多い。前掲二項は、共に印象が一般に鮮明強烈であるけれども、此の部に屬するのは、自然と眠が愈淺薄となつて、いはゞ夢に飽きて、目を醒ます如き觀がある。睡後幻景の現れるのは、斯ういふ場合が多く、中には夢其の物が追々と半醒状態中に迄持込み、時には覺醒後もその事實なるかを迷ふ事がある。之は余がキリストの上半身象が現れて、其の幻景を眺めつゝ、又事實でないこと知りつゝ、其の間一度自意識的に兩眼を開閉せしめたる實例をば、記憶錯誤の條下に書いてある筈である。

又中斷的の夢の實例も態々掲げる必要はない。夢を見て、それから如何なつたか覺えがないといふ類には、此の例も随分多い。(尙第三一—三三頁をも參照せよ)併し體裁を備ふる爲に、短い例を一つだけ加ふれば

夢者、H. 且子は余等と共に同居の體、時に余の母來りしに、母は、此の人がH. 且子なるかといふ風に、其の所作を眺める心地したり。其の時、H. 且は何か用事中。以下不明(大正四年十二月三日)。

三四三

何故に斯く、以下不明なる夢を見るのであらうか。思ふに一時夢を見て居る間は脳髓の作用が比較的活動して居る筈であるが之が追々疲れ、又は再、深度の睡眠傾向を取つて、短時間であるが夢後再、引き續いて睡眠に入るのであらう。而して、此の再、睡眠の深度が浅くなつて、忽然醒めるものと考へられる。尙第二章、睡眠とは何ぞやの中なる第一表を参照あれ。斯かる場合は未明瞭に夢が睡眠に引續くのを自覚しないのが多いけれど、亦時には明かに之を意識することが出来る。

(d) 夢が醒めずして、再、睡眠に移行する例。

〔第一例〕中年の一男子、平素は決して運動家ではないのに夢に、人の注意を惹く爲、片膝を妻の仕事臺に載せ片手で片側の足を握つて、膝蓋骨を軸にグルグルグル〜廻轉した。此の夢は其の儘覺醒せずして、再、睡に入つたといふ。

〔第二例〕某婦人、游泳術は知らない。又游泳の事を思つた筈もないのに、一夜夢にボートから河水中へ飛び込み、自由に横泳ぎをやつた。そして此の夢も亦、其の儘睡に移行した。(前出)

〔第三例〕T. U. 氏十五歳の頃、一日讀書中、大に感ずる處ありて死てふもの、決して恐るべきでないと思ふに至つた。一種の悟をなしたのである。其の夜の夢に、夢者は他の學友に向つて、生死超脱の悟境を説いて居つた。學友共は、然らば、君は、今此の場で死ぬことができるかと詰るに、何事やあるとてこゝに切腹をなさんとす。眼前に白木の三寶あり。懷劍を抜き放ちて、腹部に突き立て、グツと、切り割くに、少しも痛きことなし、たゞ生ぬるき感あるのみ。かくて、漸々腹を切りつゝ、精神は恍惚となり世も忘れ身をも忘れし如くにて、いつとはなしに、其の儘境界もなく次の睡眠に移りぬ。

若夫れ或は覺醒時に午前三時に目醒めんと欲して寝ねし夜は、夢中意識も之を記憶し居りて、同時刻に夢を中絶して、醒覺せしめ、或は二日後、一年後乃至十年後、以前の夢を記憶して居たる如き、又之を繰返へす如き例は、夢と時間なる本章にも大關係あるは勿論なれど、余は既に上文、夢と記憶なる章中に各種の個條項目を擧げて、丁寧に叙述したと思ふから、再ここに繰返さない。同所に就きて参照あれ。

以上を以て余は「夢と想像」なる一章中の一部として「夢と時間」を論述し、大略之を盡した筈である。以下他の一部分「夢と空間」なる項に移らう。

佐々木信綱

うつら／＼夢なりがたみ見まはせば、燈火くらし岩室の内。  
末きゆるちぎれ／＼の物思ひ、いつしか夢のうちに入りけむ。  
いくとせの昔の夢の影追ひて、ひとりさまよふ磯の松原。

(以上、思草より)

陸游

午夢初回理二舊琴  
竹爐重炷海南沈  
茅簷三日蕭々雨  
又展芭蕉數尺心

明治天皇御製

たらちれの親のみ前にありと見し夢の惜くもさめにける哉。

3. 空間と夢

空間と夢  
性夢の一特

抑、夢といふものは、色彩よりも状態に、時處よりも事件に重きを措きて發現するものであるから、夢中には勿論色彩はあつても、其の割合は寡少、又時間、空間の觀念が存してゐても、事實と一致せざることもあり、正否混淆の事もある。

又空間の觀念にのみ就きて言つても、前後左右が廓然と開けて、晴朗なる光線中に見る如き光景は至つて寡く、大抵は譬へば廣表の知れぬ暗室中を、薄暗い提灯の火を便りに、僅か身邊を照らしつゝ、一步一步探索して行く様なもので、一尺後方の事はもはや暗黒中に没し去り、一寸前方にはどんな怪物や珍事が出現するか、皆目豫想のつかぬと同様である。だからして、

I. 一定位の空間に關する觀念なきもの——が甚多い。即、自身が何地の何處に居るとも、不明のもので、唯事件や景物のみがあるのである。たとへば

〔第一例、夢者T、U氏は余の側傍で何か文章を綴る可きであるらしい。彼は繪はがきの上に四首の和歌を詠んだ。大に佳作の様であつたが覺醒后忘却

(大正五年七月二十六日)。

一定地の  
觀念なきもの

右説明——昨日、Y書店の一員が余の許へ來りて種々談話中、余は繪はがきに感想的の短文を書いた。夢者も其の時側傍にありて、之をよんだ。恐らく之が印象したものとみえる。

そして此の夢には、余の傍といへば、勿論一種の空間を限定して居るけれども、さて聞いて見ると、今の余の書齋とも分らず自室に非ず、故郷の自宅にも非ず、要するに居所に就きては不明なのが此の例の要點である。

是の如き例は殆擧げる必要はない。併し事件の主となつてゐる所を見せる爲、尙一例を添へておかう。(第二版附記。是と二六三頁第二例とを比較。母子の兩夢其類似す。蓋子の夢を記載せしH子は一月後に夢中想起せしか。)

〔第二例〕H、H女の夢。大小を腰にせる昔の武士らしき人、三人寄合ひて、何か類に議論中らし。夢者にとりては芝居の様でもあり、實際事の様でもあつた。時に、ヘヤの内にありし行燈の中から白煙ポーツと上つて、白衣の幽霊現れ出た。夢者は「ハッ」と思ふ機みに醒む(大正四年九月十三日午前三時)。

II、一定位の空間に關する觀念あるもの——此の項を更に分ちて(a)場所と自己經歷との關係、(b)場所と其の廣狹を考察せねばならぬ。

I、場所と自己經歷との關係

一定地の觀念あるもの  
場所と自己經歷

夢の一特性

殊に場所に關しての夢の特徴は其の執着性の強きことである。換言すれば舊居の夢は、之を去つて後十年以上になつても現れるが、新居の夢は、現在其處に住みつゝ、幾十日を経なくては夢の分子となつて來ない。左に實例に據りて説明せんに、

〔第一例〕余は第二一八頁の心的影響と聽覺夢の項中の第一例として、丁女が夢に京都に於いて、溝渠の大爆發に逢ひしことを見たるを記した。その京都は、彼の女が九年以前に去りて、後一度も訪れたことがない地である。

然るに新居を構へると、中々其れが現れないで夢にはやはり舊居が出て來る。之れと同様の事は、身分に於ても然りて、男子も女子もたとひ成長して、已に一家を成すに至つた人も屢、學生時代、女學生時代の生活を夢る。夢は執着性の強いものである。かく、たとひ、現住所が夢に出る程に新居と親しくなつても、矢張り舊居は相變らず、夢に出て來る。たとへば、

〔第二例〕H、H女は東京から故郷へ歸へつて後、二十七日にして、初めて故郷の現住所に於いて、人と會話して居る夢を見た。——即、自宅に於てS、H子と共に

語りて曰く、H、T氏(即余)は必ず今日の午後三時迄に來訪すべし。又こゝに此の目醒し時計あり、之はT氏が置き忘れたるものなれば、之を受取旁々屹度來訪するに相違なしと。以後不明(大正四年八月十一日)——(而して夢者が東京を去りしは七月十五日であつたから、上記の通りの日數となる)。

同じ夢者が、其の後一ヶ月を経ても尙東京の舊居を見て居る。即

〔第三例〕東京本郷の舊宅の二階。火事よと耳にせし故、逃出さんとして二階の欄干を超えて、屋上へ出でしも、後より誰か追馳くる故、また後へ戻りて室内を逃げ惑ふ。何故に又何物に逐はゝるとも分らず、以下略(大正四年九月九日午前二時)。

更に、同夢者は再、東京に居住する事になつて新居を構へたが、之は轉宅後約二十日後に夢現した。即

〔第四例〕現居の茶ノ間にて、H、T氏(余)の爲に、食事の用意中。余は其の座に來りて自ら火鉢だの、配膳の具合を仕直して、箸を取らうとする。夢者は、そんな風なならべ方では却つて、食べにくいとせうと語る云々(大正五年一月十七日)。

〔第五例〕大正五年十一月二十六日には、上記第三例と同處、同様のゆめ(但、地震を見たり。余自身に於ては

〔第六例〕大學の新學期が九月十日(大正二年)前後に始まりて、余は其の年の十月四日に新學期の氣分を有する夢を見た。即約二十五日を経過した後である(前出、第三二七頁)。

〔第七例〕余が故郷及他地に滞在して、上京後、夢に、此處は東京也との氣分を味うに至りしは二ヶ月半の後であつた。即八月の二十五日に東京へ來て、その十一月十一日に初めて、市中を歩行中の夢を得た。

以上は余の材料中唯數例の抜書きに過ぎないけれども、之等を以て見ると舊居、故郷の類は中々人の頭腦より去る可くもないが、自己身邊に密接の關係ある住居、自室、乃至在籍學校等は早くて二十日、二十五六日も經なければ夢に現れない。殊に今迄全然無關係なりし地へ來て其の地の氣分を以て夢みるのは二ヶ月半もかゝつたことを知る。

自宅若くは自室の様を明瞭に見ることは、勿論ある。上記の第三例や第四例は即夫れである。若くは身は異郷にさすらひつゝも其の假寐の夢は、遠く飛んで故山に親を省み、友を訪ふべく、若くは往昔杖を曳きし勝景は再、枕頭に展開して以て臥遊に充つ可く、若くは唐の天臺山は物かは忽ち槐安に遊びて以て蟻王に謁すべく、若くは華胥氏を訪れて以て治國平天下の法を自得すべし。楽しい哉、想像。快い哉、夢。然ればこそ、古今東西の詞宗は其の奔放の想を夢に得飄逸の筆で夢を記したものが多し。今此處に其れ等を叙べると面白からうが、統一秩序の上に不便を感じずるから、暫く興味索然たるを忍んで要領丈けを述べたり。次に、夢と想像及文學なる項の下に一纏めにして讀者の批評を仰ぐ事とする。さて、余は、本項、空間觀念と個人經歷を叙するに當り、一々先づ細目を掲げて後に當該の夢を書く程、面倒な論法を採らなかつた。何故ならば各自熟知の事て、一言直ちに首肯出來得るから。今左に表的に其の細目を並べると、

a、現住所が夢に現る。

b、過去の住所乃至曾遊の土地が夢現す。

e、過去に經驗ある風土以外に之に近似のもの、乃至純想像的のものも夢現す

——之は後文に詳説す。

d、空間に關して、巡遊的、經由的の夢あり。

余はまだ此のd項を説かない。之を説明しやう。

〔第一例〕本書の第一二二頁「光線の直接影響」の項に、余は M. Bertrand の例を引いた。即彼はもと海員であつたが一夜燈光の刺戟で Fort-de-France, Toulon, Iosiel, Crimea, Constantinople 等の各港を巡訪する夢を見た。海員丈に其の世間は廣し。

斯う迄でなくとも吾人は汽車に乗つて、旅行する夢をも時々見る。

〔第二例〕夢者 T、U 氏は友人 T と汽車旅行の體、停車場に近きしと思ふ頃 K 氏 (T 氏は在らず、つまり T 氏がいつの間にか K 氏と變り居る也) が大變澤山な荷物を携帶するを知りて、夢者は能ふ丈分擔して之を助く。停車場の待合室に至れば、かの大荷物を携ふる者は F 氏也 (こゝに、又人物變換あり) 而て夢者の心中には T 氏は已に外出したるものと思はれてあり。時に F 氏は行李の一を開きて、菓子を取出して食す、云々 (大正五年三月七日)。

〔第三例〕夢者 H、J 子、汽車旅行中の體。何處かの停車場で汽車が停まりし故、夢者は獨りプラットホーム上へ降りぬ。車中には長女 M 子一才を捨て置き



たり又同行者二三人もありき。夢者が車外へ出づるや、間もなく汽笛一聲發車したり。夢者は不意の事として、如何ともせんすべなく心中、嘸かしM子が泣いて居るだらうと思ふ。驛長に、次驛迄は幾何ありやと問ふに、八分路程との事。然らば、自身が走りても、左程はあらじ。人力車を備ふ間に、一瞬も早く馳け付け得べし。精神一到何事か成らざらんとて一所懸命に田圃路を走る。道路は人力車の轍跡あり。左右の追分路に來かゝるに、左方には神社あり。夢者右路をとる。……もはや夢者は、かの停車場に着きて他の人々に語る。人は曰く、あの汽車は羽田驛で半時間餘も發車が遅れたから、急いだのでせう。でも、發車するならば、一言の注意でも與へて下さればよいに、突然汽笛をならして、發車したのですからどうすることも出來やしないわと大に立腹の體……(大正五年五月十四日未明)。

此等の夢例は丁度、夢と時間のIIIに於ける、夢中世界の連續的、時間に相對するもので、夢に單一の個所を思念するのではなくて、一處から他處へ移動するのが特長である(第三二九頁參照)。

## 2. 夢中の場所と其の廣狹

廣狹の程度實に千差萬別である。狭いのでは漸く自己の身邊を認識するに止るあり。廣いのでは茫茫たる原野を眺め、崎嶇羊腸の山路を望むとが出来る。

(第一例)夢者T、T氏は誰かと共に、或る家を訪問せん爲外出す。途中、途を人々に尋ねて漸く目的の家に入る……と思ふ間もなく、眼界豁然と開けて一面に渺茫たる大曠野である。各處に野營の天幕を引き張りて、中に外人が住まふらし(前出、大正五年八月六日)。

(第二例)前略此處は一急阪の中腹と思しき所にて、夢者は十數名の一行中の一員なり。彼等の姓名はH生、T生、S生、A生、Y生、A K生、H S生、A D生、Y K生、其の他。一同は路傍の大榎の下に休憩中にて、或者は蹲居し、或者は佇立し、或者は樹根に坐す。遙か下方を見降せば、羊腸盤回の坂路は蜿々と連りて、其の一節は明に認む可く、殘部は山腹中に沒す。顧みて仰げば迂曲の坂路は再上方へ連りて、樹間に消ゆ。彼れ等の低徊せる兩側は絶壁の斷崖にして、山巔に向つて立てば、其の右側は溪谷深く千仞の下に縈り、一條の袖路、枯林を貫いて其の行く所を知らず。左側は灌木茂生の急斜面にして、其の

底を窺ふ可からず。折しも工科大学々生の一隊十數名其の中にS N生Y K生I生等あり。手ん手に測量器を携へ、長大の米突指イボツを肩より肩に擔ひて、此の山路を降り來るに逢ふ。彼等の最短軀の一學生其の容貌は中學時代の朋友O氏に似たりは自轉車に乗りて前驅す。我等一同は、あの短矮の小軀なればこそ、斯る便宜あれ、小軀も時には利便なる哉、險阻にしてしかも迂餘曲節せる此の坂路を、かくも巧みに舵取りて行くは、中々の達者かななど、評し合ふ。時にH氏提議して、かの山巔へ馳競せんと。夢者は心中H氏の健脚自慢を認知す。M氏は之に答へて、我に二十間のハンデキャップを與へよ。然らば試みんと。H氏外面之に濫々承諾する如く見せて實は内心に之を希望せり。而して、T氏を顧みて、此の男は駄目だよと嘲る。T氏は之にまけてゐず、そんな馬鹿氣たまねはよし給へ」と。此の時迄夢者は競走しても良い位に思ひ居りしものが、急にいやになりて、競技に参加を見合す。さて自身は此の絶壁を降りて、かなたの袖路を傳ひて、前進せんとす。恐らく、其の盡くる所は汽車の便ある地に行かん。然らば歸途は之に

乗車して歸來し再、一行に合すべしといふ。中には行路危険といひしもあり、れど、又風景絶佳なるを説くもありき。夢者は、此の計畫を實行と決心したり(大正五年二月二十七日)。

右説明——(1)H氏は實際かねて健脚自慢なり。過日、日光へ旅行の際も、途中山路にて、夢者は、君は割合に遅かつたと言へば、彼は大に辯解的の言辭を以て答へたり。

2、山路迂曲の有様は、恰も前日小金井教授が講義中に描きし副腎の迂曲管に似たり。

3、工科大学生——當時寄宿の家に一工科生あり。彼は亦自轉車にも乗るを得。且最近他の工科生H Uが測量器を以て實習するを見たり。

4、同級生中に非常に矮小短軀の一學生あり。之が中學時代の一侏儒を思ひ出てしめしか。

夢の原因は略、此の四ヶ條で盡きるかも知れないが、兎に角、山中の光景を想像すること、是の如く精細なるは寔に稀である。しかも殆純想像的であると夢者

も主張して居る。

III、夢中の場所と、夢者自身の現居との關係。

之も前項と同様、極めて變差の甚しいもので、近くは自宅、自室乃至己が机邊、遠くは海外に洋行中の夢あり、更に飛び放れて、此の世を外に地獄天堂を見物して廻はつた、哲人や高僧もあり。俗人の仲間でも天國の夢、龍宮の夢と古今東西天上天下に種々の珍談奇聞はあるが、さて浦島太郎の發見に係る龍宮は内地から何千哩あるものやら、乃至大恩教主釋迦無尼如來の御紹介に依りて、阿彌陀佛の手引し給ふとなん承る十萬億土彼方の西方淨土とは、如何様の處であらうやら、ちと我等の想像も及ばぬから、此の娑婆の臭みの抜けた様な話は直ぐ次の章に譲つて、唯今は遠い處で先づ歐羅巴に遊學中のT、U、氏の話と、トルコの都の眞中で叛徒に脅された余の物語で本項を終りとしたい。若夫れ、桃太郎で名高い鬼が島乃至西方の安樂國、天上界の有様等は夫々實地探險者の名文彩筆に依て讀者を恍惚の境に誘うものがあらう。之は別章に約束しておく。

〔第一例〕大正四年十月二十日の午前四時頃、何の號砲であつたか又は試射であ

つたかは知らぬが三發許り大なる砲聲が聞えた。余は此の時は已に覺醒起床して居たのであるから右の事は事實である。此の時刻、夢者T、U氏は左の夢を結んだ。音響が刺戟になつたに違ひない。——夢者は大勢の學友らしきものと曠きく原野にあり。戦場の如き感がある。此の時、天の一方に爆音聞え初めて一臺の飛行機は姿を現しぬ。と思ふ間もなく、已に吾人の頭上に近きて、三度ばかり爆彈を投下せり。夢者は、之を避けん爲、他の者共と與に逃げ廻りつゝあり。

——之が發端で、本項の例には略して可いが、全體として參考になる部が多く、又上來此の一部を抜書したこともあると覺えるから、今序に全部を記載しておく、そこで此處迄の分に説明を加へると、

1、上記の通り、三發の砲聲が刺戟なるべきこと。

2、夢者は去る十五日(即五日前)に上野を出發、十七日には日光發同夜上野著。其の間、日光山及其の附近に旅行して、殊に千丈が原の廣々したる、佳景は夢者の感興を惹くこと多大であつた。

十七日の夜は、疲勞して熟睡の爲か、無夢。三日を経て此の夢となつた。

3、千丈が原——斯う書いて、正しいか否かは知らぬが、とにかく夢者の夢中意識中には、語呂の上から戦場を聯想したに違ひない。夢の一特性である。

さて局面一轉夢者洋行中の體となる。どこかの外國に來遊中で、一旅館に投宿した。友人と共に其の宿泊人名帳を繰つて居ると、嘗て七高在學當時の教師T氏の同處に居らるゝを知りて、早速彼を訪問し種々の談話あり。時に先生は夢者が餘りによく外國ホテルの事情に通ぜるに驚きて、君はけふ到着したばかりで、どうしてさう精通して居るか」と問はる。「いや、大學に居ります時に、嘗て外人に従ひ、日光で經驗致して居りますから」と答ふ(大正四年十月二日)。

右説明——前記の通り、T、U氏が日光を訪ひたる時に、Tukos'he Hotel とて、湖畔の立派なる西洋旅館に投宿した(此の時は、數人丈は申合せて、他の一行と分れたのである)。其のホテルの内部純西洋式にて馴れざる者に取りては、便所に浴室に寢所に、一々手古摺ること夥しかつた。此の時の印象が、夢に再現したのである。更に注意すべき事は、大學に居る時に云々とて、恰も自身は卒業後なるかに感じて居ること。之は「夢」と未來の觀念につきての参考資料である。

〔第二例〕余は土耳其にあり。今しも暴徒蜂起して余等日本人の一行も危険に瀕したれば、余等はある垣根の側傍に避難し居たり。しかも暴虐なる惡奸は此處をも襲はんとするを知り、余は在土日本人總代といふ資格で、叛徒の中を危険を冒し、劍戟の下を潜りくゞて、漸く民政長官の舍宅を訪ふ。長官は何ぞ圖らん内地に居らるゝ、I男爵ならんとは。余は來意を告げて、我等日本人の旅行中安全を保證する文書を頂戴致し度いといへば、彼は直に快諾して一通をかき與へらる。見れば Premier Count Okuma と宛名あるらし余は之を見て、吾人最初の希望に副はないから更に一通旅行の安全保證の爲に賜りたしといへば、言ふ儘に與へらる。而して、よくくゞ前文書を見れば、之も必要なるものにて、余の外一行の氏名を記録せる身體の保護に有効なる一通であつた。之を夢中意識では初め、斯るものは無効なり」と邪推してゐたのである(大正四年七月三十日)。

右説明——(1)余は去る二十五日頃活動寫眞を見て、本夢の如く暴徒襲來の景を見た。(2)I男は最近拙著解剖の爲に題字を賜うた。(3)夢中にも誤解

邪推の心理作用あるを認む。

VI、夢中の方向。

之も見逃すべからざる要素であるけれども、前條の類と同じく、其の觀念の存することもあり、存せぬこともある。通常後者の方が多い。左に存する場合の例を挙げておかう。

〔第一例〕余は故郷の自宅の前に於て、西より東へ向ひ、顔を右手に向けて歩みつゝあり。故に我が家も其の隣家も行く／＼見るを得たり。季節は夏にて、曇き故、雨家とも障子を明け放ち、奥座敷も透かし見るを得たり。我が机上には一冊の書物もなかりき(前出、大正三年一月三十一日)。

〔第二例〕余は所用ありて、外出したるらしく、今は街々(矢田町紺屋町、今井町)を経て、綿町の自宅附近の四角まで歸來。時に、ふと西方の天を仰げば、大空に文字現る。羅馬字の如く、又平かなの如く、兩つの圓圈をなして相互に相交又す。其の圈中にのみとり粉の文字を見たり(前出、大正二年三月十八日)。

之等の例に見る如き、東方へ進み、又は西方の天を仰ぐなどは、明瞭に感じたのである。

以上、夢と空間に關する章の各項目は盡したと思ふ。

併し乍ら空間に關して最、奔放自在な、殆、純想像的なる夢例は、同時に夢全體から觀ても文學的色彩に富み、豊富なる要素を含むを得て、夢と想像なる章も之等に依りて、初めて其の興味も意義も發揮し來らんとするのである。故に余も、左に特に章を更にして之を後論、特種夢中收めて、夢と想像乃至文學なる題下に古來の文人の錦心繡腸にも聊か觸れやうと欲するのである。讀者直ちに之を蹤ひて閱讀するも可、順に従つて、次の「理性と夢」に讀み進むも可。

古別離

孤城、窮巷、秋寂、々々  
空園、露、濕、荆、棘、枝  
憶、君、去、時、兒、在、腹、中  
業、姑、吉、語、元、無、據  
嫁、來、不、省、出、門、前  
粉、綿、磨、鏡、不、忍、照

陸放翁

美人、停、校、夜、歎、息  
荒、蹊、月、照、狐、狸、迹  
走、如、黃、犢、爺、未、識  
况、憑、瓦、兆、占、歸、日  
魂、夢、何、因、識、酒、泉  
女子、盛、時、無、十、年

林 久子

花をかざして蝶追ひて  
 清き眠りのいつしかに  
 はたちにつうらたけて  
 寝ざめの床におくれ毛の  
 かうがひゆらぐ花嫁と  
 冠れる帽子のかけにして  
 赤き乳房をふくませて  
 鬢の毛照らす闇の内、  
 優しき人をまづ戀ひて  
 一人ぬる夜のさむしろに  
 月花雪と處女子を  
 思へば悲し幸もなき  
 爪音ひくきあや琴も  
 あゝ幾度かかなしみの

乙女とわれはなりにけり、  
 をかしき夢を見そめしか。  
 まだ戀知らぬおのが身も、  
 みだれて苦し胸の内。  
 やがて我が身の粧ふ時、  
 うつるは誰のかほばせか。  
 うい子育てむ身とならば、  
 夢如何ならむ母の身の。  
 はげしく胸の燃ゆらむか、  
 袖かみしめて泣くらむか。  
 たゞ弄ぶうつし世に、  
 をみなとなどか生れけん。  
 詞あへなく狂ひ来て、  
 涙に泣かん我が身なるらむ。

四、理性と夢

1. 心の論理性

世俗は詩人を以て常人以上に感情が強烈に發達し、随つて俗人の表現し得可からざる奇警の句や、凡物の想倒し得ぬ妙想を歌ひ出すものだと思ふ傾向がある。身も世もあらず戀ひ焦れにし愛人を失ひたる失戀詩人が、悲調腸を絞りて歌ふ一字一句は、天に泣き地に咽ぶの趣はあるが、さて朝夕の新聞に三面記事を賑はす戀の怨みの殺傷や嫉妬の炎で焼く放火事件に詩人達の關係すること寡きは何故だらう。感情のみが果して強烈ならば、其の錦心繡腸より名文好辭が涌くと共に何故其の一舉手一投足も其の本性を露さないものであらう。人は直ちに對へて、一は修養無き文盲者に多く、他は之に反する故だと言ひ去るかも知れぬ。謂ふに激情の行動に發するや爆彈に火を點じて四隣を焦土たらしむるが如く猛烈に、感慨の詩人に表るゝや、名香の煙を曳いて室内に低徊するが如く優雅である。而して此の差の生ずるは學識や修養の如何に由るよりも、寧ろ激せんとする感情に對して不燃性の作用ある理性の發達に關するのである。熱

烈の感情のみでは決して詩人とはなれぬ。詠うべき詞藻の豊富ならざる可からざるは言ふ迄もなけれど、仰いで之を蒼々の昊天に訴へ、俯しては之を疊々の大塊に怨み、低徊して顧み佇立して慮ふ底の、換言すれば短慮一徹の決行的人物よりも逡巡して寧ろ、理性に明るき性格に於て詩人たる適應性を認めるのである。之につきては Dr. Hinrichsen の *Die Neue Generation* (1912) に於て論じて居る。

されば Wundt は「心とは推理するもの也」と言ひ、H. R. Marshall は「論理は本能發現の一樣式なり」(*Instinct and Reason ; Reason a Mode of Instinct in Psychological Review, march 1899*) とて孰れも吾人心性の意外に好んで理論的に行かんとする傾向を特言して居る。就中 Binet は催眠術の實驗より其の結論を得て曰く論理的なることはあらゆる思考の根柢、思想の素地なり、推理とは種々の心象の組成にして、そは其等の心象の性質を以て限定せらるゝものである。もしこゝに種々の心象が現れたならば、即ち足る、直ちに此等は組織せられたるのである。論理は正に反射的に生じ來る、と (*La Psychologie du Raisonnement, 1886, P. 10*)

此の論は未だ夢中意識に觸れたのではないが、畢竟後者にも適用し得て差支ない。

實に夢中の事件の起伏、光景の變轉を觀れば、文字通りの空想や假構に屬すと思はるゝもの甚多く、殊に其の荒唐無稽にして現實には見得べからざる如き夢像を呈する時は、人は其の想像的傾向に強くして、推理等の能力は干り關らざるかに思ふかも知れぬ。成程、心の主宰たる統覺が眞の作用を弱めて居る夢中であるから、夢となり了つた結果こそ可笑な、馬鹿らしき事が多い。けれども、ただかゝらして推理はして居らぬとの論法が出ない。否、夢中意識も、覺醒時と同様、念々に又刹那刹那に其の推理性を働かして居るのである。而して、こゝに、其の努力の痕は何れの夢に於ても窺れつべしと言ひ度いが、上文に書いた通り、夢中の推理も本能的、反射的である。てなければ斯くも最短時間に一卷の夢畫を展開し難いであらう。余は上來幾多の實例に、能ふ丈け、又判明せる限り其の理由を附して來たから、此の邊の讀者に對しては今更實例をくだくしくいふ必要はないと思ふ。併し斯く執筆中に得たる最近の實例——三十八歳の一男子(S.H.)が

仰臥して午睡中、下婢來りてつと、下の薄團を下へ曳く際、腓腸部乃至踵が薄團と摩擦しつゝ、終にストンと踵が疊に着くや、ア、吃驚した。崖から落ちる夢を見たとして目を覺ました(大正五年八月二十九日、午後二時目撃者下婢S子及妻H子)——此の如きは、種類から分ければ身體外部から來りし刺戟(觸感と夢)の項目に屬すべきもので(同人の石段を踏み外し、別に奇とするに足らぬが、夢中の精神が兎に角、一機一境に對して、之を不合理のものたらざらしめん爲に、腓や踵が滑り行く加き感覺を受けつゝ、睡れる身には何の故とも分らねば、突嗟に斷崖上に我が身を想像し、之から墜落の光景を以て、之が説明解決を付けやうとする作用を極く簡單な例に於て了解し得るのである。

又複雑なる例を以て觀んとならば、本書の「視官と夢との條下、光線直接の影響」の項中(第一例(第一二四頁)として余自身の實驗を書いたのを參照あれ。即、其の夢に於ける材料は(1)電燈の明滅(2)薄氣味惡るい深夜の獨居(3)白髮の老婆(4)兩戸を上へ押し上ぐ(5)ステッキ(6)森大臣(7)英語の讀書(8)隣家の醫師(9)人が集まつて聽く、——之れ程である。覺醒時に於て、以上の材料を使うて一物語を創作

して見よとの問題が出たら、吾人は相當に頭を悩まされねばならぬであらう。夢中の意識は、此の際に處して平然解答を與へ去り、しかもそれは最初電光の明暗相ひ代り、次で漸次光力を弱めて消えんとするに至つた迄の短時間内の仕事で、電燈を使用してゐる人々には必ず斯かる經驗が有るであらう、然らば、其の時間も甚短少であるのを知つて居らるゝであらう。夢中の推理性は左の筋を以て物語を發展せしめた。(1)燈火がヒラ／＼と動き、初め明滅して後に消え行くは、誠に薄氣味惡く、妖怪出現に格好である(2)此の家は余一人で淋しく(3)白髮の老婆スツクとランプの向へ立つ(4)之が我が現在の老祖母であると考えらるならば、彼の女が嘗て此處に住んだ家の令嬢結婚當時の事の談話をしたのを想ひ起す。即(5)潜り戸を上から下へ卸ろした事である(6)余は之を毎夜ステッキで突張つて戸締りとす。(7)ステッキで御簾を上へ押し上げた森大臣の話は幼時に聞いて印象が深い。(8)余は外から歸へつて來て、ステッキで潜戸を上へ押し上げた(9)さて戶外に於ては如何にといふに、人々が多勢居る、何か聽いて居る。(10)それは東西屋の廣告であらうが、英語でしやべる(11)其の人は實は隣家の醫師である。



以上の如く夢は最初第一の外界刺激(こゝでは電燈の明滅)がある、之から次ぎ次ぎと理由をつけつゝ話を延ばす事になる。夢中には以上の記事の逆の順序に見えるが、實は此の如く過去の後方へ戻つて發展するものである。如是、溯源的方向を攀る夢中意識には随つて擬似追憶の現象の起ることも其の觀念聯合の變調と相竣ちて、容易に首肯し得る所である(尙第二七二及二七三頁を参照)。

所で上記十一段の心象變化の中に、覺醒時の吾人には所々腑に落ちぬ處がある。(一)白髮の老婆が妖怪であるか、余の祖母であるか、曖昧になつてゐること、(二)東西屋の、英語演説も可笑しいが、(三)其の東西屋が隣家の御醫者であるのが愈滑稽である。初め並べ立てた材料で組立てるに際し、多少無理が出来たと考へるのは吾人の覺醒時意識であるが、夢中にはそんな苦心の痕が見えぬ。却つて平然と快刀亂麻を斷つが如くにやつてのけたやうに思はれる。此の點が即夢中意識たる所で、余が上來、觀念に變調を云爲したのは、斯ういふ類である。肌肉瘠瘦したる白髮の老祖母の姿も枯槁憔悴の餓鬼や幽霊とが多少形態的に似てゐるとも考へられるけれど、東西屋と英語演説と醫者とは、どう考へても、正當な

聯想とは容せない。本書の睡眠論にて叙べたる如く、又隨所にて説明したる如く、睡眠中は意識の統覺が減弱し、人格の分離を來し、思考力の抑壓乃至制御作用も除かれて、觀念聯想が放逸となり、あらゆる方に脱線するのである。此の際、如上の精神状態では、自己の脱線も變調子も氣付かう筈ない。そして、一々材料を得るに従ひ、順を追ひて、理由を考へて行く覺醒時の推理とは趣を異にして、幾個の材料が已に潜在意識裡に乃至現在感覺圏内に個々別々に共存して居るのを、衝動的なる夢の推理作用は立地に作用したのである。こゝに何等の躊躇や狐疑が無いらしい。Elliott は此の論理的排列が已に潜在意識中に行はれて、此れが夢中の意識に發現するに際しては、もはや推論し、統一する必要はない、單に之を其の如くに眺めれば足るのみと云つて居る。但、此の心理作用が、潜在意識の以下に行はるゝにしろ、はた以上に於てであるにしろ、突嗟的であるに違ひない。何となれば、前例の如く現に燈光の明滅を感覺して、直下、あれ丈財の思想轉換を相應の理論の下に遂行した時間こそ、まことに瞬間であるに違ひないから。

余は嘗て、夢は如何にして生起するかといふ問に對する答解を後文に約した

が今や此處に論じ來つて、讀者も了解する所があつたらうと思ふ(第一二四頁參照)。  
 本章の冒頭に於て詩人としては、其の情を宣べ、其の思を行ふには寧ろ常人よりも冷靜にて、理性的なる頭腦でなければならぬ事を知りし讀者は、又別篇、夢と文學なる章に於て、夢中意識及び其の想像が如何に理性を保持し且つ之を發揮してゐるかを學ぶ必要がある。夢中であればこそ、不合理な聯合や結論は免れないが、しかも夢には其の論理的作用が重大なる要素である。

然らば如何なる程度に於て夢中意識は推理を行ひ論理に準ふであらうか。前例に於て森有禮の話を追想して、ステッキで潜戸を上へ押上げたる如き段は蓋、潜在意識から脱離して來たものであらう。此の他随分高尚又、困難な推理を行ふことが頻々ある。左に實例を擧げてみやう。

〔第一例〕夢者T U氏は一の實驗室にありて、今や大發見の緒に就きたる所。彼はサイフオンの如き一装置を造りて如何なる振動數の音響でも發し得しめた。又一方に「Transformer」——之は夢中のT, U氏の命名にて——を造りて之によりて、先方では振動數に相應する色——赤や青や黄を極めて自然に現

出せし得る工案をなしたものである(大正五年六月二十三日午前六時半)。  
 右説明——之は同夢者が相續いて見たる四段の夢の最後の一節である。

前夜彼は淺草帝國館にカピリヤの活動寫眞を見た。之が各段に現れてゐる。上記の一段の原因と見るべきは。

1. カピリヤの中にアルキメデスが籠城に際し、バラボラの法則を應用して太陽光線を反射せしめ、其の焦點に當るべき敵の船舶を悉く燒盡したる光景のあつたこと。

2. 余等は平素夢に見えたる如き發明の可能なることを論じたることあり。

〔第二例〕Synthesisは余が夢と文學との章に紹介する如く、已に四世紀の當時にありて、相當の夢の研究をなしたる學者で、夢中にも文章辭句の訂正等なし得たる由であるが、彼が狩獵をなしてゐた當時、夢中にヒントを得て一つの係蹄を發明したといふ。

〔第三例〕コンヤラツク氏は平素學問をなすに當り、如何に考ふるも遂に解せずして途中に眠に就きしに、殘部は夢中にて完結せしこと數回ありしといふ(井上四博士妖怪

學講義による。

更に、井上博士は Carpenter の心理書の引用なりとて、左の例を掲げて居られる。  
 (参考例) ジョン、ド、リーフド氏の記する所に據れば一僧あり、アムステルダム府の或學校に生徒たりし時、教授スキャンデン氏の數學講義に侍せしが、嘗て、一銀行より或數學上の問題を解せんことを教授に依頼し來りしことあり。然るに該問題は頗る困難、冗長の計算を要するものなるが故に、氏も容易に其の解答を得ざりき。依りて生徒十人を選びて之を解せんことを求めたり。而して一僧も亦其の數中にありしかば、大に奮勵して之に従事せしも二夕とも正答を得ず、而して第三夕は既に答案の期、明朝に迫れるを以て、一層銳氣を鼓して夜半を過ぐる迄計算したりしと雖、遂に正當を得ず、是に於て失望困頓の餘り、筆を投じて床に就けり。翌朝夙に起きて聽講の準備をなさむとしたるに、驚くべし、己の机上に我が手跡を以て書記せる一紙面あり、全問題を解きて一點の誤謬あることなし。乃ち之を家人に問ふも何人も其の室内に來りしものなく、且其の自己の手跡なることは疑ふ可からざるが故に、必ず自ら睡眠中に計算し、暗中にて書記したるものならざる可からず。特に著しきは其の計算の簡略にして、兼に六面の石盤を數字にて填めしものも、今は僅に一葉の紙面にて足るに至れり。而して之を教授スキャンデン氏に語るに及び、氏は斯る事情に吃驚せしのみならず、其の簡單なる解明は氏の終に想ひ到らざりし所なりと云へりとぞ。  
 同博士は之を以て夢中には智力推理の作用の存する例證として居られるが、

それは當らない。此の例の如きは本人は少しも夢を見て居らない。此の記載の通りとすれば一時的の睡遊症である。尤も余は繰り返していふ如く睡眠中の意識も所詮覺醒時の夫れとは別種類でなく、乃至、狂者や神經病者、被催眠者に於ける心理も皆相互共通の同一意識が別様乃至變種的に作用するに過ぎぬとの意見を懐抱するのであるから、睡遊者に推理能力の發現を實證できるならば、随つて夢中意識にも其の事あるに想到する爲の便宜とし參考として、上記の例をこゝに引用したのである。

2. 重複夢A型 (同時重複夢)

上述の如く、夢中意識が推理作用を有し、理論を進め得るてふ事は、少くとも此の際各種の材料を統轄し、客觀視して居る事を示すのである。随つて一つの夢象を見乍ら、同時にそれを他の様にも描寫して夢中意識に現れることがある。もつと分り易くいへば説明付きの繪本を見てゐる様なもので、若くは耳で案内人の講釋聞き乍ら、眼で名勝舊跡を觀てゐる様な類である。實例を挙げると、

〔第一例〕深夜の書見に倦みて、いつしか假睡に落ちし時、繪葉書ありて封建時代の武士が、

聊か首を傾けつゝ、空を仰いで句吟の體見とゆ。その層の附近に「折々は夢にも涼し夏の風」と書いてある。夢中には、此の句は此の武士の作と考へてゐた(明治四十五年六月十七日午前三時半、夢と文學参照)。

〔第二例〕夢者TU氏は奈良の三笠山の麓らしき處にて、山の方を眺めてある時一人の男子が上より走り下るを見る。手に巻物様のものを持つ。然るに之と離るゝこと幾間かの後方より又一男子、同じく手に同様の巻物もちて馳け下る。而して前者が手を上げれば後者も手を上げ、其の他の動作、全く影の形に於ける如し。最後に、後者は追付きて、前者と格闘せり。こゝに夢さむ(大正五年八月二日)。

右説明——此の夢は種々の意味に於て興味がある。

1、夢者は夢時、手を胸部に當てゝゐたから心臓の動作に影響を及ぼし、多分胸苦しきか息苦しき状態であつた。故に此の感じが丁度山上から息せきで馳け下る状態に似てゐるから上記の夢を結んだのに違ひない。

而して、自己の感じが他人の身の上に現れて居ることも夢の特性の一とし

て、注意すべきである。

2、一人の男子のあとへ、同様のものが、影の如くに追ひ來るとは、こゝに特に述べやうとする、夢象の重複する場合である。

3、後の者が追付きて、前者と格闘するは、夢中意識の推理性が満足すべく産んだ想像であり、同時に亦胸部の苦悶的状态の表徴となる。

即此の夢には、表徴現象、人格分離、重複夢例、推理作用を説明するに足る四材料を有する實例である。而して、余の此處に引用した理由は第二項、同一夢象が重複する點にあつて他の諸例と異り、共に同一型式をとるのが特徴である。

〔第三例〕夢者 Hills 階上の窓際で執筆しつゝ、ふと窓外を眺めると、驚いたことには寢衣を着けたまゝの一婦人が多少隔つた向ふの高窓から投身したのである。夢者は之を見つゝ、尙執筆を續け、しかも同文中に、將に今の事件其のものを記述すべき筈であつた。

〔第四例〕同夢者。(多分、蒸氣船に乗りて)夢にテムズ河を上りつゝあり。夢者は友人の著した小説をよんでゐた。小説の内容はテムズ河を満つてロンドン市へ到着すべき或

人の傳記であるが、其の光景、氣分が全く現在の夢者たる自身と同一なるかに感じた。斯の如く夢中意識が、推理性を有する結果、客觀性を有し來りて上記の如き重複夢を生ずることもある。

此の重複夢の一種類として夢中に夢を知る場合がある。即、

重複夢B型

3、重複夢B型（異時重複夢）

〔第一例〕余は初めキリストの半身像、殊に其の神々しき顔貌を明瞭に見てゐたが、同時に之は夢であると感じて、眼を開くに果して消失し、再閉目すれば復現れた。——此の夢は純粹の夢でなくして、寧ろ睡后幻景、即ち半醒状態に來りし時の幻影であつたと思ふ。余は此の前後の關係を精密に記述して上文に掲げてある、參照あれ（第二九二頁）。（大正三年一月二十四日午後十一四十分）

〔第二例〕現住東京、夢中の場所、故郷。夢者H、H子。初めは不明——口を如何せしはづみか、右方の齒がポロ／＼と脱けたり。手掌に受けてみると、入齒や其の他赤きゴム等があつた。「まあ、こんなに五本もぬけてしまつて」と母に語る……………此の事がまた夢となりて直ぐ現れた。母は語つて曰く先年齒の脱けた夢のありました時に姉が大病の報知がありました。今又こん

な夢を見たのですから、何か不幸な事件が御座いませんでせうか……………と。

（大正四年五月十二日午前二時頃）

〔第三例〕夢者H、H子、母と共に婦人會總會らしき場に出席。會場は御殿の如く、多くの會員が料理最中——此の夢の前半部は、余は已に夢中の色彩なる條下に引例したりと記憶するから略し、其の後半部を左に書かう。又此處に必要な記事である——

やがて夢者は母ならざる他の人と其の御殿の周圍を廻ぐるに島地に出づ。野菜物よく成育し、茄子は黒々と色づきたり。西瓜は一個ありて他の二個はもはやもぎ取られしやうである。まあ見事な出来ばえと思ひつゝ、歩行す……………

此の夢を見たことをば、昨夜、斯く／＼の夢を見ましたとて余に向つて語り告げると、余は之に對へて「夢を見た夢の話ですわ」と言うた（大正四年六月九日未明）。

注意——最後の會話に留意せよ。甚面白い。追々と後の意識が前の者を包含して行く處が一特徴である。

〔第四例〕夢者 T、U 氏。夢中十七八の少女の顔表はる。活動寫眞的に「此れから此の少女が中心となりて夢が現れる」と思ひつゝ見て居るに果して然り。初め胴つき、四肢揃ひて活動をはじむ。次に突如馬の顔表れて、之に胴體四肢揃ひて、馬が中心となつて各種の夢象轉換あり。かゝること五度ばかりあつた。いつもこれが中心となつて夢が發展すべしと思ひつゝ見るのであつた(前出、大正四年十月十日午前四時)。

〔第五例〕夢者 T、U 氏現在の自室中にて勉強中。時に、其の家の娘が口に南無阿彌陀佛を唱へつゝ廊下傳ひに来る。夢者心中に其の意を解して謂へらく「は、あ、之は余等の移轉の期切迫しつゝある故、之を承知しての謎ならむ」と。時に、裏口から人々が種々雑多の品物を余の室中へ運び入れぬ。……  
——こゝ迄は夢者の頭腦に近來移轉の考へがあるから、その影響なるべしと判ぜらる。夢は尙つゞきて——夢者は今や一の幽霊を見つゝあり。其の體乃至顔貌が透明にして、しかも鮮明。耳朶を透して其の背景を見るを得た。……夢者は余の室に於て頻りに以上の夢中幽霊實驗談を語り、幽霊出現に種々の要約あることを論じた。……又夢者は自宅の家庭團樂の所にて、幽霊の實在を滔々と論じ自己の上述實驗を語りて後、曰く、吾人は

常に此の世界を見て居ること、五官に感ずる範圍内のみ。聽力は兎に及ばず、地震の微動を感知すること雉子や鼠に及ばず、其の他の各官皆然り。故に現にこの場に或る物が存在してゐても、人間の感ぜざる限りは見ざる也」と。一同稍傾聽の體、大正五年四月二十四日。

右説明——此の夢の後半部の原因は、余が昨夜ツルゲネーフの Phantom を氏に向つて朗讀しきかせたことが主にして、文中の幽霊的怪物の出現に印象せられたものであらう。そして加ふるに近來移轉の期の迫るを自ら知る故、表徴的に「なむあみだぶつ」の分子を作り出し、旁々幽霊とも關係して、此の三重の重複夢をなしたものと解せらる。殊に初め幽霊を見次に之を余に語り又次に之を家族に語る所は面白き三重夢の例である。

〔第六例〕M 氏、其の十三才頃より十五才の頃にかけて(中學第一年乃至第三年)屢、斷崖上に佇立する時疾駆中の一列車が驛進し來りて、今にも轢き殺されんずる危機に瀕して居る。時に心中「之れは夢である」と感知してアツと強く閉目すれば、覺醒すること得たり(前出)。

此の例の如きも、余は前文にも掲げたけれども、其の根柢に此の推理的作用あ

る故との説明を容れねばならぬ。而して斯かる夢の存することは、余自身を初め各人の實例につきて例示した通りであるが、*Ellis*は「我は自家の経験中には斯く夢中夢を知る實例なし。さればたとひ、*Aristotle* や *Synesius* や乃至 *Cassandri* 以下多くの學者がその存在を説けども、我に於ては、之等は凡らく眞の夢にあらざるべしと言はんと欲す」と言つて居る。全く自身の経験範圍の狭小なるを知らざる謬見である。(尙第三〇六頁の第七例も参照)

4. 動物の夢

地球上凡百の動物のうち、理智の發達せるものは實に人間に若くはなく、而して人間の夢が此の論理的推理性なくして殆其の發展の不可能なるは上來叙述した通りである。否實に人間の此の推理性が本能的に存するが故にこそ夢ありといひ得るので、他の動物には夢の少く、若くは全然皆無なりと思はるゝものは此の理智の發達が不完全であるからである。されば、動物の中でも聰明なる犬などに夢の存することも觀られてゐる。即、犬が睡眠中に前足を律動的に運動させたり、尾を振つたりする状態、又は突然、吠え出すが如きは其の例とすべく

人間に夢ありて、動物にその若くは少くは存せざる理由

犬の夢

夢の算數能力

*Lucretius* は夙に此の事實を言ひ、且、覺醒後は暫時の間一種の幻覺現象の存することあるが如しと言つて居る。

5. 夢の算數能力

「人間は考ふる動物なり」といふ。而して考ふるは、即、推理力の存する故に外ならず。斯く人間に固有の性能なればこそ、不斷に、反射的に働くこと猶睡眠者の顔に蠅が止まりて、顔筋動き乃至手を以て之を拂ふと異なる點はないが、所詮其の境界は睡眠中なるを知らねばならぬ。睡眠は元來精神の集中、筋肉の收縮乃至各器官の活動を目的としてゐるものでない。否、全く其の反對なることは第二章に於て縷々之を演べた筈である。斯く睡眠中統覺聯合、推理等の諸種の心的作用は孰れも活動を休止するか、又は之を不必要とする状態にあるのであるから、其の如くにして成立する一般の夢に、平常の覺醒時意識を以ては首肯できざる結果を呈するとて毫も怪むに足らない。算數に關して理性の暈んでゐる例は左の如きものである。

〔例〕余は夢に知人と共に外出す。其の時我が囊中に三十錢ありしと覺ゆ。知

人は一洋品店に入りて、大タヲル一枚三十錢のを二枚買うた。余は斯かる事を依頼したる覚えなけれども、今となりては、支拂者は當然余なるかの如くに感じて居た。併し三十錢しかないので、笑ひ乍ら其の旨を語りつゝ、も一度改め見んとて、財布を開けば、二十錢の銀貨と思つてゐたのが實は六十八錢と表記せる清國銀貨であつた。但、只今は之が五十錢に通用するものと思はれた。そこで六十錢を支拂ふには、更に十錢を附加すべき處、夢中の我には謂へらく、此の銀貨は元來六十錢である。そして今五十錢に通用する。されば、尙ほ十錢のお釣りが來ると。斯くて店員から十錢を受け取つて歸つた(大正二年十月二十八日午後二時三十分より三時十五分迄の間)。

右説明——本例は甚簡單に書いたが、其の原因として左の數項を擧げ得る。

- 1、近來囊中殆無一物、三十八錢しか餘さなかつた。
- 2、大タヲルは、余の水浴時腰にまくもので、此の時の店員の態度も嘗て、金澤で經驗したる所に似たり。同地在住のM M氏が昨夜晝葉書を余に贈りしことが同地の印象を新ならしめしか。

3、殊に全夜タオルにつきては、入浴時印象深き事件のありしこと。

右の夢の各分子の説明は大略此の通であるが、其の算數的理性の朦朧になつてゐるとはお話にならない。勿論一念熾烈に難問を解決せんと努め乃至專念推敲して絶唱を吟詠せんと力むる者にこそ、覺睡兩意識を通じて不斷の注意が集中し生來本具の靈能を發揮することもあらうが、之は異常の例である。

#### 四、夢中意識と注意

こゝに注意なる意識に關して一言せねばならぬ。Rihot は之を別ちて、自意的注意 Voluntary attention と偶發的注意 Spontaneous attention となした。自意的とは後天的に、教育や修練の結果、精神力を緊張し能ふもので、之は常に努力の感が伴はねばならぬ。そして、筋肉に作用して、之を緊張せしむるか、又は筋肉の收縮の間に自身が緊張を受ける。俗に襟を正してなどいふ時の心的状態が、即之で心が引絞まれば體もキツとなるを言ふたもの、又、折目正しき袴でもはいて、キチンと端坐する時は心も自ら儼然としてくるのも、人の自ら經驗してゐる事であらう。之に反して、偶發的の注意とは、先天的、自然的のもので、教練も要せず



動物や小兒に於ても認め得る種類である。そこで睡眠中は此の後天的の注意が減弱又は消失して、獨り先天的の注意が残存してゐる。睡眠中には筋肉弛緩して居るから後天的の注意も其の緊張を完からしめず、又後天的の注意が缺損するから筋肉も弛緩してくるとも言ひ得べく、兩々相待ちて、睡眠時意識の諸種心的現象に關與し、隨つて夢も其の影響を蒙つてゐることは見易きの理である。

五、其の他の心理作用と夢

余は以上の叙述を以て複雑なる精神作用と夢との關係も大略通觀し得たと思ふ。そして、幾多の實例の示す如く人間の夢は其の發現の種類の實に千差萬別なるを發見し、敢て覺醒時の心的状態に見るものと差別を認めないのである。余は更に續いて高等なる道德的精神作用と夢、宗教と夢なる稿を繼ぎたいが豫定の紙數の超過を云爲するよりも、寧ろ若し事實上に續稿を起し出さば遂に題を更へ章を新にしても其の盡きる處を知らない感がある。本書を纏める丈けでもまだ、必須の章が残つてゐるから、姑く此の種の問題に就きては左の如

其の他の  
心理作用  
と夢

き簡潔なる叙述に止め、精細の論究は一度び筆を洗つて後にしたい。併し實例はもはや上文の各所に出てゐるから、さして了解に苦む事はあるまいと信ずる。

1、夢中の理性喪失。

(a) 算數的能力の退廢——夢と推理なる條の末第三八三頁を見よ。

(b) 平素見るべからざる行爲——夢と感情第六例第二三七頁

(c) 犯罪的行爲——同上第八例第二三八頁

これは亦同時に慘忍性乃至道德性の存することを示す。

2、夢中の慘忍性——上項の(c)を見よ。

3、夢中の友愛——精神自己の刺戟の總説の第四例(第一九四頁)を見よ。

4、夢中の慈愛——夢慾夢の條を見よ。(第四九三頁以下、第五一九頁以下)

5、夢中の性慾——性と文學(其の二)の3の第二例(第七七三頁)

6、夢中の羞恥——夢と文學(其の二)の3の第二例(第 頁)

又、一男子(Z, T)は夢に平素懇意の一女子が深夜に寢所へ忍び來た夢を見た。場所は一下宿屋の一室。夢者は心中大に驚くと共に、もし之が他人に知れたらば大變と思

ひ惑う中にドヤ／＼と其の下宿屋の館主や交番所の巡査が来て、かの女子を引立てゝ行つた。夢者は顔をあからめると共に、大に羞恥を感じ自ら求めざるに、斯かる恥を見たるは面目もなき次第也と思つた。(原因の一作は、二年程前、某旅館の隣室に於て之と類似の事あり、深夜に目を醒ましたことがある)。

- 7、夢中の簾恥——時間と夢其の二のIVの(b)第一例(第三四二頁)
- 8、夢中の責任——壓感と夢との條第二例(第一六〇頁)
- 9、夢中の審美的(文學的)觀念——別篇「夢」と文學」
- 10、夢中の宗教心——夢と文學其(第七四三頁及第七五一—五頁以下等

然<sub>レ</sub>彼<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>經<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>往<sub>レ</sub>彼<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>切<sub>レ</sub>佛<sub>レ</sub>及  
 與<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>夢<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>夢<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>別<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>  
 切<sub>レ</sub>佛<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub> (淨土或問 第十四丁)  
 吉<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>安<sub>レ</sub>詳<sub>レ</sub>即<sub>レ</sub>夢<sub>レ</sub>寐<sub>レ</sub>神<sub>レ</sub>魂<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>和<sub>レ</sub>氣<sub>レ</sub>  
 凶<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>狼<sub>レ</sub>辰<sub>レ</sub>即<sub>レ</sub>聲<sub>レ</sub>音<sub>レ</sub>笑<sub>レ</sub>語<sub>レ</sub>渾<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>機

(茶根譚、前篇)

六、夢と覺醒後の影響

1. 總 說

楞嚴經に左の話がある。

演若達多といふ人は室羅城中での頗美男子であつた。或る時、邪神の廟に參詣して悪夢に襲はれた爲、其の翌朝立腹し乍ら鏡に對すると己の瞋恚の顔貌が有りの儘鏡に映つた。こゝに謂へらく、我程美男子は世にあるまいと思つたに、一夜の間に斯くも恐しい形相に變るとは、之れきつと、魘魅の所爲に違ひない。さても美しかりし我が顔は何處へ行つたやらと狂氣の如くにあちらこちらと歩るき廻はつて己が頭の行方を尋ねたが、どうも見付からぬ。折りしも通りがりの一人に、矢張お前の胴體に着いてるぢやないかと云はれて、おゝさうだつたかあれうれしやと再、鏡に對すると、鏡裡に破顔一笑の好貌鮮かに映つた。之こそ我が頭に違ひないと安心して復元の演若達多に戻り迷雲全く霽れて再前日の狂態を繰返さなかつたといふ。

佛意甚深我が輩のよく悟る所でないが、此の話だけを聞けば、悪夢に襲はれて

覺後も憤怒の形相凄じかつたものと窺はれる。如是佛説は單に寓話だらうか、また事實にも有り得べきだらうか。

抑覺醒時意識も夢中意識とは別種のものでなくて前者に發現する凡百の心理が同様に後者に於ても現れて、其の間、唯、程度の上の差なることは猶健康と病氣とに截然の區別無きが如く、本書の第一章に先づ之を言ひ、以下隨處に便宜に従つて其の眞理なることを例證論究して來たのである。されば覺醒時意識の微妙なる心理作用も均しく夢中に發現する機會あると同時に、夢中意識の經驗は直ちに延いて覺醒意識界に齎し、醒覺後にも、其の影響の残存をあらはすことがある。そして大抵は此の種の作用は一時的で熄むものであるが、元來神經質性乃至精神病性の素質ある時、若くは其の印象餘りに甚大なる時は永久に其の影響を残して寒心すべき結果を來すことがある。其の結果を見るに、唯一時性で暫時後はさして病的症狀も残さず、全然消失してしまふものもある。又元より多少病的にして、其の爲に結夢上にも關して、之が亦更に夢者覺醒後に影響したもものと思はるゝものもある。以上、二つの場合の各に肉體的と精神的の區別が

ある。第三の場合としては、其の影響一時性に止まらずして、永く病的症狀を残すもの、之の種類には精神病性のものが多い。左に逐一、大略的に例示しやう。

二、一時

的影響

上(a)、肉體

(a) 肉體上の影響。

〔第一例〕夢者Y氏が舊知の少女の家に訪ひ來た様である。時に彼は左の手にゴム管様の細長き管を持つてゐたがドアを開く前に之をカッと握りし所、其の途端に管中に小蛇潜みゐて、カッと夢者の掌面へ噛み付いた。あつ痛しと叫びて目醒めたが覺醒后暫時は限局的に此の感覺が残つてゐた(前出、大正三年四月四日午前四時)。

〔第二例〕春洛紀聞に、沈忠老の談として曰く彼の外祖君が平素膾を好まなかつた。然るに一日夢に朝廷で膾一盤の御馳走を賜ひて以來、大に之を好物とするに至つた。以後、一年にして、一夜夢に再、前同様の夢を見たが、覺醒後は其の腥氣鼻について甚快からず、遂に膾を食はなかつたといふ。

(b) 精神上の影響。

〔第三例〕二十四才の一男兒夜中何か悲愁の感情に打たれて小兒の如く、ア、ア、ア、ア、と泣いた。覺醒後も此の時の悲しい感情が暫時は繼續してゐたといふ(前出、大正三年

上(b)、精神

二月五日。

三九二

〔第四例〕余が本書の「夢と感情の」條下第八例に、慈愛の感に満ちたる一夢を見たことを書いた。末句を「ふと目醒めぬ。然もさきの快感は依然として打ち續き己が心臓の鼓動も爲に高きを覺えたり、云々と結んである（前出、明治四十三年九月四日）。

3、身體に豫め故障ありし故と思はるゝもの。

(a) 身體上の影響。

3、身體に豫め故障ありし故

(a) 身體

〔第一例〕夢者 M. M 氏二十四歳茫々たる草原にて、己れ唯一人フットボールを蹴る。常の習慣に反して左の足の甲にて全力込めて蹴り上げし所、キタツと甚しき痛覺を覺えて驚き目醒む。さて覺醒後も痛くて端座すること能はず其の後一二日は其の影響が存して居たといふ。大正五年八月廿五日午前五時半。

右説明——之は必ずや、此の夢の前に、左足乃至其の位置に故障でもあつてその時の感じをフットボールを蹴る夢として見たるものと信ぜらる、何となれば、若し初めに精神的に醸したる夢ならば、平素の習慣通り右足で蹴るであらうと思ふから。

(b) 精神上

(b) 精神上の影響

〔第二例〕夢者 S. M 氏二十二歳。前夜夢者は最近少しも夢なしなど、語りて寝ねたるに、其の夜實に恐ろしき夢を見たり。但、如何なる種類の夢象なりしか覺えず。覺醒後は口苦く、頭重く、眩暈の心地あり。其の後二三日は全身病的症候を呈して倦怠を覺えたりと（大正二年十一月十七日（后前三時頃）。

〔第三例〕夢 M. M 女（四十才前後）。産後にて、ヒステリー的の症候を呈したりしが、一夜己の靈魂が脱け出した夢をみるや、驚き醒めて、わあ〜と泣き立て、魂が飛んで行つたとて、ぐる〜室内を馳けめぐつて大騒をしたことがある。

〔第四例〕Dr. Coriat は曰く、ある若き婦人が丘陵より墜落する夢を見て、覺醒後四肢に局部性ヒステリー性の麻痺を起した。

〔第五例〕Marro は La. Luberla pp. 286-292 に左の例を擧げてゐる。

或る伊太利の青年が外國へ留學して、其の歸國の途次に起つた出來事である。尤も此の青年は元來幾分神經質であつたが、又高等教育を修めた人である。

三九三

其の旅路 Tunis へ到着した頃は稍疲労を感じた。且汽車中で彼は博徒の仲間あるを感知し、しかも彼等は自分をばつて覗つてゐる者だと推察し、従つて博徒共は彼に對して惡意を懷いて居ると信ずるに至つた。さて其の夜の旅宿では、彼の部屋は臺所の上に當つて、甚蒸し暑く、そして夜晩く迄人の足音や話聲も聞えた。それが皆彼に對しての事と思はれる。かくして彼の邪推は追々深くなつて行つたのである。實は彼の耳を煩した物音は食器類を洗滌する音だつたのであるが、彼は己を暗殺する爲の準備と取つた。はては彼を逐ひ出す爲に、放火があり、自分が逃げ出す所をつかまへられるのだと思ひ出した。もう斯うなれば、立つても居ても堪まらぬので、ピストル片手に、窓から逃げ出した。そして他人の部屋を過ぎるさに、何事が起つたのかと、びつくりして目を醒ました同宿の客に行き逢つて、矢庭にズドンと一發放して了つた。彼は取押へられて癲狂院へ送られた。やがて、平常に復して、自ら精神錯亂なりしことに氣がついた。但、マローが問ひ試みた所に據れば、彼は己の寢室を去る前に幾何の時間を経過したかを知らず、且、彼は當夜は睡り入つたことを

覺えないといふ。マローは之を論定して、彼は恐らく覺醒と睡眠との中間に居つたので、其の精神錯亂は蓋し夢中に生じたのだらう。旅の疲れ、神経性の心配、過度に温き寢室、耳障りな僕婢の話聲乃至臺所の物音、こんなものが半睡状態の彼の心裏に相ひ結合しあふて、狂的行動を發現するに至らしめたのだと言つてゐる。

#### 4. 夢後、慢性的の影響

(第二例) 先年或る人の紹介にて、余(高島氏)が家に尋ね來りし人あり。其の人は非常のヒポコンドリアにて、體度沈鬱、顔色蒼蒼、言語低澁して殆覺る可からず。而して僅に其の言ふ所を聴くに會て自家の庭中より五重の古塔を描り出したれば、何人か由緒ある者の奥つきなるべしと思ひ、自己は之を祭祀する考なりしも、暇なくて他に行きしに、其の留守に情なくも家人は之を賣却せり。それより後は夜々惟しき夢に侵され、身體日々に衰弱し、食物も味なく何事を見聞しても會て面白き事なく、親戚朋友の慰問を受くるも却て煩雜に堪えねば常に一室に閉居せり。然る時は、何やらん耳に囁く如き聲聞えて耐え難し、云々(明治四十五年出版、高島氏心理百話)。

夢と狂氣との關係は、多少、別篇小兒夢の前篇(各種心理比較研究の條)に書いておいたから參照せられよ。同處にも Mosso が例示したる一癲癇病者フラージェ

ルの夢例を引用した。あれは夢中と現實とを混同するので、夢後の影響とは云へないけれども、参考となるから併せ見られよ。

若し夫れ是の如く遺傳を有する精神病性の人が夢と現實とを混同して、睡眠中より覺醒時にかけて狂的行動を取る實例があると同様に、今一人ありて、病的に又は道徳的に又は睡眠中に非常に大なる印象でも蒙る場合には其の影響が永く子孫の代にまで波及はしまいだらうか。つまり夢は遺傳すべきであらうか否か。實例の少きと、研究の足らざるとより未、何等の解決は與へられないけれども *Mourly Vold* は左の實例を紹介して居る (*Über den Traum*)

る、夢の  
遺傳

る、夢の 遺 傳

ノルウェー國のある田舎の一牧師の實話であるが、彼自身は甚健康で、たとひ特に勝れて強健な質では無いが、決して之と云ふ可き大病にも罹つた事はないさうである。Voldが最初彼の報知を得たのは千八百九十五年五月二十六日であるが、更に二つの報告をも併せ得た。其の中には彼の今尚ほ存命中の姉妹よりの引證もあつた。牧師の手記に曰く、私が妹に手紙を遣つて問合はして見まし

たが、其の際は私自身の夢に就ては精細な事は云はず、唯一般的に私はいつか貴女からお互に同じ様な夢を見た事があるとか云ふ事を聞いた様に覚えてゐますが、果してそれは如何なものであつたかと書き送つただけでありますと。そこで、此の牧師よりの報告要領は左の四種である。

(a) 此の牧師は若い時分から一定期間を隔て、同じ夢を反復して見る癖がある。之に初めて氣が附いたのは九歳か十歳の頃であつた。そして、追々年の老ゆると共に反復の度数も減じた様で、今では稀にしかその夢を見ない。けれども其報告によれば尚やはり此の癖が残つて居る様に思はれる。上記の年の春に於ても一度例の夢を見た。しかも其の原因となる可きものは、覺醒時には何も見當らない。夢といふのは、短かいもので、且きまつて其の一幕の行程から現はれる様である。夢者に取つてその感じは、彼自身が今やひとりの人を殆、打ち殺した如く、しかも其れは老女らしい。地上に圓く腰を屈めて横はつてゐる。夢中の空の色合は薄暗くして其の人の顔も十分に判らない。夢者自身は其の倒れてゐる女に向つて斜に立ち、其の女の頭と肩兩肩(?)は眞直

に、其の他の體部は自分の左方へ寄り、右の肩及項の邊が最明瞭に見えた。夢者はいつでも決して其の事件の初を知らず又決して倒れてゐる女の起き上るのも又其の顔をも見た事はない。何だか鼠色の首卷の様なものを目にしたかに思はれる。夢者は非常に残酷に又大激怒して、已に折れてしまつた頑丈な杖で以て、尙もまだ蟲の息なる其の人のからだを滅多打ちに打擲してゐる。之も半死半生の憂目は可愛さうだから早く完全に息の根を止めやうといふ心もあるらしい。

斯くして其の女を全然殺し終へずして、彼の目は覺めた。――

(b) 報告者の手記によれば、最明瞭な夢像を話し得たのは、彼よりも十歳程年長の亡姉であつたといふ。彼の九歳か十歳の頃、其の姉が上に述べた所と殆同様の夢を物語つた事がある。其の時に彼自身も自分に同様の経験あるに氣がついたのである。併し姉の夢によれば、半殺しの老女ではなくて、ただ「老人」であるといひ、又、私は全身の力を出して此の人を打ち殺さうとした。けれども、又しても生き返へつて來ると姉は言つた。それにしても實質上以上兩者

の夢には何等差異の無きに心付くであらう。――こゝに附言して置く可きは、牧師の夢に於けるかの女の首卷は恐らく姉の夢物語から來たものゝ様に思はれることである。

(c) 次に妹の夢にも――此の牧師は二人の姉妹を有つてゐた――同様な事が週期的に表はれたのであるが、多少の變形がある。

後年になつて兄が若しや妹も同じ経験を有するか否かを問ひ質して見ると、果して其の事があつた。そして時々此の爲に大變うなされることがあるといつた。妹も姉と同様に、夢中の人物に對して「女」といふ語を用ゐず、單に「人」とのみ云つた。最近の報告に、徴しても、やはり、例の夢が現はれるのは知れるが、追々稀になり、且、毎度同一の夢ではないとの事である。妹の語る所によれば、老女でなくして、一人の男であつたり、又は小兒であつたりする。そして其の者は殺されて居るのだが、又蘇生して悪口を言ふ。それが、夢者に對しての罵詈雑言らしく、又時としては、あまつさへ竹馬の様なものに乗つたる丈高き人間となつて彼の女を殺しに追つ懸けてくる事も稀ではない。――此れと牧師自身

の夢との相違點に就て、彼は次の様に言つてゐる。自分の夢に於ては老女と言ふがさう明瞭に見えるわけではない。けれども明かなる差別點は自分の方は能動的に行動し、妹は受動的に振舞ふてゐる所である。即ち妹は夢中に追つ馳けらるゝといふが、兄の夢には全然そんな事はない。否自身が敵をも苦しめて居るのである。但、妹を追つかける人間も初めは死んだ様に倒れてゐて、後に蘇生するものらしい。だからして、思ふに自分の夢は同一事件のうちの稍後期の部分らしく、妹の方のは幾秒か早き刹那の舞臺らしいと。

(d) ずつと以前に、亡くなつた母は時々誰かに殺されんとする夢を見た。末の娘が度々母が夜中にうなされる聲で目を醒ましたと云ふ。牧師自身も母がそんな夢物語を話した事がある様に覺えてゐる。但、之は確言できぬ。そこで唯確かな事は母が悪夢に襲はれるといふ點で、しかも之丈では必しも目下問題にしてゐる夢とは何等關係をつける必要もない。けれども又一方夢の要點が妹の夢に於けるものと、能く一致した點もあるから、或は之も同一の原因に職由するのではなからうかと思はれる。

斯く見れば、一家族に於て同胞三人と其の母親とが同一型の夢を反復して見る事になる。其の説明として、牧師は之れ恐らく我が家系中、祖先のある者に何か良からぬ行爲が有つて、其の當時の印象が後代に迄傳はつたものと思はれると言つて居る。祖先に就きては彼は何等の確かな事を述べて居らないが、上記の説明をして蓋然然と思はしむるに足るものがある。即ち母方の系圖は能く判らないが、其の判明した所に據れば、祖先は農夫であつて、随分放蕩もしたもので、らしい。何故なれば、曾祖父は家政の持ち方が悪く、酒色の爲に、家屋敷を失くしてしまつた。又祖父に當る人も早く故國を去つて、千八百九年の戦争に参加し、其の後も永らく冒險的な放浪生活を送り、晩年に至つて、漸く安穩な生涯に入つたものゝ様である。祖父の妻は一人の娘——即ち牧師の母——を生んで後、且つ多分其のお産の爲めであらう、氣違となつて、其の後正氣に返へつたのも僅かの間であつた。——牧師は父系の祖先につきては比較的能く知つてゐた。父方の祖先は幾代の間も相當の身代を有し、同一屋敷を所有してゐた。所で彼等に妙な性癖があつて、若いときは随分元氣であり、社交的でもあるが、老年になる



と人目を避けて、變てこになる、自分が特に此の關係を述べるわけは、其の誰にも著しく現はれてゐる突飛性であつた。彼等には甚、奇矯な行爲があつて、時折被害を及ぼす様な事もあつた。彼等は氣立もよく、又社交家でもあるが、時とするとな變な風に潜伏してゐる悪性が首を擡げる。たとへば、我が祖父は後年に一寸放火することを其のいたづらにしてゐた。其の他自分には何等之ぞと取り立てゝ示すべき事はない。要するに父系の祖先は皆信用するに足る人物であつた。

——こゝまでは報告者の談である。此に由りて之を見れば、夢には遺傳性があるが如く、そしてある事情の下に於て、發現するものなること、及び三人の同胞に反復して現はれ、殊に其の二人に於ては年と共に其の度数の減少して行く事をも確め得た。又かの夢が同胞中の最年長者に最明瞭、且つ最確實に現はれ、最年少者には不確實にして、且つ變型的に現はれる事も注意すべき點である。そして上述の各人の夢は夫々獨立に發現するもので、誰も他人の夢を豫め聞いてから見る様になつた次第で無い事は報告者も切言してゐる。之等の點は何れ

も遺傳説に有力なものである。

尙又報告者の手記によりて知らるゝ事は、父方及び母方の系統中に精神病系統を認める。父方の祖先、殊に祖父は突發性の精神病者らしく、其の變挺な思考と共に、狂者的な犯罪行爲のあることもかゝる系統中に認められる。祖母の系統に精神病者があつたか否かは不詳である。若しも牧師の母の夢も實は、三同胞の夢と同様のものだとすれば、恐らく祖母よりの精神病的遺傳と思はれるけれども、元來祖母が精神病者か否かも分らぬのであるから、此の想像も當てにならない。然らば、若し母の夢を除外して、之は唯其の子供達の夢と抽象的に似通つてゐるだけだといふならば、吾人の想像は寧ろ父方の祖先が昔故意に殺人罪を犯したのが原因で、其の印象の殘跡、乃至良心の苛責が今代に現れて居るものと解釋する。何となれば、殺人犯者——父方の祖先——が後年、人目を避けて、隱遁的な生活を送つたといふ點から考へても、其の行ひし所の彼を苛責し、煩悶せしめ、晝は幻となり、夜は夢となつて、彼を悩ましたものではなからうか？此の假説から出發すれば、因果關係が判然してくる。即ち父方の祖先が嘗て何かの事から

他人と争闘し、前者は勝つたのであるが、甚苦闘の後であつたのであらう。恐らく長時間の争闘であつて、敵を仕止める迄に随分骨が折れ随つて、幾度も起ち上らんとする敵を打ち据ゑたに違ひない。

犯罪は後年發見せられずに済んだものゝ、其の犯した罪惡の印象や極めて著しく、晝も夜も幻覺的に其の光景を見たのであらう。其の影響が深く腦裡に刻まれて、遂に子孫——即孫に迄、遺傳し、斯くして、彼等の無意識状態に於て殊に夢として週期的に其の恐ろしき光景が再現したのであらう。

そこで、如上の夢を結ばしめる誘因は、蓋其の當時の行爲より、或は其の當時の姿勢に相當する筋肉の緊張状態より、乃至一般に何か精神上に不調和な所があつて然らしめる事と思ふ。要するに末梢部よりの刺戟が斯くの如き遺傳夢を喚起する様である。こゝに注意すべきは前述の如く、年長者には年少者に於けるよりも夢像が明瞭なる事、並びに妹は夢に於て受身に立つことである。併し之れ年を距ること遠きもの程即ち年少者に於ては夢は追々變形し、又融合し、漸次消失の傾向を示すものと見る事が出来る。要するに上述の夢は其の家族に

於てありし一惡行に關すべしとは報告者自身の意見である——けれども、之れは一の假説に過ぎないので、だから此の種のこととは更に十分なる研究に俟たねばならぬ。

王陽明

四十餘年睡夢中 而今醒眼始朦朧  
不知日已過停午 起向高樓攪曉鐘

明智光秀

順逆無二門 大道徹心源  
五十五年夢 覺來歸一元

夢窓國師

夢の中と思ふも今の迷かな  
もとのうつゝのなしと思へば

### 第四篇 夢學各論

下 (特種夢)

#### 第一章 小兒夢

##### 一、序論、小兒の心理状態は如何

「或る川の上に一つの橋が架かつてありました。或る日のこと、土瓶と茶瓶とが川の兩側から向ひ合つて、此の橋を渡つて参りました。橋のまん中には一の穴がありました。それで土瓶と茶瓶とは一所に川の中へ落つこちました。そしてドッピン、チャッピンと申しました。」

其の處へ、川上から一の舟が流れて参りましたから、土瓶と茶瓶とは此の舟へ上りました。そして船頭さんに成りました。」

之は四歳に成るか成らぬの聰明なる男の兒のお話で、其の前半「ドッピン、チャッピン」と申しました迄は、此の兒を可愛がつて、よくお守りをして呉れた一高等女學生が話して聞かせた事である。後部の「土瓶と茶瓶とが船頭に成つた話」は此兒

#### To Dreamland over the bay

Ho, boatman, ho!  
We want to go  
To Dreamland over the seas.  
Pray tell us the way  
To get there to-day,  
And, boatman, please, what must we pay?

Six kisses you pay  
If you want to go  
To Dreamland over the seas, you know.  
Six kisses you pay,  
And I take you away  
To Dreamland over the sunlit bay!

Here, boatman, hear!  
Come near, come near,  
And take the price, though it is so dear.  
For we see it's clear  
We'll have to pay  
If we'd go to Dreamland, far away!

*This lovely little poem was written by  
Ruth Vivian Phillipps, aged 9, and first  
appeared in the Westminster Gazette.*

(The Children's Magazine,  
August 1911.)

自身の添加である四歳の子供が、右の話は「ドッピン、チャッピン」と落したものと悟れないのは固より無理は無いが、我々に面白いのは、彼自身の考で、多少なりとも話の筋を發展せしめて、船が流下して来たとか、船頭に成るとか言ふ事である。そして子供自身には孰れの幼児にも共通である通り、茶瓶や土瓶が歩るき出したり、其れが突然船頭さんに變つたとて、一寸も不思議ではないらしい。

斯かる小兒の覺醒時心理状態が、成長したる者の何かの心理作用にも現れることは無からうか。次に抄録するのは二十四歳になる一醫科大學生U氏の夢物語である。

〔第一例〕こゝは自宅の裏の庭園なり。一疋の雨蛙が跳躍して居りしが、見る見る大きくなりて、長さ一尺もあらんかと思はるる迄に成りぬ。然るに彼は隣家との境なる小溝の中へ陥り込みて、赤色の腹を表しつゝ、浮み上りぬ。夢者謂へらく、かくて打ち捨て置かば、蛙は呼吸が出来ざる故死すべし、救助してやらんとて、水中より、彼を引き上げたり。……時に場所一變して、多くの小兒が嬉戯し居り、且、夢者の助けたる蛙も今は可愛き小兒と成りて、彼等の中に遊戯して居たりき。……(大正五年二月十三日)

〔第二例〕夢者は友人T氏と汽車旅行中の時。停車場に近きしと思ふ頃、K氏(T氏は在らず。つまりT氏がいつの間にかK氏と變り居るなり)が大變澤山の荷物を携帯するを知りて、夢者は能ふ丈け分擔して之を助く。停車場の待合室に至れば、かの大荷物を携ふる者はF氏なり(こゝに、また人物變換あり)而して夢者の心中にはT氏は已に外出したるものと思はれてあり。時にF氏は行李の一を開きて、菓子を取り出して食す。其の時K氏(T氏である可きの處)が外より戻り來りて、早く來給へと促す故に夢者は菓子を食しをるF氏を急ぎ立て、櫛外に出づれば、そこには大抵和服、角帽、用の大學生大群集せり……局面一轉、夢者の一行は湯屋らしき處にありて、今や其の群集を押し分けつゝ外出せんとす。F氏は荷物をこちらへ手渡し給へといふ。夢者は之を峻拒して「君はまだ皇太子であるから、之を持つ資格は無い」と恰も己は王者の如き心地なり。……(大正五年三月七日)

右の二例は孰れも長き夢物語の一節で、成る可く簡潔に要領のみを抄出した。之を讀んで見れば、一見餘りに變挺に思はれるが、夢者自身の近時の行爲經驗印象を調査して見ると、各一貫の理法が存して居る。勿論本問題には無關係であるから、其の説明はしない。讀者の注意を願ひ度いのは、大人の夢裡の心理状態に於て、此の二夢の如くに蛙が段々大きくなつたり、之が水中に浮ぶと溺死するかと心配したり、忽ちに蛙が變じて小兒となつたり、乃至或はT氏がK氏となり、

またF氏となり、次にT氏の歸來を豫想しつゝ、F氏を見たり、停車場が錢湯場となり、自身が王者となる等、まことにはや他愛もないことである。しかも夢中では、どれもこれも眞面目に道理に叶つた事に思はれてゐる。此の如く、かの小兒の例とこのU氏の例とを比較して、其の心理經過上に類似の點を認めるのである。換言すれば、成人の夢中心理は小兒の覺醒時心理に似て居ると言ふのである。

所で大人に於て、今述べたU氏の夢の様な事があらば、まるで狂人である。大人の夢の世界と實世界とは甚懸隔があるが、小兒のにはこれが比較的尠い。Freudも、其の著 *Traumdeutung* (p. 13) に「小兒は夢中に於ても、やはり其の衝動的の行動をして生きてゐる」といひ、更に、其の第三百三十五頁には「吾人の夢を益、深く分析すれば、益、屢、潜伏せる其の夢の原因なるべき、幼時經驗に逢著するを見ると云ひ、Sullyも既に千八百九十三年三月の *Fortnightly Review* に於て「夢は往時經驗の再現なり」とて、やはり此の事を論じた。又 C. M. Giesel は其の著「夢の構成の生理學的關係」の中に特に一章を設けて小兒の心理狀態と夢裡の心理作用とが類

似の事を論じて居る。此はかの夢裡の心理作用と狂者の夫れとも相似たる點ありとして學者の注目を惹くに至りし年代よりも後には屬するが、兎に角尙ほ之に加ふるに小兒の心的作用は近代の野蠻人乃至原始時代人類の心的作用にも類似點ありてふ一項を添へて、彼此對照通觀すれば、まことに興味ある問題と思ふ。また小兒の日中乃至夜間に於ける心理作用研究に必要な事項と思ふ。以下先づ小兒の心理作用就中覺醒時の狀態が夢裡の夫れに近似の事を述べよう。

## 二、總論、心理學的相互比較研究

1、小兒の理智が發達せず、随つて其の推論の筋路も正鵠を失し、結論が妙な者に成つて、而かも自身は正當なりとするの傾向あること。自身の實例を云へば、余がまだ五歳の頃の晝飯に、南瓜のお菜が有つたときである。

余は豫て土地の人が南瓜のことを「南京」と呼び、又支那人が通過しても「南京さん」と呼び立てるを聞いてゐたので、今食膳に上つたお菜を見て「早速日頃の問題を解決して一の結論に到達した様な氣分になり、側らの父に向ひて、お父ち

やん、カボチャの事を南京とも云ふんだね。父は、うんと頷いた。「そして南京とはチャン／＼坊主だね。父は再うなづく。「お父ちゃん、さうするとチャン／＼坊主は支那人だから、かう云へるのね、カボチャが南京で、南京がチャン／＼坊主で、チャン／＼坊主が支那人。だからカボチャと支那人とは同じ事になつてちまうねえ？」と。他の例としては、四つになる女の兒が、何かいたずらをして阿母さんに叱かれて、さめ／＼と泣いてゐた。其處へ、いつも可愛がつて下さる叔母さんが、偶、遠方からおみやげを澤山持つて歸つてお出でになつた。すると其の子は直ちに泣き止んで、「おばちゃん、あたし泣いてゐたから、うちへ来て下さつたの。」

2. 小兒には妄想多く、聯想や想像が不羈放埒なること——其の他後文にも項目を分けて述べんとする處の睡眠前の幻像や乃至幻感幻覺の生起が随分多く、随つて之等を以て實生活の事件と心裡の想像とを容易に結合させてしまふ事がある。子供が一本の竹に赤い房の紐を結び付けて、一度び之に跨ると、己は三軍叱咤の勇將とでも想像出来る。「ゼンマイ仕掛の蒸氣船の玩具を板に駛らせ

2. 小兒  
の妄想  
放埒な  
る聯想

ては黒煙濛々、怒濤を蹴立て、ドイツの潜航艇を追蹤する味方の軍艦をも想像し得る。

つまり子供が他愛も無く、幸福にオモチャを持つて嬉戲し得るのは全く此の不羈奔放なる妄想のお蔭で、大人には氣違にても成らなければ、とてもそんな馬鹿氣た眞似の出來んのは此の性質が無くなつてゐるからである。所がまた狂氣すると、今度は再、小兒に見し如き心的現象を來して、かの蘆原將軍の如く東京府巢鴨病院の病室内に日章旗を左右に翻し、手製の巨砲を据え付けて、天晴敵兵撃退の殊勳を奏するに至るのである。

又嘗て聞いた物語中の勇壯な事や、エライ話を再、思ひ浮べてそれから、それへと聯想を續けて、獨り面白く思ひ耽る事もある。自身の記憶に據つても、四五歳の頃はいつも毎朝目を開くと、自分の右と左とに居られた筈の父母はいつの間にか起牀してゐて、自分獨り、暖い日光のさし込む二階の一室に横はつてゐたのである。阿母さんが著物を著せに來て下さる迄の間は、大きな目をあき乍ら、上蒲團に掛けてある天鵞絨の襟の、或は人形の如く、或は馬の如くに小さく處々兀

げであるのを、物語中の人馬に配當しては想像を逞くし、又目をつぶりては天神さんにどうぞ、あなた様の様に、エラクなつて、詩や歌を立派に作れます様に、と祈願した。おまけに金時は強いから私も金時の様に強く成れる様に天神さんに頼んだ事も覚えてゐる。

こんな風に記憶を再現せしめて妄想に耽つたり、繪畫や紋様のものを見て、實物かの如くに楽しむ事の外に尙、小兒に多く見るのは

### 3、幻景 險裡

3、幻景 險裡幻景——睡前幻影 Hypnagogische Hallucination である。即、今や睡眠に陥らんとする前に、暗中であつても眼險裡にいろんな人物や景色が現はれるのである。名は從來睡前と云ふが、實は必しも常に睡眠前にのみ現れるのではなくて、睡り乃至夢から覺めるに方り覺醒意識が再、睡眠界中に戻らうとする時、又は覺醒時に於ても人に由つては閉目した丈で之を見る事がある。故に余は一般的に之を險裡幻景と云ふのが良からうと思ふ。

兎に角眼に就いてなにかこんな現象の有る事は遠き以前より知られてゐた處で、Aristoteles も之を述べて居る。併し乍ら、此の險裡幻景を精細に研究した

### 殘像

のは Baillarger (千八百四十五年)で、後 Maury は千八百六十一年に、其の著「睡眠と夢、Le Sommeil et les Rêves」に之を記載し、次で Greenwood は「想像と夢、Imagination and dreams」に、Ladd は「心なる著述中に視覺夢の心理と題して述べて居る(千八百九十二年)。茲に注意すべきは、險裡幻景と普通の殘像とを混同せない事である。殘像とは例へば、日中太陽を仰ぎ見てゐて、急に目を閉じると眼中に何か青黒い圓い太陽形の印象を感ずるであらう。こんな殘像は單に生理的のもの、誰にでも實驗できることである。そして此の問題に就いてならば Baillarger よりも以前に Hobbes が猶漸く近世科學の曙光が見え初めんとしたる時代に當つて記載し、例の太陽殘像記述後、幾何學的の圖形を長く注視したる後に、暗中に於ても眼前に猶其の線や角を見得る。此の種の幻像は特別の名がない、これ餘り人の論題に上らぬから」と言つて居る。險裡幻景とは、こんな單一生理的の視覺現象ではなくて、尤も視官器上に於ける刺激によつて生起する事は勿論あらうが、更に心理的作用も參加して居る事を知らねばならぬ。即 Delage は説明して曰く、眼が眼裡に何か閃く様な感應を生起し、腦髓は其に反應して此の閃光的

の刺戟に何等か心的想像畫を附會せしむるのである。此の眼珠に脈絡膜が陰裡幻景に參與してゐる證據は、此の現象のある際眼が動くのでも分る。Guyon 其の他の學者は之に賛成してゐる。余の知れる實例中でも二十四歳の一男子二十九歳の一女子に於て小兒時より常習的の陰裡幻景ありと云ひ、其の中前者は睡眠より覺めて、起き出でんとする時、山野の風景が展開することありと云ひ、後者は日中夜間の孰れを問はず、閉目だにすれば、常に小さきく形（後文就中第四一九頁及四二四—四五頁参照）の軍人が縦隊造つて駈足で通るのを見ると云ふ。つまり自意識で呼出す事も出来るのである。

又一時性のもゝとして四十歳前後の一婦人が知人の死去を聞知したる夜消燈して寝ねんとしたるに、眼前に多數の神官が大庭にて何か祭典を舉行する如き幻像が見え、點燈すれば之が消失したる事ありと云ひ、明治三十年又余自身に於ては、ある心氣爽快の夜、冷水摩擦の後、就褥滅燈したるに山脈を背景とせる曠野の景が活動寫眞的に展開したことがある。大正元年。併し余並びに四十歳前後の婦人には精神上の一種の感動が有つて生起したもので、常には知らない。

然るに前二人の男女に於ては常習的に存し、また孰れも皆二十四歳以上の成人である。而して特に小兒に於て頻繁なるは其の特長と思はれる。

G. E. Partridge は八百二十六人の小兒に就いて、陰裡幻景に關する調査をした (Reverie, Pedagogical seminary, April 1898)。「汝等が夜寝る前に目をつむると、何か見ることなきや」との間に對して、見ることありとの返答が十三歳乃至十六歳の小兒に於ては五八・五%、六歳の者では六四・二%であつた。そして十歳の年齢に最も此の現象が多い。又恐らくも少し早き時期に一度最高の率を示す時があるらしいといふ。見る物の中では星が一番多くて、百五十一人を見、色は百四十五人、人物や顔貌が七十七人、動物が三十一人、晝間の光景が二十二、草花菓實が十八人、繪畫が十五人、神様や天使が十三人である。

又千九百三年に E. Guyon は陰裡幻景や殘像のことを論述して (Sur les Hallucinations Hypnagogiques) 小兒は之等を恐ろしいものと言つて居るが、大に事實と反する。恐らく恐怖する場合は何か病的の兆候ある際に違ひない。健康な小兒は別段恐怖もせず、當前の事位に思ふ。又其の晝間に生起する夢も、夜間



の夢もやはり大した煩ひともならない。小兒に於ける此の險裡幻景は Ellis も言へる通り晝間見聞したりし事件や物語の再現するものに相違ない。尙他の原因に就きては後文に詳しく叙べるつもりである。又各兒の性質に因りて殊に度々之を見る者あるが如く、又同一の幻象が現れるのも恐らく其れに關して強き印象を蒙り、爾後習慣性に成つたものであらう。而して後年成長後にも尙此現象の殘存する事例は余が已に述べた通りである。序に附言として Ellis の「小供が悪る氣も無しに、能く嘘をつくのは一部分は此の如き特性の爲であらう」と云ふ意見を紹介して置く、但、これに關しては余にも意見あれば、他日發表し得ると信ずる。さて險裡幻景の實例は各人が有してゐる筈であるが、茲にずつと遡つて西曆紀元千六百年に天文學者 Dr. Simon Forman が其の自敘傳に書いた文章を引いて見やう。

「六つの頃、就眠せんとするや否や、いつも澤山の大きな山や丘の幻景が現れて、自分の方へ向つて来る。そして、自分を乗り越し、衝き當り、押しつぶさんする勢で席捲してくるが、自分はいつも其の頂上へ登つて了つて、何の事はない。

今度は大變な大洪水が狂ひ立ち湧き上つて、恰も自分を搔擽ひ溺死させなん意氣込みて押し寄せてくる。けれどもやはり自分は乗り越し得るものと思ふてゐた。こんな夢幻的現象が三四年程も毎晩續いて現はれた」と。  
そして彼れ自身は之れ神が其の後年の困難を豫知せさせん爲に試みられたものと信じた。

De Quincey も此の現象を精密に記述して「諸君は御承知か否かは知らぬが、多くの子供、恐らく大抵の子供は暗中にいろんな幻畫を描出する能力がある、其の原因は或は單に眼に受くる機械的作用のこともあらう、又或は之を自意的乃至半自意的に作成し若くは消散せしむることもあらう。この事に就いては嘗て自分は友達なる他の子供に聞いた時に、私はそれを呼び寄せる事が出来るし退却させる事も出来る。けれども亦場合に依りては嫌な時でも先方からやつて來る事がある」と返事したのを記憶して居る」と。

次に E. H. Clarke も千八百七十八年に「幻想」なる題下に之を論じ其の自意識作用をも認めて居る。

又聽官上にも之に相當の幻覺がある。I. A. Symonds は彼が小兒時の夜中恐怖を述べて、さかりの付いた猫の聲の類が幻覺的に聞えたと云ふ (Horatio Brown 氏の手に成りし傳記)。併し之は實際外界に猫聲があるので、險裡幻象には相當しない。聞ゆべき音聲なくして幻聽を起したと思はれるのは余が已に「奇夢靈夢の四十年」と題して書いた森谷翁の明治四十五年七月二十八日の夜の音樂の事である第三三頁。其他宗教的の傳紀中に天樂聽取の事あるも、此の類なる可く、又余自身にも一時は就眠時音樂の如きもの聞えし事があり、又一時は半睡時人聲の耳語したるを聞きし事がある。但、上記の幻景に比しては甚稀のものである。其他筋肉の痒ゆき、又抓ねらるゝ如き感覺、内臟器官に於ける知覺等も外界に對する注意力の減少するに伴れて生ずる事がある。

而して Elmer Jones の實驗によれば、クロロホルムを以て人を麻酔せしむる時も、やはり先づ現はるゝのは視覺上の幻景であるといふ。Ellis の實驗によれば、藥品 (mescal) を使用にては子供に生起する所の幻像よりは、もつと鮮明強度のもので阿片も同様の作用を呈するといふ。

以上の結論として左の如く言へるであらう。

一、險裡幻景乃至他の器官の幻覺は必しも睡眠の直前又は直後と限らず、又男女年齢の如何を問はず、何か腦髓に對する心理的、生理的、化學的乃至物理的の刺戟が強き時に生起するものであるが、就中少年時に多く、又視官に多きを見る。

二、右現象は一時的にも表れ、又常習的に成人後に於ても存して居る。之は恐らく小兒時よりの習慣性なるべく、猶ほ人によりては、常に一定の常習夢例へば汽車の夢、階段昇降の夢を頻繁に見るに至ると同様に各自相當の理由あつたものである。

三、殊に小兒時に多きは之れ其の身心未だ發達せず、大人に取りて左程でも無き事も甚しく強印象、大刺戟と成るのである。

四、藥品使用時の幻覺は反射作用、隨意的筋運動の麻酔し來ると共に、外界に對して反應せざる様になり、結果比較的に興奮状態となりし意識自己が幻覺幻感を惹起するものである。

五、藥品應用の場合を除いては、眼險裡現象等を有する人は自意識又半意識的に之を生起乃至消散させる所の支配能力を有する事がある。

さて然らば此の險裡幻景殊に睡眠前に來る所の幻影と夢とは如何の關係有りやてふ問題となる。夙に Gruithuisen 及び Burchel を初めかの有名なる生理學者 Johannes Miller も之と夢とは同一のものだと云ひ、Maury は自身が眠に入る前に斯く幻影的に現れし事物が再夢中にも出て來る事を屢經驗して、此の如き睡眠幻像は要するに「夢の胚胎作用 Embryogenic of dreams」であつて、之から夢が形成し、發生して來るのだと言つた。——尤も此の Maury 自身は幾分常規を逸したる神經性の傾向の人であつた。Mowly Vold も自身に睡前幻畫が又もや夢像として再現するを實驗して、其の同一のものなることの說に左袒した。然るに Colnot は假令二者の間相互に對比すべき相似點は認むるが、同一物とは思はないと言つて居る。次に Ellis は假令睡前幻景が直接夢裡の影像と關係せる事を經驗しないけれども、時々彼が覺醒時の意識を失つて眠に陥らんとする際に一隊の幻畫的行列が眼前を過ぎるのを見、然かも其の人物中の一人が彼に話しかけ

た事もあつて、其の聲で彼は驚いて再覺醒した。是に於て彼はまだ睡には入つて居らぬが、方に一の夢を産み出しつゝあつた事を知つたと述べて次の如く論じて居る。即睡眠前の此の状態は睡眠並に夢に入らんとする門戸で Maury の言の如く夢の構成となす材料たる可き者たるを信ずる事は出来る。されば完全なる夢と、斯かる睡前の幻影とは全然同一とは言へないとしても夢の前身である。併し余は此の孰れの說にも賛同し得ない。假に睡前幻景を見て居る人が其の儘に睡眠に陥りて前後連續しつゝ夢を見るに至る場合ならば或は夢の前階段と言へやう。又斯かる場合も無い事は無い。併し上記諸學者の類りに論據とする處の睡前幻景が夢に再現するてふ事が、何の故に此の二者の同一性なるを證明し得るか、乃至此の再現する事ありとしても何故に前者が特に後者即夢を構成するの胚胎作用だの胞芽だのと言ひ得るか。凡そ普通の夢を産出する材料としては一にして足らず、時間から言へば昔我が身の物心付いて以來最近其の日に眠り入る時迄の百般の事件空間から言へば我が從來見聞したりしあらゆる名所舊跡乃至家庭裡身邊の風物。之に加ふるに羈絆無き思想は自

由に過去、現在、未來に互つて空想的諸種の材料をも提供し來る。況んや近來夢の遺傳をすら唱ふる者あつて、其の由來は遠く父母未生以前に遡るかも知れぬに於てをや。そして其の孰れの由來なるを問はず、主として現實界乃至思想界の事件が聯想に由りて再現するのであるが、其の意識はまた顯在なると潜在なるとは敢へて影響しないのである。されば今問題となつてゐる睡眠前の臉裡幻景も、之れ所詮未だ充分に寢入らざる、換言すれば尙幾分意識が残つて居る時の一種空想的幻畫であるから之も堂々として聯想——潛在的にしろ、顯在的にしろ——の媒介に因りて眞個の夢裡壇上に再演するに至るも何等奇とするに足らぬ。之が若し夢と同一物であるならば、極端に言へば、昨宵帝劇で芝居を見物して、今曉再之を華胥の國に見たる場合に、前者が夢に再現したりとの理由を以て、現實界の觀劇も夢なりと論斷せねばならぬ。尤も人は臉裡幻景の現れるは就寤後、就眠前即ち、うつらうつらとしかける時に多いから、大に夢と密接な關係がなければならぬ様にも思はれるのであらうが、上文にも書いた通り、此の臉裡幻景は決して然か精神の昏睡状態に陥つて後に現れるのでなくて、白晝自意

識を以てしてもよく現し得る位であるから、覺醒意識存続時の一種の現象と見てよいのである。(第四一六頁參照)

● 又睡前幻景が夢の前身とも言へない。之を論ずるには勢ひ、何故に睡前幻景が生ずるかを少し精密に醫學的生理的に考へねばならぬ。

● 臉裡幻景の原因——上文説いた通り、クロロホルムなどの麻醉劑を使用すると先づ外界の刺激に對する感受性が消失し來り(但痛覺は尙存す)結局反射機運動筋の麻痺となる。けれども意識は尙残つてゐるから、此の際に比較的容易に頭腦中に於て種々の追憶や印象を再現せしめ得るのである。即、幻覺が現れたり、過去の事件を謔妄に發したりする。之と同じく人が寢に就く頃は四隣も靜になり加ふるに終日の疲勞で外來の刺激には鈍感性と成つてゐるから、頭腦内の自己刺激が比較的容易に行はれて臉裡幻景を招致するに至る。就中小兒や女子は感受性が強いから、發達したる者に比べて同じ事件でも腦裡には強く印象せられてあり、加ふるに身體の構造が薄弱であるから、益、比較的の差が甚しく成るわけで、小兒、女子に於て臉裡幻象や、及びすぐ後に述べんとする睡中謔語の

多い事は了解せらるゝであらう。併し孰れにしる此の現象は睡眠に入る前の一楷梯で決して夢と直接の関係はない。勿論斯かる現象の頻繁なる者は其の素質上勢ひ睡眠中夢を見る事も多くあるには違ひない。随つて睡眠に入るや否や直ちに夢を見てふ事も屢有ると言つてよい。併し外觀上睡眠前にも幻覺的現象があつた睡眠後にも夢があつた故にあれと之とは同一だ、又はあれは之れの前段だなど、云ふのはあまりに非科學的な早計の議論である。結局余は夢を睡前幻景とは別物にして、後者は單に睡眠の前驅に過ぎない。夢自身の前段ではないと信ずるのである。——尙附言したきは余自身には此の睡前幻景が夢に再現したる例を経験せず、他人に就きても恐らく極めて稀のものであらうと思ふ。又反對に睡眠末期覺醒時の幻景も決して珍しからず。(第二九三)

## 4. 睡中囁

前項に關聯して、小兒に多く見得る現象は睡眠中の寢言である。其の生起する原因も、視官に於ける前文の説明を發言機官に應用して知り得るから繰返さない。唯、注意すべきは斯くの如き現象の起る際は、何時の場合でも之よりも前に先づ視覺上の幻景が有りし者ならんとは麻醉劑應用上の實驗より考へらるゝ事である。Marie de Manacéine は曰く小兒に此の現象が現れし時、其れが甚強度なれば、他人より話しかけられし言葉を自動的に繰返すが、軽度の場合は暗示性が著しく、他人の思想や殊に感情を受入れるものである。即此の際、睡眠者と談話を交換し、益彼を興奮せしめ得るは俗間よく承知して居る。同氏は更に曰く、もし此の状態が十五秒間以上になれば、正規の状況を逸するに至り、殊に六分間以上續くるは危険である。又彼女は謂へらく、之れ催眠術に於けると同一の状況であつて、恐らく腦髓の貧血に由るものであらうと。彼女の研究に依れば十五歳以下の兒童に多く、殊に労働者階級の子供に多い。又少年期の少女處女の貧血性のものには普通なれども、成人者には反對に寧ろ女子よりも男子に此の事多く、老年になる程、男女とも漸く其の傾向を増してくる、性質から云へば粘液質のものが血液質や神經質のものよりも多く此の現象を來し易いと云ふ。

5. 白日夢 Day-dream とは世俗には空中樓閣と同様空想の意に使用するが、此處に敘べるのは其れとは趣を異にする。心理學上から見れば實際の白

日夢もあり得る。即、晝間に覺醒しつゝ、恍惚として夢幻的の状態に入る事があつて小兒には比較的に多い。併し大人にも珍しからぬ事で、かの Cranzet が「擬性追憶 Pseudoreminiscence (即、以前の記憶無きに拘らず、或る事物を見聞して恰、今は二度目なるかの感のすること) は嘗て或る印象を潛在意識的に受けてゐたのが今度は其れに類似乃至同様の新印象が來りて前回のを現意識上に呼び出すことである」と言ふ説をばもつと展開して、Freud は「何か物を思ひ違へる事は、自意識せざりし一種の晝間夢の追憶に因るのである」と云ふ (Zur Psycho-pathologie des Alltagslebens, 1907, p. 122.) 但、之には大に個人性を考量に入れねばならぬ。余自身には十三歳頃以後の記憶に依るに左して頻繁ではないが、數度は嘗て生起せざりし事件を二度目なるかに考へたくてならぬ事があつた。余も或は其の當時晝間夢の類を見たのかも知れない、そして、之を追憶したのかも知れない。が、既にこゝに追憶すてふ一心理状態を持て來るならば、其の追憶せらるゝ對者は Freud の言ふ如く必しも白日夢に限つた事ではなく、睡眠中に見る眞實の夢であつてもよい筈である。否、事實上、朝間には全く夢を見なかつたと思つてゐた

に拘らず、午後の二時や三時にもなつてから、ふと其の曉の夢を思ひ出すなどは所謂潜在意識が、何かの機みで、現意識に上つて來たのである。之が三日も四日も乃至幾十週年も経てやはりいつかヒョククリ現實の意識界中に頭を出さぬとも限らぬ。而して此の論法は Freud 一派の好んで用ゐる處である。然らば思ひ違ひの心理も強ち白日夢の追憶のみでもあるまい。——兎に角此の種の心的現象は、かの想像を逞しうする畫家や、文筆家、哲學者乃至宗教家の類には屢逸話として傳へられてゐる。Socrates は平素耳語する聲を聞きし事、Leonardo da Vinci が雲を眺めたり、壁上飛沫せる泥土を見たりして、想を得た事などは其の例であるが、Teysson は幼時六七歳の頃から、風に語聲ありと言ひ、其の他普通の子供でも雲や火の中に繪畫や模様を認めて恍然として居る事がよく見受けられる。余の友人 U 氏は其の八歳以後九十歳頃にかけて、いつも雨の降る日に縁端に立つて隣家の土藏を眺めて居ると、暫くして其の白壁の上の多年、風雨に曝されし爲に生じたる處々の斑點が、いつしか狐となり、しかも帯を長く垂らせたる嫁入姿の如く又其の前面降る雨脚を通じて、其の嫁入りの行列の通路、野

や家やが展開して行つた。又其の弟も同じく此の年頃に成りて、かの幻畫的の模様は恍惚たることあり、又季の妹は十歳以後十一二歳の頃に斯様の狐の姿を見つめてゐたと——但、彼等に最初の暗示を與へしは、此の話者U氏(長兄)にして其の程度も彼に於て最も強大であつた由。又 *Historie de ma Vie* の第三篇第三章に *George Sand* が自身幼時の白日夢を書いて、最初、夢で見た所の中心人物 *Corambé* が追々展化して行つた事を述べてゐる。其の *Corambé* とは神様であつて彼女 (*George Sand*) は之を祭壇を造つて齋き祀つたのである。是を以て之を觀れば *Lucretius* が野蠻人の神様なる思想が先づ夢より生ずと言ひし事は、また小兒にも言ひ得べき様である(第六〇〇頁、第六一三頁及第六四六—九頁参照)

斯かる小兒の状態は夏目氏の小品「蛇」に文學的に面白く書れてあるから、左に抄録して見やう。但、之は耳に關する一種の幻感と現實とを融合させてゐる處に興味がある(又、其の眞偽素より保證の限りに非ず)

「……二人は橋を渡つてすぐ左へ折れた。渦は青い田の中を蜿蜒と延びて行く。どこ迄押して行くか分らない流の迹を跟けて一町程來た。さうして廣い田の中にたつ

た二人淋しく立つた。

雨ばかり見える。叔父さんは笠の中から空を仰いだ。空は茶壺の蓋の様に暗く射じられてゐる。その何處からか隙間なく雨が落ちる。立つてゐると、ざあつといふ音がする。是は身に著けた笠と蓑に中る音である。夫れから四方の田に中る音である。向ふに見える貴王の森に中る音も遠くから交つて來るらしい……

「獲れる」と左も何物をか取つた様に云つた。やがて蓑を著た儘水の中に下りた。勢の凄じい割には左程深くもない。立つて腰迄浸る位である。叔父さんは河の真中に腰を据ゑて貴王の森を正面に、川上に向つて、肩に擔いだ網を卸した……

雨脚は次第に黒くなる。河の色は段々重くなる。渦の紋は劇しく水上から回つて來る。此の時どす黒い波が鋭く眼の前を通り過ぐさうとする中に、ちらりと色の變つた模様が見えた。瞬を容さぬ咄嗟の光を受けた其の模様には長さの感じがあつた。是は大きな鱈だなどと思つた。

途端に流に逆つて、網の柄を握つてゐた叔父さんの右の手首が蓑の下から肩の上まで彈ね返る様に動いた。續いて長いものが叔父さんの手を離れた。それが暗い雨のふりしきる中に、重たい繩の様な曲線を描いて向うの土手の上に落ちた。と思ふと草の中からむくりと鎌首を一尺許り持上げた。さうして持上げた儘、屹と二人を見た。「覺えてゐる」

聲は慥かに叔父さんの聲であつた、同時に鎌首は草の中に消えた。叔父さんは蒼い顔して蛇を投げた所を見てゐる。

「叔父さん、今、覚えてゐると云つたのは貴方ですか」

叔父さんは漸く此方に向いた。さうして低い聲で、誰だか能く分らないと答へた。今でも叔父に此の話をする度に、誰だか能く分らないと答へては妙な顔をする。(夢十種より)

次に余自身の白日夢と思ふ一實例を擧げて他の項目に移らう當時の余の年齢は五歳頃であつた。

「父親と一所に天理教會の集會所へ行つた。こゝには大きな廣い〱御座敷の様な所があつた。其の正面に荒蕪を敷き、白木の三寶を載せたる幾段かの棚がある。其の最上段の中央にきら〱光つた大きな圓るい鏡があつて、何だか神様の様な氣がする。また實際これは神様で狐が其のお使ひ物であるさうな……父親と二人、一つの圓窓のある白壁の所まで近寄つて屋敷の中を窺うてゐた。するとスーツと一人が現れて側目もふらず圓窓を右から左へ過ぎつた。どうも普通の人間ではないらしい。と思うてゐるうちに、又も

一人スーツと現れて同じく前きの影を追うた。自分はあれは何だと父に聞いた。父はあれは狐が化けて居るのだと答へた。……

二三日経てからお晝御飯の時、父親に向つて此の間は天理さんへ行つて、狐の化けてゐるのを見たねえと、一は母や下女やの前で前日の實見譚に裏書きの保證を興へて貰ふ爲に、一は其の時の見物の面白かつたことを、もう一度回想する爲に、聞直した。所が父はさも怪訝な顔をして一々、時や場所や狐のお化けやを聞き糾したあげく、それは、お前が夢見たのだらうと論結せられた。

父の言に依れば近日天理教集會所や圓窓のある所へ行つた事すらも無いさうである。自分は大に失望した。そして夢とするならば、どこ迄が夢で、どこからが事實か今でも分らない。併し、此の時以來、こんなものが夢と云ふならば、夢とは面白いものだといふ思想が生じて今に至る迄續いてゐるのである。

6 小兒の夢中心理が現實界と近接せることは、上文によりても知られ、又注目を要する點である。即、小兒には夢で見たことを實際事と思ひ誤る傾向が強い。Jewell も之を記述して、殆、大抵の兒童に見る處、但、少年季乃至成長せる人に於て



も往々見る所なり」と言つて居る(American Journal of psychology, Jan. 1905.) 此の傾向は眞に實際上重大である。何故なれば、小兒は自身故意に人を陥るゝつもりでなくして、他人をわるく言ふ事がある。かの有名なる犯罪心理學者 Huns Gross は斯くの如く恐らく夢を見た爲であらうと思はるゝ二例を挙げ、又斯かる場合は其の當人は大抵二三日も経つてから言ひ出し又初めて精神が興奮乃至沈靜状態に成るので推察せらるると言ふ。余自身の前記の夢から見ても如何にも然うらしい。

如上の事實は要するに小兒に於て、覺醒時心理と夢中心理とが似通へる事を示すと同時に又夢中心理の作用が鮮明強大である事を知らしめる。更に其れが想像力に富める子供であるならば其の色彩鮮明の夢中世界が往々にして後年に影響を及ぼす事のあるのを知らねばならぬ。

Rachilde (Vallette 夫人) は其の少女期の事を記して、彼女の夢は甚鮮明であつて、往々一つの身體に覺醒時と睡眠時との二種の吾があるのでないかと疑ふた事もあつた。時々彼女は欺かれたる如く、實生活が夢かと思ふ事もあつたと。

彼女は十二歳の頃から本能的に筆を執る様になり、また小説作家となつたのも其の夢を書き上げたのが初めてである (Clahaneix: La Subconscient, p. 49) 茲に吾人は小兒の心理と其の夢中心理とが近似の事を知つたが、小兒以外に於て之に類似の事はなからうか。以下項目を更にして狂者の心理と夢の心理との比較研究に及ばう。

7 狂者の心理と夢の心理——此の間に何等か近似の關係の認められしはすでに Aristotle の時代にして、十六世紀には Du Laurens が精神病と夢とを比較して居る(も少し精しく言へば、彼は「メラランコリー」に就て論じたのであるが、其の「又更に近代になつてはツールの Moreau はかの大麻の一種より得る液汁の乾固物、ハシシチ」Hasehisch なるものの中毒は狂氣する事である、そして狂氣は白晝の夢であると論じた千八百四十五年)。

Hughlings Jackson は夢の凡べてを調べよ、然らば狂氣の凡べてを了解せんといひ Justrow は狂氣其の他譫妄、藥物中毒等もみな夢中意識の變型だといふ。

伊太利の心理學者 Mosso は千八百七十八年の出來事として、其の著恐怖の中

に、左の一例を擧げてゐる。

四三六

グラスゴーに於ける二十四歳の男子フラーゼルなる者が、一夜俄然寢床よりはねおきて、傍に寢て居る我が兒を捕ふるや否や壁に叩きつけ、其の頭骨を破砕して、無残や己が愛兒を打ち殺して了うた。妻の叫喚にふと目が醒めしフラーゼンは實に狂獸が室内に闖入して將に我が兒を喰はんとする夢を見たので之を救はうとしたのである。

さて此の男は顔色蒼白の神經質で、智力鈍く其の職務には努力する一職工であるが、其の生立を見れば、彼は幼時より恐ろしき夢に襲はるゝ事屢で常に臥牀を飛出して叫んだと云ふ。其の誘因は晝間の強印象ありしものに由るが如く或る時は妹が水中に陥らんとしたのを救ひてより、其の後頻回夜中に起きて妹の名を呼び又之を救はんとする如き態度で妹を抱いた。結婚後は恐ろしき夢を見る事益多く或は火事と叫びて飛出し、或は我が兒が痙攣したと泣き、或は猛獸の襲來なりとてわめき、乃至妻や父や友人の頸を捕へて窒息せさせんとしつゝ、猛獸を生捕つたりと信じたる如き其の例である。所で遺傳關係を調ぶる

に母は常に癲癇病みで、之が爲に失命したりしもの、父も亦癲癇性であつた。又叔母と其の子とは狂者、其の妹は痙攣で夭死した。

之は元來、遺傳的に常規を逸したる素質を持つた例ではあるが、兎に角夢中の心理と精神病者の心理とは似通うてゐること、且、夫れが今の如き病的の者に於ては前項敘述したる小兒心理の特性に似て現實界と夢幻界とを混同するのを充分認め得らるゝ。即

8、狂者  
の心理と  
小兒の心  
理

8 狂者の心理と小兒の心理——とが甚類似の點有ることを知るのである。尙之に就ては、世間が此の二者に對して使用する言語を観ても——例へば、片言まじりだの、無器用、無巧者だの、稚氣だのといふ言葉は、呂律のまはらぬだの、馬鹿氣てるだの乃至、足らぬ、分らぬなどと云ふ言葉と比較して見れば、要するに内容同一の事を一は未熟の小兒に對して云ひ、他は病的のものに向つて應用するに過ぎぬのを知るであらう。然らば狂者に見る所の特長は何であるかと云ふと、狂者自身の感覺をば己が心から造り出せる他の人物等に附性せしめ、又實在せる一人格の一部分から各様の人格者を造り出すことである。例を以て言へば、

四三七

何か食物の味が一寸變であると、誰か自分を毒殺するつもりぢやないかと考へ出す。耳に他人の聲の様なものを聞くと、誰か居つて電話をかけるとか、強音器で話すとか、又は催眠術をかけるとか言ひ出す。何だか腹の中に妙な感覺でもあると之は誰か己れのからだの中へ這入り込んでゐやしないかなどと思ふ。つまり自分の有する感覺が他に人があつて、それを行ふ様に思はれ、又は其の人が故意乃至惡意的に之を行ふといふ風に解釋する傾向が氣違の特長で、之あるが爲に何事でもない音響を嘲笑の聲と聞誤つたり、又幽霊の正體見たり、枯尾花といふ如き誤認を來す(錯覺 Illusion) 又は何だか辻褃の合はぬ事を喋舌くつたり(錯亂 Delusion) 又は何も無いのに人が居る様に見えたり(幻覺 Hallucination) する。換言すれば五官に於ける感覺が普通ぢやないといふ丈で無く、其れに想像的の人物や人格を造り出し、又理由をこね上げる。(前及び本項は寔に概論のみ。ひ八二五頁以後殊に第六項參照) 之は吾人の夢中心理には常に絶えず現れる事、又小兒の覺醒時にも常に見られる所である。余は已に第四一二頁に於ても書いておいた通り、子供が木馬に跨つて堂々たる大將軍を氣取る時に其の眼前には叱咤すべき三軍を彷彿して居

るのであらう。少女が「飯事」まんじゆをして遊ぶ時は其の小家庭團樂の愉快をさながらに描き出して居るのであらう。殊に子供の恐怖性は當にこの錯覺的心象に因る者である。たとへば、

(1)我が四五歳の頃、一二歳、年上の子と遊んで居つた。其の時余は他所の子供が持つてゐるから自分も欲しいと云ふわけで、數錢を投じて其の子に眞赤な恐ろしい顔の天狗の面を買つて來て貰うた。さて愈誰かが被ぶつてみると云ふ段になつて、かの年上の子が、矢庭に自らそれを顔面に當てて「うをーッ」と云つて恐ろしげの唸り聲を發した。すると余は二三秒間は之を見詰めてゐた様であるが、突然わあーッと泣き出した。怖わかつたのである。年長の子供は之にびつくりして急速に面被を剥いて「あら、何でもないんだよ」と言ふと、自分も何でもなくなつた。手に取つて見れば一片の顔子に過ぎなかつた。

(2)尙も一つ自身の例である。余の家の二階へ通ずる梯子段は片側白壁に沿うてしつらへてある。故に人の昇降するに伴れて白壁が摩せられて手垢で汚れるのである。下から眺めると恰、悄然と佇める人影の如くに見える。之をばかの年長の子供が一度あれは幽霊だよと言つたので、夫れから後は其の矚目たる陰影が恐ろしい氣に見え出した。見つめて居れば居る程さうであつた。之は子供の心に與へられし暗示に因るとはいへ、單に其れのみでない事は自身の心理を内省して見て、幾秒間か

1 ッと見て居るに従つて一種の錯覺的現象が起つてくるらしい。  
(3)之に類する事では、友人が其の少時、二階の大きな柱の裂罅が鬼面の如くに見えたので、他人と同伴でなくば、其の場所へ行けなかつたといふ。

(4)次は余が去年の初め、實驗した事であるが、余が顯微鏡を以て鏡りに一標本の研究に熱中してゐる最中、數へ年の五歳になる男の子がやつて来て邪魔をして仕方がない。遂に余は其の顯微鏡の圓筒の傾斜をグッと鋭角にして「之は大砲だから、いたづらすると打ち殺すよ」と言つた。すると其の男の子は「こんな大砲が——」と言つて囁く。「いや打つてやるぞ」と言ふと、「うん、打つてもいゝよ」と平氣である。余は照準を定めるまねして暫くジーツと男の子の目を睨んでやると、突然「お、こわい」言つて、一所懸命這々の體で逃げこらげて行つた。つらく、前後の關係や子供の様子から見ると、鏡に一種の錯覺か幻覺かが生起したに違ひない。

以上の如く狂者の心理は小兒の心理と相似な點を見たが、今度は

9 小兒の心理と大人の夢中心理とは如何の關係を示すであらうか。

(參考例なかと云ふ名の十六歳の女子の夢。現在東京市内に居るが夢裡の場所は故郷の千葉縣である。夢は私が死去しましたので、大勢の人々がお弔ひに参つて呉れました。其の中には東京在住の人々もまじつて居られました。そして妙な事には私も其の人達と同じく可愛さうだとして、聲を立てて

泣いてをりました(大正四年五月中旬)

(第一例)S氏(二十二歳の男子)の夢——自分は絞殺の極刑に逢ひしもの如く、澤山の他の死刑囚と共に縊られしまゝ、死刑臺上に垂れ下がらる。其處へ看守らしき者が巡視し來りてS氏を視乍ら、「は、あ、此奴も死ん居る哩」と併し自身は意識明瞭であるので、成る程、靈魂は不滅の者ぢや」と思つた(大正元年秋)。——尙、第二七九頁の第一例及び其の説明をも參照あれ。

初の例は十六歳の女子であるから、余が引かんとする例としては、勿論若過ぎる怨みが有る。併し乍ら女子は早熟であるから此年輩ならば大人と小兒との中間と見做してよからうと思ひ、旁々第一例と比較する爲、參考として併記した。こんな風に成長せる者に於ける夢に、往々、自我が分離して自分に生じたる事件を他人の事の如くに思つてすましてゐる。さて赤ん坊乃至嬰兒の行動を見ると、よく之に似通つた點がある。孩兒は其の兩脚を前へ投げ出させておくと、さも珍しさうに、それを眺めてゐる事がある。そして其の運動を注視してゐたり、それに戯れたり之をいぢめたりする。つまりまだ、自我なる意識が充分に明

瞭でないから其の兩脚が我の一部分とは知らないものである之に就ては G. Stanley Hall の千八百九十八年の『The Early Use of sense of Self; American Journal of Psychology. April 1898.』を見よ。且又今こゝに述べてゐるのは一二歳の孩兒の心理である。故に之よりも年長の少年季前後の者の夢中心理とも當然比較して何等か意味あるものを見られやうと思はれる。果せる哉十歳前後の小兒が夢に「盜賊襲ひ來りて己れの首を斬り取り、穴の中へ埋めた事を見た由の例、竝に十一歳の男兒が家の近所の荷物揚場に行かんとして電路を過ぎり、電車に轢かれたから葬式を出した(嘗て、電車に事實上轢)といふ似たやうな例が吉田氏の稿として大正二年三月及四月の兒童研究に載つてゐる。Cooley は「孩兒は自分といふ事を二様に表す。即、一は孩兒自身の身體を指すと、他は行動を伴へる所の自己存在の指定をなすことで、前者は「孩兒」、後者は「私」といふ事になる」と言つた『The Early Use of Self-Words by a Child; Psychological review. 1909, p. 94.』つまり孩兒は身體の遠方の部分に對する感情や行動は、まるで成人の夢中に於ける感情や行動に能く似てゐる。

も少し成長した少年季の行動や感情に相當する者としては余は左の一例を挙げ得る。

〔第三例 Y 氏二十二歳の帝大理科の大學生の夢——東都に來りてより已に二ヶ月になるも、夢中の場所はやはり故郷にて、自身は中學生位の心地なり、同年輩の學友と共に演習を見物に行く。廣き運動場の如き所に澤山の馬が繋ぎあり、彼の友達はそれが恐ろし、こわしとて近づくことを得ず。彼は之を慰めすかしつゝありき。〕

以上の諸例を以て見ても吾人は Cooley が「成人の夢中の心理は小兒の普通時の心理に相當し、成人の睡眠時の潜在意識は胎兒の心的状態に相當す」といふ統合的の言を想起する。即之に依れば夢とはかの昧然的、且無個性的ながら存する處の胎兒期精神状態より自我が離脱して現れる者だといふ事になる。Ellis は之を説明せん爲、曰く多くの動物が休息時乃至睡眠時は胎兒期の位置を取る。例へば鴨や鶏も其の卵殻内に在る時は其の頭部を腹の方へ向けて、羽翼の中へ突込む。又犬も寝る時は脚を引合はせ首を屈め、體の後部を引寄せる。人間も胎

内に居る時、竝に睡眠中には屈筋が伸筋よりも多く作用して、圓く屈むの傾向を示すと。即、此の肉體上の關係と相似に精神上にも上文の如き現象の存するを理解せんとするのである。斯くの如き説に就きての議論も本論には交渉無い。唯讀者をして小兒心理と大人の夢中心理との相似點を認めしむれば足るのである。さて成長した人間と言つても文明人もあれば野蠻人もある。無論今迄の成人は前者を指したのであるが、次に

10 野蠻人の心理と小兒の心理とを比較せしむれば如何？野蠻人が其の肢體の支配に於て小兒よりも優勝なるとは論無いが、精神的の方面に於ては常に其感情思想をば客觀視し、自己以外の物と見る傾向がある。原始時代の人類が斯くの通りであつたので、此の性向が變て現今文明人種間にも傳唱せらるゝ傳説とはなつたのである。即、こゝに夢と傳説との關係が生ず。原始期に於ては彼等は夢中の人の如くに何に由來する所の感情とも思想とも自ら知らぬ乍らに其中に生活し又夢むる人と同様に之を巧者に一戯曲に仕組んだ。斯くして人類史中の萬物有心の思想の時代となる。此の際の原人の言葉には神や精靈や鬼

10、野蠻人の心理と小兒の心理

夢と傳説

や妖女や幽靈やが澤山現れて、其の傳説中に引用せられる。かくて後代の人種が此の域を脱したる時代に於ても多少傳來の説話は承傳せられて行くのである。余は嘗て文學の才ある一少年が一篇の英雄譚を物した話を聞いた。所が其の主人公たる英雄が話の進むに連れて、當に退治せらるべき獅子其れ自身に變化し、果ては猛獸と主人公とが同一物に成つて了つてあつたといふ。大人がこんな筋の話をすれば立派な氣違ひである。小供がこんな物語を書けば文才ある神童である。蠻人がこんな神話を作れば後世史家や文人の貴重品である。されば子供の方から見れば子供の心理は原始人類乃至近世の野蠻人に似て居ると言ひ得る。尤も嚴密に言へば現今の蠻人と原始人とが同一とは思へない。けれども如上の觀察をして見れば、吾等の夢中の思想や感情が吾人日常のそれらに似てゐるよりも、尤よく近代の蠻人乃至原始人に近似してゐる事も疑ふを得ない。だから Sully は睡眠中に吾人は原始型經驗に歸るといひ、千八百九十三年)又 Jastrow は夢とは原始型思想に復歸することなり (The sub-conscious) と言ふ。斯く蠻人共の現實生活と其の夢中心理とに大懸隔の存せざるは、猶、小兒の心理

と小兒の夢中心理に於けると同關係である(前文參照)。だから彼等は一方の世界の問題を他の世界の現象中で説明するのも一向矛盾と思はない。即ち Taylor の言ひし如く前記の萬物有心説とても夢の中に其の原始宗教乃至原始哲學の萌芽を發するならんとの考も起る。但、近來殊に Durkheim (千九百九年及 'Law' 一書) (千九百九年)等は之に反對するので殊に前者は「原始人が夢を左程重大視したとは思へない。何故なれば近代文明人間の最下級なる穢多の如き階級はまづ原始人類に當るが、彼等が特に夢に注意を拂ふ様子もない」と云つて居る。併し前者の説の如く、夢中に其の根元たる證據が有りと雖、他の所にも同様に證據あるか無いかを究めねば片手落ではあるが、又、後者の如く近代文明の最下級民と原始人とを同一線上に比較するのも間違つて居る。原始蠻人が山野を駆け廻つて狩獵にはた戰闘に従事し、又水草を逐ひつゝも絶えず、森羅萬象に向つて驚異の眼を瞪りたる太古の生活と、現時賤民が比較的秩序行届いたる社會の一隅に住して、汽車や電車や飛行機や無線電話にすらも慣れて驚かざる開化の生活とは、形而上竝に形而下に覺醒時乃至睡眠時に、其の受くる所の影響は蓋比較

にならないと思はれる。

萬物有心的の思想が夢から生れるにしろ、生れないにしろ、野蠻人にとつて夢其の物が已に不可思議なものであつたに違ひない。故に彼等は夢を以て或は靈魂の出遊とし、或は神の示現とし、或は死者の來訪とし、或は動植物乃至器物の精靈出現とした。但、之は古代人の夢に對する思想として、他の機會に述べらる可き問題であるから、詳論は其の節まで省略に従ひ、隨つて之に對比せしむべき小兒の夢に對する思想及迷信は後文に書くこととする——。

以上、余は大略、小兒の心理及其の夢中心理を各種の心理現象と對照比較して、重要な點は敘述し得たつもりである。茲に其の結論として、次の如くに言ひ得ることは讀者も容易に肯定せらるゝ事と信ずる。

1. 小兒の覺醒時心理には、論理的誤謬多く、其他、臉裡幻景乃至白日夢が屢存すると又之は其の夢中心理とも、大人に於ける如くは、大差無き事。
2. 隨つて、小兒は現實と夢とを混同し易き傾向ある事。
3. 小兒心理、小兒の夢中心理、竝に狂者の心理、蠻人心理、大人の夢中心理と相互

近似のこと。

是より以下は篇を更めて、主して小兒夢の細目に互つて彼べやうと思ふ。

三、各論

1、小兒  
夢と年齢

(1) 小兒夢の生ずる年齢

余は嘗て満四歳の男兒 U M 四、五歳宛差のある兄と、姉とありに、夢を見るかと問うた處が、彼は其の意を解せざる様であつた。次に夢の色は赤いか、青いかと聞くと、「青い」と云ふ。「鼻がついてゐるか」ときくと、「附いてゐる」と云ふ。又他の満二歳十月の男兒 F、K、二歳年長の兄ありに同一の問を發すると、彼は兩手を左右へひろくひろげて、「こんなを見た」と、恰夢は一定の大きさある動物か、品物かに思はれてゐるらしい。之ではまるで無茶苦茶である。

けれども子供は、無責任に勝手な事を云ふから、之を以て彼が夢を知らぬとは断定出来ない。又嘗て、他の満四歳十月の男兒 J、K 同じく四、五才宛差のある兄と姉とありに同じ問を發すると、知つて居ると云ふ。其の時兄の子供が傍から去年の冬——即彼の三歳十月内外の時——に其の睡眠中、突然狐が噛みついた

とて泣き出した。併し實は己の足趾を炬燵の火の中へ突込んで火傷したのであつたと語つた。此の問答の際、余は東京名所圖なる繪本を擲げて居ると、かの小さき小兒は、晝間こんなものを見たらば夜は直ぐ其の夢を見るよと言つた(大正元年九月三日)。

又満三歳前後の男兒 H、H は、其の夏の或る夜のこと、兩親が見送る可き人ありて、停車場迄行きし間、其の子を下女に托し置きしに、不意に泣き立て、どうしても泣き止まぬ。しかたがないから、下女はおんぶして、門前を徘徊しつゝ、兩親夫婦の歸宅を待つてゐた。親が歸つて其のわけを聞くと、「さつきおばちゃんが来たよ——そして蚊張の向ふのあの邊に立つてゐたの」と云ふ——彼の祖母は此の時、遠く離れたる故郷に居た——それでは、ひろちやん(子供の名は何と言つたの)と聞くと、ひろちやんはね、こはかつたから、蒲團かぶつて寝てゐたの」と答へた(大正二年夏)。

之等の事實から見て、小兒が自覺的に夢を見若くは之を發表し得るのは、三歳頃として可からうと思ふ。尤も嬰兒の發達と動物心理とを比較して、George John



Romanese が其の著 *Mental Evolution of Animals* に於て、人間の誕生八ヶ月は動物心理の鳥類に當り、此の時期に畫を認識し言語を悟覺し乃至夢を見るとして居る

(2) 小兒夢の年齢上に於ける差異、内容及種類

余が最後に擧げし兒童の滿一年後、即滿四歳前後の時の夢日記を二つ引いて見やう。

〔第一例〕ゆうべ、かあちゃんはお巡査さんに切られた夢を見たよ、大正三年十二月十二日——添寝してゐた彼の祖母が、之を肯定して曰く、夜中「かあちゃん！」とて泣き出したと。

〔第二例〕ゆうべは森永の自動發賣器から、お菓子をかう夢を見た、大正三年十二月十三日——之は前日の印象であつた——  
こんな風に滿四歳のH、H坊は明かに夢を自覺してゐる。又二日續いて夢をみてゐる。

けれども、前號に既に説きたる通り、五歳、六歳に成つても、夢だか現實だか分らぬ事も勿論ある。明かに覺醒時意識と、夢中意識とが判然して來るのは就學年

齡後、即滿六七歳以後であらう。

そして、年齢の進むに伴れて、其の内容乃至種類の複雑多様となるのは、顯著なる事實である。前記H、H坊の三歳以後五歳に至る三ヶ年間の觀察に依つて、其の代表的の例を出すと、

(a) H、H坊の三歳の時の夢は、ゆうべおとっちゃんに、どこそこへ伴れて行つて貰つた。又は、おばあちゃんが、あすこへ來たと云ふ如き、單一事件、單一要素のみから成立つてゐるに過ぎぬ。但、此處に附言せねばならぬのは、此の子供は、時々朝起きると誰も問はないのに、ゆうべはこんな夢を見たよ、とて親に物語る事がある。母親は、之れ恐らく、自分達二人が夢の話をするのを耳にして、然るのであらうと言つて居る。そして、同兒の、滿四歳の年の末に及んでは、

(b) 「おばあちゃんが、國へ歸るので、(以上第一要素)坊が見送つた、(以上第二要素)けれども、おばあちゃんは、坊を汽車に乗せずに、ひとり行つちやつた、(以上第三要素)」

といふ夢があつて、之は首尾一貫して、祖母の歸國てふ單一事件に關し、其の中で、H坊の見送りなる一行動と、祖母が單獨で出發なる一行動とから成つて居る。

之を要素又は因子の數から言へば①祖母の歸國②H坊の見送り③祖母單獨乗車なる三條から成る。即之は單一事件、二行動、三要素の夢である。H坊は此の際ワーツと泣きつゝ、目を醒まし、「ひろちゃんも汽車に乗つて行きたい」と云うた(大正三年十二月四日)

同じ子供が満五歳に成つた頃は、餘程複雑さを増した。

(c) H坊がいたづらをして、電車のレールを切斷した(第一行動要素) 車掌は之を見て「之は困つたなア」と言ひつゝ、思案して居る(第二行動要素「以上第一事件」) 所が他の家へ、泥棒が這入つた(第三行動要素) 故にお巡査さんがやつて来て、之を追駆けた(第四行動要素「以上第二事件」) (大正四年八月十一日)。

之は二事件四行動二行動が一要素から成つてゐる(の夢である)。

尙他に、

(d) 電車が向ふから來た(第一要素「第一事件」) 車掌と運轉手との二人は梯子を電車に懸けて(第二行動要素) 蟲を取らうとした(第三行動要素) けれども二人は落つこちた(第三行動要素「第二事件」) 其處へおばけが現れた(第四要素「第三事件」) すると又向ふから電車が來り

(第五要素) 遂に衝突して紛微塵になつた(第四事件) (大正四年九月十九日午前七時)。

右の夢は前日此の小兒が電車路に石塊を置いたり、電車の後ろから之を追駆けたりしたので、祖母に大變叱られ、其の後二三日は外出を禁ぜられたが、此の印象が深かつた爲と思はる――

此のH坊五歳の當時の状態は、體健二三年前一夜劇しき發熱ありき。其の爲か否か現時足部に多少の缺點ありて、歩行時稍跛行の傾あり。資質聰明神經過敏。家庭は中流である。

其他H坊の五歳の時に於ける夢の種類は左の如し。

- 1 祖母(平素寵愛して呉れる人)
- 2 飛行機
- 3 電車で他の子供が操かる
- 4 他のうちへ泥棒が入る
- 5 武士同志、又は他の子供達が喧嘩してゐる
- 6 他の人が高處から墜落
- 7 おばけが出る

こゝに特徴とすべきは、其の夢中の役者たるものが、且坊自身でなくして、大抵他人の行動に關する。唯飛行機が上つた時、兵隊が萬歳！と叫んだから、ひろちやんも萬歳というたといふ類は、自家の行動に屬するが、しかも純粹獨立的の所作ではない。之れ一般に自家自身の經驗に乏しき小兒としての特性なると共に、事物を客觀的に觀んとする傾向の此の小兒の個性であらうか。

さてかゝる五六歳の子供の夢には、まだ殆ど物を思考する夢例がない。今最後に掲げし(d)例の如きは複雑で、車掌と運轉手とが切斷せられたレールを見て考込む如きは面白いが、まだ自身が考案者たる場合ではない。

然るに、考案的の例は、余自身に於ては、滿八歳に近き頃現れた。余が父は、余の滿七歳九ヶ月にして死んだのであるが、夫から間もなき事であつた。余は何か玩具の自動汽車の類を製造せんとして、一所懸命に工夫を凝してゐる時父が傍の火鉢に手を翳しつつ、前方のお臺所の褐色の壁を指して、あの土で製造すれば宜しいと云はれた夢を見た。之は余に於ける智的方面の夢の最初であると記憶する。自身が兎つ追いつ考へて、事件を處理する如き夢例は、吉田學士が兒童研究(第

六卷第)に報告せられた。即

一男兒、年十一、體格上等、尋常小學校第二年、成績優等、家庭下の上、——一貧家の兒である。

「兄が何故か交番所に拘留せられてゐる(二要素)故に自分は交番所へ行き、地面に下坐し、兄を勘忍して下されと嘆願す(三行動)願聽届けられて兄は許された(一)兄と共に歸宅後、兄より五錢白銅一個を貰うた(二行動)」。之を以て明日は何を買はうかと思案してゐた(一行動)。

此は徹頭徹尾、兄の宥免を乞ふ事に關して、理義一貫せる夢で、二要素、六行動、四節一事件から成立して居る。

其の他、此の兒童の夢を二十二日間に互りて調査の結果、八日は夢無く、四日は忘れ、残り十日は夢みて居る。其の内容の種類は

- 1 蛇、馬、魚等に苦めらるゝ夢、又やもり退治の夢
- 2 巡査に叱らるる夢、又は巡査に懇願する夢
- 3 電球にて火傷、又は電車や汽車に轢かる

之等各項の夢は一般の兒童にも共通的に見るものである。次に、同報告中の十三歳の男兒の夢——本人は體格中等、尋常小學二年、成績劣等、歩行蹣跚。口涎を垂らし、言語不明晰。其の二十八日間調査の中、無夢三、忘却四、結局、夢を記載し得たりし日數二十一日。其の種類は、

- 1 狐(二回)、狼(三回)、蛇(二回)
- 2 泥棒(三回)
- 3 階段や柿の木から墜落
- 4 巡査(二回)
- 5 活動寫眞(二回)
- 6 恐怖夢、追つかげらるゝ夢、迷子となる夢
- 7 神様や閻魔の出現、及おぼけ(二回)

同兒の面白い夢例は左の如し。

三月十六日の夢——麻布網代町十七番地の野原に一人にて遊ぶ(一要素)(一行動)。神様來りて共に山の奥へ行く(一要素)(一行動)(一節)。山の奥より狼出て來りて喰はんとす(一要素)

(素)(一事件)。神様助けて呉れる(一節)。夫より雪盛んに降りて、家に歸ること能はず(一要素)(一節)山の奥へ奥へと進み行けば山奥に蟹あり(一行動)(一要素)。蟹に問いて曰く蟹さんくどこへ行く。蟹答へて曰く、柿を取りに行く。あなた柿を取つてお呉れ(一行動)。故に柿の木に上りて、取つてやらうとすれば、木から落ちた(一行動)(一節)。又山の奥へ行けば閻魔さんが來た(一要素)(一事件)。之は六要素、四行動、六節、一事件から成るので、また多少彼のH坊の最後の夢(d)とも似て居る。

又余は十四歳中學校第一年、體健、家庭、中流の一少年(S、T)に就きて、約二十日間に互り、同居調査したる結果、其の種類として

- 1 いたづら、魚釣り、風揚げ
- 2 飛行船
- 3 鷲
- 4 空中飛行(從來の経験二度と記憶すと)。

又此の年輩の兒童に於て、余は甫めて、追想夢なるものを見た。即ち、夢者は嘗て住居したりし遠方の土地(K)に來り、既に二三日を経たるものゝ如し——さて明

日歸國せんとするに就き、朋友のT及M兩氏を訪問せんとす。此の夢者は前記のS、Tであるが、彼の父が其の前日、同地Kへ出張したる爲、其の印象と回想とから、之を結夢したものと思ふ。同少年の夢例中、複雑なるものは左の如し。

「夢者は一の斷崖の如き處へ、弟のMと共に رفتた<sup>(一)行動(節)</sup>。弟は電信器の如きものを、岩石を以て破壊に取係り、遂に之をメチャクにして了つた<sup>(一)行動(節)</sup>。其の時、人の足音が聞えて來たから、叱られてはつまらぬと思つて、自分のみ他處へ避け隠れた<sup>(一)行動(節)</sup>。さて來た人は余(即著者)と他の一人K氏、此の小兒の叔父にして目下同居であつた<sup>(二)要素</sup>。K氏は彼の弟を捕へて、ウール、ポリーをつかまへたと叫んだ<sup>(一)要素</sup>」

此の夢中の「ウール、ポリー」は夢者の造語らしく、近時彼が稍熱心に英語を稽古してゐるからの影響であらう。又夢全體は兄弟協同の惡戯を以て終始し、七要素、三行動、三事件から成立する。

こゝに以上の諸例を通觀するに、かのH坊五歳の夢には二事件のもの<sup>(行動と要素と)</sup>は合致して、又は四事件のもの<sup>(節は)</sup>を算ふるに反し、十三四歳の小兒(S、T)は成程、

要素や行動乃至節の數は多いが事件は單一、即首尾一貫して同一事件に關する夢である。之は注意すべき心理發達の傾向で、其の單一事件中に因數の多きは、即、統一的能力の發達し來るを表すものである。然るに五歳前後の幼童に於て因子數が少きに係らず、事件數の多きは、因子數も少く、事件數も少き其れ以前に較べては、心理作用の複雑さも増大し、記憶力も増加したるを證する事は勿論であるが、それと同時に人は徒らに事件數の多きを以て心理作用の高等になつたと誤解してはならぬ。何となれば一般に夢には觀念聯合の解離現象の現るゝを以て一特性とするのであつて、之れ、覺醒時意識の統一作用の缺損したる一證、即ち一種の衰退作用である。故に五歳の小兒に事件數多くして、十三四歳の少年に單一事件の夢の現れるのは寧ろ、當然にあり得べき事である。

さて、もう一度吉田學士の所報<sup>(兒童研究第十、六卷第九號)</sup>を參考したい。それは有益なる調査であると同時に、一面統計上に就きて疑義があるからである。氏に據れば、貧兒の尋常小學生二年、三年及び特種夜學の百三十六名、年齢十乃至十二歳の夢、二百七十一夢として、内譯を左の如く記載して居られる<sup>(調査は二月七日と、三月十一日の二回、皆前夜の)</sup>

夢を語らせ)——但、原著は廿四項として順序も不整であつたのを余は勝手に並べ換へた。勿論意味を變じ數字を誤らしめる如き事は斷じて無い。

- 1 動物の夢は多くして五十三例、其の内譯
  - a 恐ろしからざる例、十八(猪、狐、狸、犬、龜、蛙、鶴)
  - b 恐怖的にして逐ける、類の例十五(狼、馬、犬、狸、虎)
  - c 蛇、二十
- 2 日常生活四十九(學校のこと三十八、職業奉公のこと十二)
- 3 惡戯遊戯遊歩二十三
- 4 恐怖夢(おばけ、鬼婆々、鬼)十七
- 5 叱責逃走(巡查、追つかける、切らる等)十四
- 6 火事 十二
- 7 盜賊 十一
- 8 食べ物 十
- 9 死する夢 十
- 10 活動寫眞 十
- 11 喧嘩又は泣きたる夢九
- 12 お正月 九

- 13 墜落夢、飛行夢八
  - 14 大水、災害に逢ふ(自動車等)六
  - 15 金錢に關係五
  - 16 迷子 二
  - 17 褒めらるゝこと二
  - 18 飛行機に乗る二
  - 19 病氣 一
  - 20 住居 一
  - 21 寢小便 一
  - 22 衣服 一
  - 23 雜 十九
- 附記 以上のうち、聽覺夢に關するものは樂隊、オルガン、犬の吠聲、呼聲の聲等で十種を數ふとて、かの Andrews 氏の百十一夢中、八の聽覺夢ありしことを注意せられてある。
- 此の總數を通計すると二百七十五となつて、吉田氏の屢引照せらるゝ數、二百七十一とはならぬ。且又同氏は(兒童研究の第十六卷第七號に於て)不快夢百三十二、快夢六十三、中性夢八十六と統計して居られるが、之を通算すれば二百八十一となつて、かの所謂二百七十一とは十の差を生ずる。其の他之に類して各種の百分比が、どう

も誤算あるらしい。誤植か誤記かと思つて、推斷的に間違ひさうな數字を訂正して計算して見たが、やはり、百分比に於ても辻褄の合はぬのは残念であつた。されは精確なる統計としては前掲の諸表は信用し難くなる。

けれども、大體に於て、右の數字に類似のものを見て可からう。然らば快夢、不快夢に就きて、他の疑義が涌いて來る。Ernst Deutsch氏は兒童の睡眠及心理を論述して、孤兒院の國民學校生徒より得たる二十七夢の調査結果を

- 1 希望を達したる夢 十三人
- 2 恐ろしき夢 七人
- 3 希望と心配との混在 四人
- 4 其の日の習得したる課目に關して 三人

と内譯して居る。其の分類の標準の異なる以上は、一概に律すべきでないけれども、假に希望を達したる夢は、即愉快な夢であつたとすれば、之に據ると總數の約半分は愉快夢に屬し、吉田氏所報の不快夢が快夢の二倍以上といふのとは正反對の結果である。之は如何なる現象であらうか？思ふに前者の材料としたるは、同じく不憫な兒でも、孤兒院の慈悲の下に在る者、吉田氏の調査に係るは慘

憐たる貧家庭裡に幼き身心を揉まれつゝ現るゝものなれば、其の印象より來る夢も、正に之を暗示してゐるのではあるまいか。然らば、育兒上、社會政策上に重要な問題となる。

——余が此の原稿を書き了つて後、約九ヶ月の頃、即、大正五年十二月四日、石橋臥波氏はある子供問題講演會にて、幼稚園や尋常科の小學兒童の夢を調査したる結果を發表せられた。其の中に、恐怖夢と快樂夢との數字的關係は甚不定であるが、尙兒童の境遇や家庭や年齢と其の夢とに密接の關係あることを思はしめる。他に參考となる點も多いから、左に同氏の講演の概要を抄する。

- 二組の幼稚園兒童について夢に關する返答を求めた結果——
  - A 組 三十七名中、稚い時は多く見たが、大きく成つて後は見ないと云ふ者が多數で、昨夜の夢も忘却した者が多く、之を記憶して居りしは四名。其の内容は恐怖性のも
  - 三、中性のものにてあつた。即、泥棒が先生の着物を盗つて行きました、弟が人渡ひにさらつて行かれました、蛇が兄さんを取り捲きましたと云ふ類である。(以上皆、五歳女兒)
  - B 組 三十名中、夢を見ない者、記憶しない者が二十名。他の十名に就いては夢の數三、其の内容は恐怖性四、快樂性五、中性三で、例へば、私が唱歌をうたひましたと云つた子供は非常に良い聲を有つてゐる。飛行機の夢は五歳の男兒、六歳の男兒及女兒に見る

又五歳の男生は飛行將校の出入する家の子供であつた。此等は簡單ではあるが、子供の年齢に應じた心理状態と其の周囲の影響等を現してゐる例である。

次に尋常科一年生四十七名の女生を調ると、全く見ない者四名、記憶せざる者二十一名。他の二十二名の答へた夢の數五十四。中には一人で七つも答へた者がある。夢の種類に依て之を分類すると、恐怖性のももの三十、苦痛性のももの十三、快楽性のももの七、中性的のももの四である。其二例、——「泥棒が女中に化けて穴の中から出たり這入つたりしてゐるから、私が叱ると泥棒が私を斬りました。私は首だけ倒れて起きてゐたらば其の内目がさめました」私が學校で遊んでゐますと天の使が來ましてひろ子さん一緒に天へいらつしやいと云ひますから、隨いて行きましたらば、天が餘りきれいなので、まあ綺麗なことゝ云つたらば自分の聲で目が醒めました。」「お池の金魚や龜に私は馬鹿だゝと囃されました。」又「お家の人が犬に吠えられて戸棚に隠れてゐたといふ夢を私がお祖父様やお叔父様に話して上げてゐる夢を見ました」と云ふが如き夢の中で夢を語るやうなものもある。右、五歳より七年十月の男女兒の夢七十二種中、各種遊戲の夢十五、泥棒十二、怪物十一(鬼五、おばけ三、天人二、幽霊一)、墜落五、蛇四、飛行機三、人浚ひ三、其他、動物には象、熊、猪、牛、狐、龜、金魚、植物には薔薇、菊、梅の類が現れてゐる。

さて上來の所論に依り、左に

### 3、小兒夢一般の特徴

(3)小兒夢一般の特徴を挙げやう。

### 小兒夢の内容

A 之を其の種類及内容上より觀れば

- 1 おばけ、鬼、恐ろしきもの等が追駈る。
- 2 動物(狐、狼、犬、猪、虎、獅子、ライオン、馬、蛇等)が現る——苦めらるゝ事、又然らざる事あり。
- 3 泥棒、人浚ひ
- 4 巡查——泥棒を又は夢者を追ひ、又は叱る。
- 5 飛行機、飛行船(就中前者のゆめ)
- 6 電車、自動車、汽車にて懺死又は災害
- 7 墜落夢、飛行夢
- 8 いたづら、遊戲、學校の事、喧嘩

上記の八項は、各種各級の家庭の小兒に於て、尤屢現れるもので、自己自身の経験から見ても其の通りであつたが、唯第五項と第六項即飛行機や電車自動車の夢は勿論全く無い。時勢と事情との然らしめる所である。

又第八項なる惡戲や、遊戲乃至學校の夢は、當に小兒たる狀況より來るもので、



猶、成人が其の日常の職務や其の他身邊の事件の印象から來る夢に當る。だから腕白小僧に腕白の夢ありとて、不思議はなく、喧嘩の夢の男兒によく見らるゝも其の然る可き所である。

第七項の高處よりの墜落夢、空中游行の夢は大人に於ても相當に頻回あるもので、之は一般に生理學的の理由有つて、敢て小兒にのみの特徴ではない。併し乍ら小兒期に於て最早く經驗せらるゝ夢の一つである。其の度數も少年者に頻回で、中年以後は追々尠くなる (Beunis は五十歳で此の種の夢が無くなつたと言ひ、Ellis は之よりも若くして、覺えなくなつたといふ)。(尙、飛行夢及墜落夢の條參照)

又第六項の電車や自動車等の衝突、轢死の夢は、都會の兒童夢の特徴で一般的ではないが、其の形式の何であるにしろ、災厄乃至危機に瀕する夢は一般の小兒夢によく現れるもので、之、其の身心未熟薄弱なるに因由すべく此の意味に於て、此等の項も第一項乃至第四項等と共に有意義となる。第五項の飛行機等の夢は前記の如く、所謂現代式である。同時に之も前項と共に都會兒童の特有である。其の他巡查や泥棒や、恐しい動物乃至怪物の出現は小兒に於て、尤も頻回に

現れる。之等は第六項にも一寸一言した通り、小兒的弱者たる境遇から來る意識的若くは無意識的の恐怖感に由來するものである。就中怪物出現等に關する恐怖夢は、魔夢とも密接に關係し、大人に於ても尠からざるものである。然るに寺田文學士は未成年囚の夢を研究して彼等に困却や被害の夢の多きを以て、直ちに其の原因を、良心の苛責、懺悔出獄後の心配及び檻禁生活の苦痛に置かうと擬せられるのは一部は眞理であらうが、余は上記の見地よりして、全然の信用を與へることが出來ない。此の點に就きては尙後に、境遇と小兒夢なる條下に論ずるから併せ看られよ。

B 小兒夢を年齢上より觀察すれば

上記の如く、余が三歳以上十四歳の小兒に就きて、得たる知見より左の結論を得る。

1 小兒に自覺上の夢の出現は、滿三歳の頃にして、初は極簡單で事件單一、要素も二個以上を出づる事が尠い。

又其の由來も大抵前日の經驗乃至平素見聞の印象。

2 複雑の度は、満五歳前後に於て著しく、四事件二行動五要素を數へ得るが、ただ精神的、思想的の活用は無い。

3 満五歳前後の小兒には行動と要素と合致し、又は節の缺損せることありて、更に年長者の夢と較ぶれば、勿論簡單なものである。然るに事件の數は二つ乃至四つも數へる事あり。之は觀念聯合の解離を示すので、愈其の覺醒時と睡眠時との意識作用の差の生じ來りしを知ると同時に、又兒童の記憶力の増加をも證す。

4 満八歳前後に工夫的の夢あり。

5 十三四歳前後は日常の經驗も記憶も豊富となりて、其の夢中複雑の程度も増し、又往時を追想する種類も現る。一夢の成立も六要素、四行動、六節、一事件又は七要素、三行動、三節、一事件等の例がある。

6 十三四歳の小兒には因子數多くして、しかも事件は首尾一貫的の單一のものあり。之れ其の統一能力の發達せるを示す。

茲に余が從來屢二行動、三要素、四節、一事件など、云ふて來たのは、讀者は夫々

實例に就て、略了解し得られたらうと思ふが、一言説明しておかう。一夢の中には徹頭徹尾、同一事件に關するものあれば、ヒヨイと縁もゆかりも無い別事件が續いて現れたり、又自己が活動せずして、場面のみ活動寫眞を見物する如くに變轉することがある。前者の如き場合は事件の數を以て其の思想の變化、觀念聯合の變調程度を見得る。又行動數が多いか要素類が多いかで、其の夢が靜的傾向なるか、活動的傾向なるかを判じ得る。余は一般の夢に就きても此の方法を以て觀察するが、特に兒童の如く時々刻々、其の身心が成長發達して行く者に於ては、此の解析法の應用すべきものなるを信ずる。

(4) 大人の夢と小兒の夢との比較。

年齒長じ人生の諸經驗に豐なる成人に於ては、其の夢の因數も隨つて多様となり、又夢と實生活との懸隔も甚しくなるから、之に現るゝ複雑さに就きても千差萬別である。其の當時の身心の狀況、内外刺戟の程度乃至種類に因りて、或は極めて單一なることがあり、或は極めて複雑なる事もある。余は上來小兒夢の因子を數へて、五歳のH坊に四事件、二行動、五要素の夢あり、十四歳のSTに六要

素、四行動、六節、一事件、乃至七要素、三行動、一事件等の夢のある事を記載した。又小兒の中でも年齢の進むにつれて其の心理作用の複雑さと、統一的能力の強大となつて行くことを説明的に乃至项目的に書いた。

然らば成人の夢の因子は如何程であらうか。比較して見なければ上文も殆無意義となるから、左にH坊の母二十九歳の夢、例中から一つを引照して見やう。

場所は夢者の郷地、金華山御社の裏手。夢者は其の子H及び知人NG(孰れも同居人の四人伴れにて、椎の實を拾ふ(五要素一行動)(以上一節)。椎の實の澤山落ちてある所は何處なりやと傍に居りし一兒童に尋ぬ。又曰く土筆の生えたる處はと(二要素一行動)。子供曰く、彼方の二階建の家の後方にて、椎の實を澤山拾ひ得可し、土筆は其の道筋にあり、自分も同行せんとて共に歩む(一要素二行動)(以上一節)。かくて金華山の裏手に當る細道をば木々の枝を押し分け、て行く程に、墓地に來りぬ(一要素一行動)(以上一節)。其墓地の垣根は人間の肋骨や四肢の骨などにて造りたり(一要素)。夢者、同行のG嬢を顧みて、「あゝ何と云ふ事ぞせう。薄氣味わるいわれえ」と語りつゝ行き、又心中に古代の楯輪や、外國の彫刻物の事などを思ひ浮べつゝ、懸て目的地點に來りぬ(一要素三行動)(以上一節)。椎の落葉などを掻き分けて見れば、大粒の實、澤山有り。大喜にて袂に拾ひ入る(二要素二行動)。其の間に子供を負ひたる女の労働者らしき二三人に出逢ふ(二要素一行動)(以上一節)(以上一事件)。

夢者は某女學校(嘗て、こゝに奉職したる事實あり)にて、今も教鞭を取れる身の處、もはや休職せんとの心地にて出勤す(二要素一行動)(以上一節)。今しも運動場へ行かんとする時、校長は玄關側にて話しかけて曰く、此の間も某氏(次席の教員)の話に依れば、貴女には御辭職の決心ありやに承る。平素、進取的の談話をせらるゝ貴女に似ず。今日は少しも其の様子が見えざりし由、私に告げたり。…兎に角、此の事は私一個の考として申上げおく。又明日は遠足あり、十三日(此の夢の翌日に當る)には奉送迎の事ありて、停車場に參集する筈なれば、其のおつもりで…と(六要素二行動)(以上一節)。斯くて生徒の並び居る運動場へ共に行く(二要素一行動)(以上一節)(以上一事件)。

夢者は今や自身が女學生なり(一要素)。而して第二年生の筈なるに第三年生の列に位し、兩手を前へ伸して間隔を取りつゝ、並び居たり(二要素一行動)(以上一節)(以上一事件)(大正四年五月十二日午前二時頃)。

右説明——(1)昨夜、コ、ア、ナットの話しありしこと。

(2)聖上桃山行幸の事、昨新聞紙上に見えしこと。

(3)夢者は往時女學生たり、又教師たりしこと。

(4)一月程以前に摘草したりしこと。

右の夢を通觀するに、二十七要素、十六行動、九節、三事件から成立する長物語である。尤も成人として單純の夢ある事は上述の如く、例へば斷崖から墜落する如

きは一要素と一行動よりなる一事件の夢である。此の因子に關する評論はこゝに不必要故省く。

其の他、大人及小兒の夢に於ける差異は已に前文に説きし通り、大人の夢中生活が其の現實生活と截然區別あり、又大差あるが小兒に於ては相互近似し、時には相互混同することがある。此等の委細や、狂者類の心理比較は已に掲載した。同處を參考あれ(第四二七頁以下)。

(5) 小兒夢と個人性及暗示性

夢と個人性及との關係には大變差を認める。余の經驗範圍内でも、生れて以來三十幾年間、未一回も夢を知らざる、教育ある健全の男子を知つて居る。其の他幾種の無夢の例も本書中他處(第三一〇頁以下)にかいた通りである。又多きは一夜に二夢三夢を結び夫々相當の長き物語を成すことも稀でない。同一の家庭、同一の寢具に起臥する同胞の少年が其の夢の回数や日時に差異あることも報告がある(吉田氏)。斯く夢に個人性あると共に、研究者の特に注意すべきは、其の暗示性である。之を研究するに際し、子供に對し、夢を調査してゐるとの態と

5、小兒  
夢と個人  
性及暗示  
性

らしき態度を表さぬ様、又悟らしめぬ様にせねばならぬ。一度夢の事を聞くと、それが暗示となつて次の夢の構成を助け、日を重ねるに随つては遂に常習夢となつて了まう。之は大人小兒の孰れにもあり、又余自身に於ても屢實驗する處である。小兒の如き被暗示性に富むものには殊に此の傾向が強い。

(6) 異常兒の夢、及其の度数

(a) Deitch 氏は五官器の發育不全なる兒童に就て、其の夢を調査し、左の結果を得た。

被檢者	夢を見たるもの	其の内容を記憶するもの
聾兒 八九人	七五人	二四人
盲兒 一二	一二	九

(b) 吉田氏に據るに、精神遲鈍兒は一般に夢少い。之れ記憶力に乏しい爲に夢ありても忘却し終るか、乃至睡眠中も矢張精神作用遲鈍なる爲、夢みないのであらう。此の種の一兒は十五日間に一夢ありて、しかも之を忘却したといふ。但、之に反して二十八日間に二十三日夢を見たる低格兒もある(前掲十三才の貧兒の例は其の一である)。(c) 更に同氏に據りて、盜癖兒の夢を見るに、A生は八日間に六夢あり、B生は十四日中に九夢あり、C生は十三日中無夢であつた。

以上の如き記事を並べて見た處で、併し乍ら、吾人は何物も取り止めて得られない。

6、異常  
兒の夢及  
度数

要するに此の種の夢の研究は到底、一片の統計表や短期間の記録や、貧弱の材料では何等の意味の結論に達しないのは勿論である。且く項目のみを擧げて後來の研究に餘地を存しておく。

(7) 境遇と小兒夢

人格の統一全からず、見識未、定らず、善も惡も自ら辨ずるの力に乏しき小兒は、加ふるに暗示性や模倣性の大きなるものなれば、彼の夢は四圍の境遇に大影響乃至大感化を蒙つて居る。しかも之れやがて、小兒自身の性格の反映なれば、之に注意するは種々の意味より重要な事である。

(a) 上記の貧兒共に於ては、米屋に行きて米を買ひ、歸りて之を磨く、錢を澤山貰う、雨降る。屋根こはる。疊濡る、芝山内に行き芋の立喰ひ、おかみさんが酔漢に追はれて、コラ、何ヲスルノダ、ゴノ野郎と罵る、乃至、十二歳の女子が赤坊を生んだ夢などは孰れも彼等の境遇を想はせぬものはない。そして皆殆、決して他の階級の子供には現れ得ないものである。

——上文にも書いた通り、不愉快なる夢が貧乏人に比較的多しといふのも、輕々に看過すべきでない——

(b) 更に未成年者にして監獄に投ぜられたる少年に於ては、寺田文學士が嘗之を論ぜられた(兒童研究第十、六卷第四號)——二十歳未満、十七歳以上の未成年囚、約三百名其の大部分は窃盜犯で之に亞ぐは横領、詐欺、其の他極少數の賭博、傷害、放火、殺人等の犯罪者に於ける夢。總數四百九十五。其中彼等に顯著に現るゝものは。

- 1 家族に關するもので、全數の二九、七
- 2 被害、困却に關するもの……一〇、一
- 此の中、主なるは蛇に襲はる(八)、火災に罹る(五)、猛獸に襲はる(三)、人に切らる(三)、馬に追はる(三)、川に落ちて溺れんとす(三)等。
- 3 満期放免の夢及飲食のゆめ……各九、〇
- 4 職業に關する夢……七、六
- 5 監獄生活、監獄官吏に關するもの……七、二
- (殊に看守が何種の夢にも現れ出づる事は極めて屢なりと云ふ)

又彼等の夢に存せぬ分子は

- 1 住居、衣服に關するもの
- 2 虛榮、心に關するもの

3 賞讃を蒙りしもの(殆無し)

4 往時の追想は極めて少く、大抵は最近の強印象及び経験より来る。

是を以て之を觀れば、家庭と隔絶せらるゝ身が父母の膝下に歸らんと戀ひ、又自由ならぬ飲食物に飽きたく思ふは人情であり、別して一時も早く滿期放免の樂な身と成り度しとの心が鬱積して居るから、夢寐にも其れが反映し同時に日頃恐ろしき看守が覺めても寢ても心頭を去らぬからして、夢中に彼の姿を見ることが多いものと思はる。若夫れ寺田氏が彼等に困却や被害の夢の多きを以て直ちに其の原因を、良心の苛責、懺悔、出獄後の心配、及監禁生活の苦痛に置かんとせらるゝは如何あらう。困却的の夢は實は決して、未成年囚のみの専有物ではない。氏の研究は一面未成年囚のみを見て、他の普通の少年を十分に觀察せられぬから、是の如き獨斷的の結論を書かれたものと思ふ。勿論、余も彼等監獄内の未成年囚には其の境遇上、此の種の不快夢の多からんことは認め、又其の年齢上の點を考量するけれども、其の主たる原因は、やはり一般的に小兒乃至少年たるものゝ生理的關係に因るものと信ずる。

8、小兒  
夢生起の  
原因

——余は上來、各項に亘りて小兒夢に關する必要なる事項を敘述するを得た。以下は醫學的に觀察して、小兒夢に關する家庭上の注意に及ばう——。

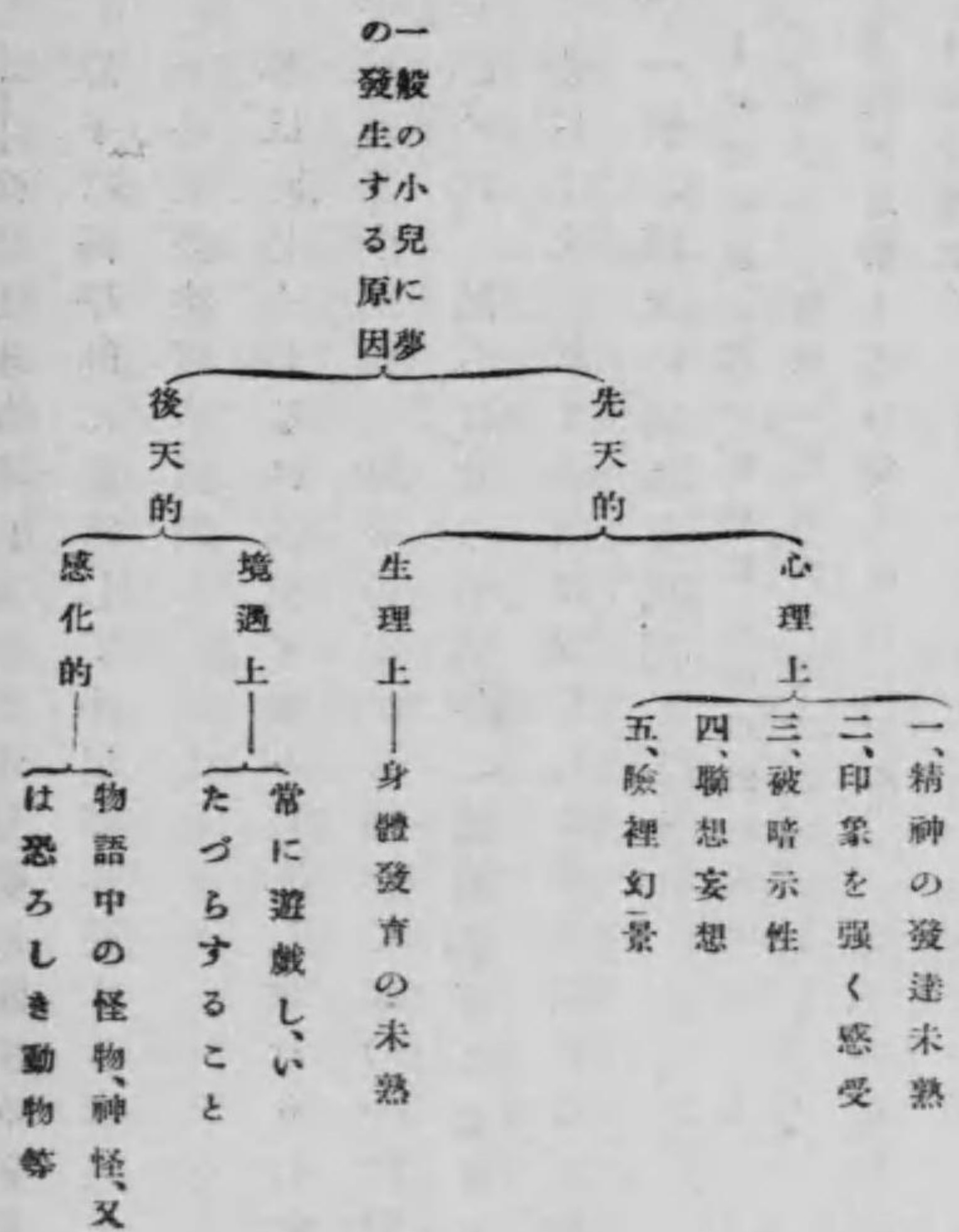
(8) 小兒夢生起の原因

夢は同じく夢なれど、上來縷々敘述し來たりし如く、既に小兒の心理は大人の夫れと多少別異の點もあるから、随つて其の一作用たる夢にも注意すべき相違を認めた。然らば、此の小兒夢の原因は何によりて起るか。

余は上文に於て各所に論じたる事ではあるが、知見を綜合する爲に、先づ小兒の一般心理上の特長を列記しよう。

- 1 理智未熟の爲に、推論、結論に正鵠を失すること。
- 2 妄想多く、聯想や、想像が不羈放埒なること。
- 3 險裡幻景——其の他、各器官の幻感。
- 4 睡中囁語。
- 5 白日夢。
- 6 小兒心理と其の夢中心理とに大差なし、即實生活と夢中現象とを混同する傾向あり。
- 7 小兒心理は狂者の心理に似たり。
- 8 小兒心理は大人の夢中心理に似たり。

9 小兒心理は原始人類乃至野蠻人の心理に似たり。  
是等の特徴が第一原因となり、加ふるに生理上、境遇上の先天的乃至後天的の  
影響を及ぼして、小兒夢の發現を來すものである。今之を表示すれば、



小兒には普通の状態でも、こんな風に夢を起す原因が有り、殊に表中の心理上の部は殆、全部、小兒夢の特徴と見て可い。之を以て觀ても、夢は一種の心理作用なる以上、理論上にも小兒の夢の多かる可きを推定し得るが、又實際上にも小兒少年や女子には夢の多いものである。  
けれども、之には程度がある。連夜叫喚して目を醒まし、又夜中、夢に由るらしき遺尿の類は、皆共に育兒者の細心注意すべき處である。暫く病的の小兒夢につきて説かねばならぬ。

9、病的  
及小兒夢  
恐怖夢

(9) 病的の小兒夢(附、小兒の恐怖夢乃至不快夢)  
人が夢を見る事の多いのは、朝、今や覺醒せんとする時である。そして、感情に強くして、現實と相混同し易き夢者たる小兒が、朝間、寢醒めの際に、わつと泣き出して目を開いたり、又は「萬歳!」とか、「かあーちゃん!」とか叫んで覺醒するのは、敢て珍しくもない。

けれども夜恐症として、突然夜中に醒めて、其の眼睛前方を見詰め、顔貌恐怖の相を呈し、心臟の鼓動烈しくして全身冷汗に濡ふ事がある。斯かる際は何か恐怖

の夢を見たる證候で此の度の烈しきに過ぐれば癲癇を發作するに至る事がある (Nohnagel)。殊に神經質性の子供乃至遺傳的精神病性の小兒は其の危険多く、然らずとも是の如き恐怖夢は主として消化不良に因するのであるから、育兒者の注意を要する。Herbert Wright は小兒の夜恐症を研究して、之と夢中遊行症との近接關係を知つた。即、夜恐症の代りに夢中遊行を來したる時は、後に何等の記憶も殘存せしめずと言つて居る (British Medical Journal, Aug. 19, 1899)。尙其の他に此の夜恐症を生じ、恐怖夢を來すものは、鼻腔閉塞して、勢呼吸に困難を感ぜしむる場合例へば、腫物乃至鼻汁充滿、又は蒲團が過重にして殊に顔面上に苦しく蔽ひ被ぶさる時、又は呼吸器病乃至心臟の病氣——肺炎、心臟瓣膜症など——で、之を來す事もある。Graham Little は三十例中十七、即、殆三分の二に近くも心臟病に關して居つたといふ自己の實驗からして、恐怖夢と心臟とを密接なる關係において居る。身體の衰弱、其の他各種器官の不調及び發熱が原因たる事もある。

若し健康の子供であるのに、是の如き現象を見れば、彼の精神上に、若くは肉體

上に何等か不安、不愉快を來す一時的乃至常習的の事情があるに相違ない。身體の方から云へば、(1)附近の喧騒、(2)就寝前の過食、(3)晝間遊戯に因る過勞等で安眠を妨ぐるものある可く、精神上から言へば、(1)家庭の不和の爲風波絶えず、母舅姑に口論し、乃至父罵り母泣く等の家庭では、小兒の純粹無垢なるべき感情の如何ばかり汚贖せらるるか分らない。子供が中心となつて、一家團樂し、皆嬉々として笑ひさざめくは、子供自身にとつて最上の得意時であり、又最良の健康法であるものを、些細の事から一家内不愉快の氛圍氣を漂はせて、天使の如き兒童の心をも俱に墮落せしめんとするは、人道の大罪ではあるまいか。しかも事實上に此の種の事情より小兒の夜中恐怖夢を喚起する例の乏しからぬのは、寒心に堪えぬ次第である。(2)其の他、繼母の手に苛めらるる小兒、育兒法を知らぬ子守や、無考へな親達に、狼や狐や怪物を利用して常に嚇かさるる子供等が、知らず知らず其の影響を蒙ることは大なるものである。(3)又小兒自身の良心の苛責や、畏怖の念から來ることもある。左に實例を若干擧げてみよう。

〔第一例〕滿五歳内外の小兒(TU)。右外耳道内に腫瘍が出來て發熱し、同側の頬



も臚れ上つてゐた、其の時の夢に、鐵棒の如きものを耳の中へ突き刺されて自身は方々逃げ廻はる様を見た。

〔第二例〕同兒、右の上眼瞼に腫物が出来し時、其の夜は熱湯を眼瞼上に注ぎかけられて、いくら逃げて追はるる夢を見た。

〔第三例〕同兒、貴重なる家具を破碎したるに、必叱責せられん事を恐れて、之を秘して居つた。其の夜深山に伴はれて怪物に襲はるる如き恐怖夢を見た(明治三十一年の夏期)。

〔第四例〕俗間の言慣しに、蚯蚓に小便を仕掛けると、陰莖が膨れ上るとふ事を四五の小兒が語り合ひつつ、其の中の一人が故意に之に放尿したるに、其の夜、雲霞の如き蚯蚓の軍隊が旗押し立てて、自身を捕縛に来り、虐待を恣にする恐ろしい夢を見た。

〔第五例〕七八歳の小兒共が郊外の丘地へ、胡蝶採集に行きし途中、路傍の石地藏尊に供へたる供物を、一人の子供が「これしきのもの！」とて足蹴にした。其の日の歸途、他の子供達は、斯々の地藏さんには斯斯の靈驗ありき、乃至冥罰ありきなどと語らう程に、曩きの兒童は大に怖れをなして今より戻つてかの地藏さんに謝罪し來たらんには如何など言ひ出でぬ。其の夜、彼は悪夢に襲はるる如く、頭に大聲に叫喚したりといふ(明治三十四年の夏)。

〔第六例〕鹿兒島地方の迷信として、彼岸にはガラツバ(河童又はかはつば)の詛なるべし(が山より海へ來ると言ひ傳へ、一定の場所に於て、之に供物を供ふる習慣あり。或る年の此の日、四五歳の一小兒が下女に伴はれて、其の供物を持ち行きたるに、其の夜はガラツバとて泣き叫び、何か襲ひ來るげに畏怖し、又號泣して、終夜家人を睡らしめざりき。翌日、此の地方に特有の「お占取さん」として一種の賣卜婆の許に伴ひし所、こは神様に供ふる品を不始末にしたる崇なりと云ふ。乃之を下女に糾せば、かの昨日の供物は水中に投入し去りし由。故に再祭を新にして其の怒を鎮めし所、小兒の夜恐症も熄みしとぞ——之は六十歳前後の老嫗自身の己が子に就きての經驗談なるが余謂へらく、此の日、下女が何かガラツバに關して、恐ろしき言を構へて、かの子供を脅嚇したるに非ずやと——

〔第七例〕八九歳の男兒(TU)。平素、暗黒を恐るる事甚しかりしに、其の頃の殆常習夢として、今や便所より足踏み出だし、いつもこはしこはしと思ふ暗黒の廊下に出づるや、恐ろしき黒いガタロ(關西地方の俗語、河太郎の訛にて、前項

のガラツバに相當すべし)が跡追ひ馳く、己は一所懸命に走らんとすれども、速力却つて遅々たり。漸くにして、坐敷の闕を過ぎてビシヤリと障子を閉づるを以て夢の終りとなる。此の夢の特種の點は夢者が廊下に張れる床板の接目の一線上をのみ走れば、ガタロはまた、必之に竝行の他の接目の一線をのみ走り傳ふ事なり。

而して或る夜の如きは遂に夢者は捕はれて、同時にかの便所より眞白の光線輝きぬ。恐しさの餘り、兩脚に懸命の力を込めて、雨戸に突張れば、ガタロは後より其の襟がみを攪みて引摺り去らんとす。夢者もかくては堪るものかはと、ここを先途に抵抗する擧句、ハツと目醒む、——時に下肢全く痺びれるなり。——余謂ふに、此の場合は精神的の常習夢と、下肢に加へられし外的刺戟とが結合して結夢したるものならむと。

尙、此の外、小泉八雲 (Latadio Hearn) 氏の著 *Shadowings of Nightmare-Touch* なる文中には、彼自身の幼時恐怖的心理現象を描いてある事をも附言しておく。上述の如く、恐怖夢乃至不快夢は種々の事情から來つて、特に小兒に多いもの

である、而して其の結果にも後文に書く通り怖る可きものがあるから、注意を要する。左に表的にして上述の諸項を統一しよう。但、余は後章に恐怖夢竝に夢魘を讀者に呈示するであらうから、彼此參照あれ。(第五九頁—六三四頁—)



病理的  
鼻汁充滿  
呼吸器病

心臟病

消化器障礙

發熱

其の他、身體器官の不調(眼、耳等)

10、小兒  
の影  
響

10 小兒夢と後來の影響

小兒と夢との密接なる關係は上來所論の通りであるが、若し之が小兒病氣の爲であるならば、之を輕忽にする事に依りて、其の身體上に直接影響を來すは言ふ迄もない。殊に精神病性、癲癇性の遺傳あり、又は資質神經過敏の者などは、之が爲に其の病的素質を發揮し來るか、又は神經衰弱不眠症に罹るに至る。其の甚しき實例としては、余が本章の第七項、狂者の心理と夢の心理中に引例したる、精神病性遺傳のある一男子の如く、我が愛兒をも夢の爲に投げ殺す様な結果となる(第四三六頁參照)。

更、精神上に及ぼす將來の影響としては、之も既に上述の如く、Kochide なる

婦人が後に、小説を作るに至りしも、其の初めは小女期に夢を見て、之を纏めて書きしが動機であつた。

又現に、余の如きも、五歳の頃、狐のおばけなる夢ともつかず、うつともつかぬものを見て、之に興味を起し、前出、次に十一歳の時に理科學教科書中の「蝸」の條下を學びし其の夜、夢に章魚の繪現れて、其の圖上に「單足」なる文字あり。心に、章魚の脚は澤山なれば、復足とでもある可きに「單足」とは、不思議なりと思ひて、翌朝高等小學、校へ通學するや、友人の K.H. 氏(今は醫師)に之を物語り、且、此の以後は親しく夢を記録に留め置かば、後來興有るべしなど語り合ふた。之が一場の無駄話ではなくて、其の日歸宅後、筆を執つて之を即製の帖面に書いたのが、余の夢日記の初めであつた。而して、後年即、只今此の原稿をもつる動機も、此の邊にあると言へば言へやう。何は兎もあれ、其の身心上に於ける感化が忽にすべからざるを知れば、隨つて兒童は夢てふものに對して如何なる思想を懷抱し、はた如何なる種類の迷信を有するかをも調べて見ねばならぬ。

11 小兒の夢に對する思想及迷信

a 下級民の兒童に於て吉田氏の調査したる要領は左の如し。

- 1 夢は疲勞より起る——心が疲れる爲又は晝間、精を出した爲。
- 2 夢を見る事は個人的傾向に係るとの説——根の弱きもの。
- 3 夢は人間が當然見るもの——(1)見聞、記憶の爲。(2)自然的。
- 4 夢は晝間の印象を見る——(1)思考。(2)仕事。(3)心配。
- 5 夢は魂が鼻腔から脱出して、水面に落下する際見る(關東の俗説といふ)。

b 平均年齢十六歳の女學生九十九人(高等女學校四年級七十四名、同五年級二十五名)につきて、森田醫學士の調査(兒童研究第十)。

「世の中に不可思議と思ふ事物に就きて質問せよ(但、五件以下)」と云ふ問題に對して、生物學的の事、人間の原始、其の他、生理學的の問題等多く、殆、迷信に言及せざるもの十七人、僅に夢、靈魂等に關し、多少の迷信を有するもの十六人、計三十三人で、残の六十六人(六十五%)は皆、甚幼稚なる多數の迷信を有し、中には自分の経験より深く迷信して居るものが多い。

此の中にて、夢に關するものが全數中三十個條。更に其の中で、(a)吉凶夢、奇夢、正夢に關するもの二十三、(b)人の寢言、云ふ時、之に話しかけると、其の人の息がつまりて死ぬと云ふもの三であつたといふ。

c 小兒が高處から墜落する夢を見るのは、其の刹那に身體が一時的に伸長成

育するに因ると信ずるものあり(鹿兒島地方)。

是等の報告を見れば、兒童の夢に對する觀察の一面は自家の経験より來るらしく、他の一面は民間在來の迷信や、思想を傳承して居る事を知る。而して、斯くの如きは、總て、家庭や社會に甚無智蒙昧なる思想の存する事を反映するものなれば、吾人は健全なる思想及身體の兒童を得る爲に、家庭上の注意を論じて來なければならぬ。

(12) 小兒夢に對する家庭の注意。

上述の如く、小兒の夢は健全なる場合でも、生理的に生ずるものであるから、全然小兒に於て無夢を望み得ない。けれども其の育兒上の主義は成る可く夢を寡からしむるにある。換言すれば、夢の多きは其れ丈、腦髓作用の休息して居らぬ證據か、乃至外來の刺戟の絶えない實證であるから、其の原因を明めて小兒の睡眠を出來る丈、安靜平和ならしむるの必要である。就中、恐怖的の夢が小兒に特徴であるから、之を除却するに努めるのが肝要である。既に、小兒には十分の安眠が肝要なることの明かなる以上は、吾人は更に小兒の睡眠に就きて相當

の知見を有せねばならぬ。小兒の睡眠は固より大人のと異なる。大人は就眠後第一時間目乃至第一時間半で最深度に達し、はや第二時間を過ぐれば餘程、深度は淺くなりて、爾後多少の深淺を繰り返へしつゝ、漸次第七時間頃覺醒に至る。然るに小兒は其の年齢に従つて、夫々差異はあるが、初生兒は一度の睡眠時間が頗る短く、三時間にして覺醒する。之れ哺乳の必要上、其の用が濟めばまた睡る。かくして其の生後二三ヶ月は殆ど夜も眠り通して居る。滿一二歳以後は十三乃至十五時間の睡眠が必要である。更に長じて、三四歳ともなれば兒童の睡眠型は就眠後第一時間頃、第一次の最深度に達し、以後頗る淺くなりつゝ第六時間目に至り、以後再び深さを増して第十時間頃、第二次の深度第一次よりは淺しに達し、第十二時間前後に覺醒する (Zemny)。

又睡眠時間に關してはアキセルケ等は六歳乃至九歳の兒童には十一時間の睡眠九歳乃至十一歳の兒童には十時間半、十一歳乃至十三歳には十時間、十三歳乃至十四歳には九時間半の睡眠時間を要すと云ひ、之を以て標準時とせられてゐる。併し佐藤熊次郎氏の研究に據れば各國の兒童の實際の睡眠時間から見

て、上記の標準時は稍長きに失する様である(學校教育第一卷第二冊)。左に同氏の表を參考して掲げる。

睡眠時間 及年齢	(ベルンハルト氏)	男 (レーウンヒル氏)	女 (ターキンク氏)	(佐藤氏)	アキセルケ 1の標準時
六—七	10.30	10.10	10.45	11.14	10.33
七—八	9.50	10.30	10.30	10.41	10.37
八—九	9.30	9.30	10.15	10.33	10.34
九—10	9.20	9.15	9.30	10.15	10.31
10—11	9.20	9.15	9.30	9.46	10.30
11—12	8.50	8.45	9.15	10.00	10.30
12—13	8.30	8.15	8.40	9.36	10.30
13—14	7.50	8.30	7.30	9.31	9.30

右の表に於ける數字はベルンハルト氏は獨逸兒童六千五百五十一人に就きて實驗し、レーウンヒル氏は英國兒童六千八百八十人に就き、ターマン及ホツキン氏は亞米利加西部の生徒及大學生二千六百九十二人に就き、我が佐藤氏は廣島高等師範附屬小學校生徒五百餘名に就きて五月と十月との二回に互り十日

間連續の調査の結果である。然るに翻つて労働者貧民等の兒童に見るに各國共著しく其の睡眠時間短く、ゼーハンデラールはアムステルダムの一小學校生徒を調査して労働に従事する子供が朝は四時乃至七時に起き、夜は十時乃至十二時に就眠する状態なるを見、又吉田氏は東京の麻布芝乃至郡部の澁谷大崎邊の貧兒を調査して、滿十三四歳のものが、大抵は十時頃寝ね、五時頃起きる、即七時乃至七時間半の睡眠を取るに過ぎぬ事を報告し、以て貧兒には夢多しとの彼の所論の一理由として居られる。

凡そ一般の原因中にて心身發達の未熟なる事は小兒に當然の事であるが、小兒の四邊の境遇や物語の感化乃至不快恐怖等の原因に至つては、之れ凡べて育兒者の注意を忘れてはならぬ所である。例へば小兒の寢衣は不愉快の事無きか、小兒の睡眠中は之を妨害するもの無きか、精神上に何等の不安なる思想を抱いて居らぬか、身體の何處かに不調の部が無きか等である。各項の精しき事は、既に前文、其の原因の條下に縷々説明し、又表示したから宜しく参照せらるべく、殊に不快夢恐怖夢の生起理由の表等に注意あれ。(尙大正六年四月の兒童研究又は同六月の婦人衛生雜誌掲載参考)



## 第二章 性慾夢

## 一、總論 並に都々に現れたる性慾夢

## 1 本能としての性慾

予は茲に性慾の夢に就いて述べやうと思ふ。即其の範圍は異性に對する衝動乃至愛情に由りて惹起せらるゝ夢及び之に關する夢の總べてを含むのであつて所謂文學者達の所謂神聖な戀愛とか言ふ種類より以下、肉に迄墮したる實際的の夢乃至一見しては殆全く別種の觀ある表徴的の夢を併せ述べて、附するに俗間謠ふ所の俚謠のうち都々に於ては如何様の形式を以て現れてゐるかを研究して見やうと云ふのである。

さて、食慾と性慾とは人間の二大本能であつて何人と雖、之を遠離する事は至難の業である。但、食慾の方はたとひ貧富に應じて、其の粗食と美食との差こそあれ、先づ日常之を満足せしむるには、さして障礙は無い。獨り性慾に至つては之と同日の談に非ず。死なん許りに思ひ焦れてゐても翼無き身のせん術なさ

に、千里遠征の夫を訪るゝ由もなく、はた今日迄相共に睦み合ひにし人の、今は異域に航りするをば見送らねばならぬ憂き身と成つて、領布振りつゝも、石と化せなん思ひ有る可く、或るは權力を以てしても、金力を以てしても、所詮戀とは別問題だと云ふ高尾の話の如く、此の道ばかりは、戀ひ得ぬ前も、まゝならず、戀ひ得ても、まゝならぬものである。斯くして思ひ詰めた結果、氣を狂はすもあり、身を投げる者も出来る次第であるが、然るまで極端に行かずとも、戀ひし逢ひ度いの心はせめて夢になりとも、望を遂げばやとの感情となる。一體世俗の謠ふ俚語などは、其の殆全部が男女間の戀情を歌つたものであるが、今其等の中、夢に會合を希望する歌は次の様なものである。

四九四

夢になりとも逢はしてたもれ、夢に浮名は立ちやすまい

(寛文、元祿の頃の俗謡)

離れ居るとも續いて夜毎夢になりとも來てほしい

夢になりとも通へよ夜毎、實で逢ふのはたまの事

慾にや今宵の臍をしほに、晴れて逢ひたい夢なりと

暮て行く鐘たのしむ胸の晴れて來ぬとも夢で逢ふ

主の來ぬ夜は早や寝て夢に逢うて思を晴らしたや

遂に此の嵩じて來る熱情は凝つて、夢裡に戀人と握手すゝに、至る。

稀に逢ひ見し浮き寝の床の、夢な醒ましそ鐘の聲 (寛文—元祿時代)

逢はて寝る夜は夢こそ頼め、打つな妻戸を夜の雨 (元祿時代)

寄る邊なき身は夢こそ頼め、打つな妻戸を夜の雨

(上記のもの、翻案なるべし)

蚤や蚊が刺す邪魔さへ無くて、添うた夢見る春の聞

逢はれぬ今宵と知る上からは夢に見る度に氣が急ぐ

夢に逢ふのが只々嬉し夢に浮き名は立たぬ故

春の夜の夢は只さへ短いものを、まして嬉しき首尾の爲

義理がえにしを切るとは知らず、石の枕に結ぶ夢

義理で通ひ路絶えども夜毎夢は往きかう主の傍

夢に見やうと手枕すれば、癪が邪魔してまた起す



其の甚しいのになると、次の様なものがある。

四九六

夢に見る様ぢや惚れよが薄ひ實に惚れたら眠られぬ  
兎に角以上掲げたのは、夢中戀人に逢ひ得る事を謠つたのであるが、其の戀人  
をば片時忘れず思うて居る爲に夜寝ねては、夢中にも其の幻象を見るてふ歌と  
しては

思ひ疲れて、ついうと／＼と眠りやまた見る主の夢

(明治前後)

夢の一夜がうつゝの種よ、我に分らぬ我が心

夢の通ひ路人目に立たぬ併し浮き名は寢言から  
思ひ切つたと口には言へど夢は正直またしても

今はたゞ耳に残りし聲をば便り、それが夜毎の夢の種  
夢に寢言をいふ夜は怖い、夢の口より人の口

夢に見るより此の獨り寢を夢に見せたら來もしやう

思ひ出してか、様忘れたか、わたしや夜毎の夢に見る

(周防雜話)

遠く離れた千里の旅も夜毎夢路に一走り

忘れかたみに貰うた寫眞、獨り寢る夜は夢の種

夜櫻見るとて行かれた留守に夢が探しに出て歩く

夢に見てさへ、其の様さまの事をばらと泣いては消え／＼と

以上のものは、孰れも戀人が夢に入ること詠んだのであるが、斯く戀に悩む  
人自身の状態を表はすものは

戀ひし床しいお前の姿、寢ても醒めても夢うつゝ

ゆめと現に身は攻められて、同じ思を何時迄も

夜と雖も主來ぬ夜半は、いと冷めたい夢の床

松のしぐれに夢打ち醒めて、餘所のあはれが思はるゝ

逢はで寢る夜は袖ひぢ勝る、夢は枕のいとまなや

まつ夜悟れど未練がひとり、寢てもねられず夢うつゝ

ねても覺めてもお前の顔が眼先きへちら／＼夢うつゝ

思ひつめては只ぼんやりと、夢の浮世にゆめを見る

ゆめを力に暮して居たが、逢へば夢かとまた思ふ

四九七

此の頃便りが暫く絶えて、わたしや夜毎にゆめ見草

こんな風に夢にでも見度しと願ふのみならず、又事實上夢に逢ひ、夢に思ひ焦るゝを得るのである。斯く豫め希望があつて、其れが現實界に於て自由にならぬ時は、日頃の鬱積せる熱烈なる感情乃至意識が其の进出口、活動舞臺を夢の世界に於て索める事は、一般に何事にでも見る所で、強ち男女間の愛情のみに限つたわけではないが、しかも前述の通り、希望を達する事の難い場合が多き此の性慾に於て最も顯著に現れる事も何等疑ふ餘地がない。之れ Freud の所謂欲望説 Wunscheorie を以て説明する所である。

## 2 Freud の欲望説及び表徴的性慾夢

茲に注意せねばならぬのは、此の説である。余は後に表徴夢の條にて、同氏の説等を論評するから、こゝには詳説しない。要するに Freud 並びに其の學徒は總べての夢をば皆其の當人が従前——小兒時代の印象を始として——何か強く希望した事の有り乍ら、實際に充され無かつた鬱積意識が睡眠中に活躍し出したものとなすのであつて、又實際一見全然趣の異なる夢でも、能く／＼其の謎を

解くと、眞髓には無意識ながら懷抱してゐた欲望の正體が現はれる事がある、そして欲望説の論者は其の最も深き根柢は實に小兒期時代に性慾的意義を以て存するものと主張する。

併し乍ら此の説の正當でないのは、萬事「欲望満足」の一點張で終始説明しやうとする事である。其の反證として、余の最近の例で曰つて見やう。余の友人 U 氏が或る早朝何かの號砲の轟くのを睡眠中に聞いて、之は飛行機が襲來して我等の頭上に爆裂彈を投下したりと夢みた。そして其處は戦場の光景であつたが、よく考へて見れば、最近旅行したる日光山中の戦場が原の景に外ならないのである。之は勿論外界から來た音響が聽感を刺戟して構成した夢である。其外、余の例では、ある夏の黎明停電でもあつたか、夜中點じ通しの筈の電燈が其の際滅燈せられてゐたものゝ如く、今やバツと明るくなると同時に、余の「夢裡には余が何處からか歸宅して、雨戸を明けるや否や、ランプの點火せられた場合が現れた」間（此が事實であつた事は、電燈が數回點滅せられ、其の間に余自身も漸次意識を恢復して知つたのである）。之も眼に受けた刺戟夢で、何處に欲望を満足させた跡もない。要するに此の欲望説には一部の眞理はあ

るが決して萬般の夢に適合するものでない事を一言して置く。  
さて、フロイドの欲望説が説明するに足るべき性慾夢の例は左の如きものである。

〔第一例〕三十七歳の婦人、有夫であるが、子供は無い。ある日の夢に、自身が棧敷らしき所に坐つて、何か見世物のやつて來るのを待つてゐた。やがて、一團の軍樂隊が面白く勇壯な曲譜を奏して來た、其れに續くのは何某の葬式行列で、彼は死體となつて立派な棺に入り、砲車に載つてゐる。此の人は現在の人物で該婦人とは、さして親交も無い。又其の身分も高くない。屍棺の背後には死者の一人の弟、三人の姉妹が従ひ、しかも、此の行列に取つては不似合な華美な著物を著け、おまけに弟は手を振り、足を舉げて、さも愉快げに踊つてゐる。まるで野蠻人の様であつた。そして脊には若い花を持てる「ヤツカ樹を負ふてゐた (Ernest Jones の例——因に同氏は Freud の高弟で、米國トロント大學の教授である)。

右説明——夢中、ヤツカ樹とあるのは、此の婦人が嘗て米國の西部へ旅行し

た時、アメリカ印度人の結婚式を見物した。其の行列中にかの「ヤツカ樹」が有つたので、之は子孫の繁榮に象る所の花を著けて居り、又た之を持つて居る者は丁度夢中の弟の如く踊り狂うて居たのである。之を以て見ると、此の婦人の夢には兎に角何か結婚及び子供に關して意味あるらしく思はれた。而して婦人を更に聞き糾して見ると、果して彼女は自分が兒女を持たぬのを残念に思つて居る事、並びに其の原因は夫の罪だとしてゐる。夫は大酒家であり、爲に破廉恥な行爲まで爲し、良からぬ遊蕩をしたと云ふ。すると此の婦人は自分の夫を決して有難く思つて居らぬ事が分つた。さて死者として現れた何某は、淺き知人といふに過ぎぬのだが、次の二點に於て自分の夫と似合つてゐる。第一、どちらも第一人に姉妹三人ある事。第二、有爲な人物であり乍ら、道德的缺點の爲に邪道に踏み込んだ事。次に相異の點は、何某は文官であり、隨つて軍葬を受ける理由が無い。然るに夫は義勇兵の士官である——又前者には妻が有るのだが、此の婦人の夢には現はれて居らぬ。

又次に何某の葬列中に、ヤツカ樹持つて踊り狂うた弟こそ、此の婦人と會て戀仲であつたが些細な事から離れたのである。

以上の如く分解して見ると、次の様な推論に到達する。(a)夢中の軍葬せられた文官何某とは畢竟お互に共通性のある自身の夫の變體に外ならぬ。

(b)愉快にして勇壯な軍樂は、此の死者がある爲に心中喜ぶ所の寡婦の情緒の表徴である。(c)又、昔の戀人なる何某の弟も當に之を喜ぶべき他の一人である。斯くして、此の一婦人の胸底の祕密は遺憾なく曝露せられ終つたのである。

そこで、人間の良心は現在の夫の死去を希望して、他の好き男と結婚し度いなどゝの不義理な事は許さない。或る瞬時にチラと考へたとしても、良心は直ちに潜在意識の部へ押し籠めて了まう。けれども、其の抑壓せられた意識が今度何時か夢中に變裝して出現するのである。之をばフロイドの言を假りて云へば次の如くである、心の監察官は動もすると欺かれる事がある。夫れが我々が覺醒して居て、良心を働して居る時だも左様であるのだから、泥んや夢に於てを

や。斯くして良心を瞞著する爲に潜在の欲望は夢の舞臺に面白き行列や、勇しい軍樂を上ぼせ、夫は他人に變裝せしめ、子供は、ヤツカ樹の花で象つたのである。斯う云ふ一種の變形變裝を使ひて、本體を直接に現さず、象つて現す夢をば表徴夢と云ふのである。もう一つ例を擧げやう。

〔第二例〕或る若い婦人、年齢は二十三、多少神經質で其の遺傳もあるといふ。音樂の才あり、又聰明であつた。彼女は其の音樂の師匠にして、自分の參拜する教會のオルガン演奏者なる人を戀てしゐた。此の時の夢の記録である。「私は幼時の小學校に出席して居り、そして、私はセント、アグネスの處女で且殉教者であるから、もう五分間のうちに私は大きな刀で首を斬られて了まうのだと聞きました。私は其の閃々たる刀に大變恐怖して、そんな恐しい事はせず、若し私が私の戀人に絞め殺されるのならば、どうでありませうかと聞きますと、其の戀人に承諾させて連れて來るならば宜しいと答へられました。私は駆けつゝ、途上之は夢であると知る。でもあの人は何と仰しやるか聞いて見ねばならぬなどと獨言し乍ら教會へ來り、大きな岩石を超える時に足を傷けました。そして一

體今は何時代であるか知らず疑ひ、又此の事を知る爲に誰か婦人共でも居ればよいがと思ひました。ところがそれらしいのに出逢つて見ますと彼等は皆、硬布製の女袴を穿てゐました。私は中央の翼堂へ進みました。中に澤山の人が居りしも私はもう死ぬのだから何も構ふ事はないと思つてゐました。かの「オルガン」の「T」氏は今正に其の自席で奏樂最中でしたが、私は彼に近いて直ぐ来て下さい。私は殺されるのですと言ひますと、彼は非常に立腹して出て行きなさい。あなたはいつも私の彈奏中に邪魔しますと申します。私が言ふに、あなたお分りになりませぬか。私は即刻殺されるのです。大刀が私の首の上へ落ち掛からんとしてゐます。けれども、私はあなたに絞め殺され度い。そして皆の人も遅れない様に連れて來たら、それを許してやると申しましたと。彼は直ぐ様承諾して來てくれました。さて夢の中では吾々二人が結婚したものゝ如く、已に一人の子息があり、しかも作曲師に成つて居ります。私は先づ此の子に告別せねばならぬと言つて襟母に彼を伴つて來させました。そしてさよなら。私はもう殺されるのよと言ひますと、彼は、おっ、おっ、おっ、私は男の子ですか、女の子ですか

？私が男の子達と遊んでゐますと、どうも他の子供の様ではありませぬ。そして、みんなが私は女の子だと云ひます。でも私は女の子の様にも見えませぬがと言ひました。私は返事して、お前は一人で兩方なのよ、なぜならお前は天晴な音樂の天才となる人だからと。(Lilli)

以上の説明——此の夢に於ては、日常満足せられざる愛情が睡眠中に遂げられて居るのを認める。即性慾夢として、こゝに其の儘の純粹な形式と表徴的な形式とが併せ現れてゐる。絞め殺されると云ふのは、言ふ迄もなく性慾上に出て來る表象で、之れ、夢の發展中絞殺を承諾して後結婚となつた——尤も此の際でもまだ初の「殺される」と云ふ思想が残存して居つたけれども、之は勿論、夢中の意識自身は前の絞殺は結婚遂行の表徴として潜在意識的に現れるものなる事を悟らなかつたからである。

以上の如く性慾の夢には、表徴的に現れるのがある通り、俗間唱謠する都々一なども同じく、直接に男女間の愛情を言はずして、他に之を象つて歌ふ。其の中夢を歌ひ込んだものは、

花に焦れる胡蝶の夢を悪くや風めが来てさます

晝間妬みし番いの蝶を夢に見る夜は頼母しい

晝は疲れて千草の蔭で夢を見るらしあの螢

人目忍んで日蔭の草に何を夢見てゐる螢

夢のさめたる矢先きに又も思ひ増さするつがひ蝶

逢ふとあり／＼今見し夢の覺めた行方が蝶二つ

此等は孰も焦るゝ思をば螢に、愛情いよゝ濃やかなる二人をば番ひ蝶に事寄せて歌つたものであるが、之に似て實は唯相思の情を他の事象を借りて比喩的に詠んだ丈のもある。

### 朝花

濡れた證據は笑顔で知れる雨のあしたの夢見草

### 夢野鹿

さめて苦になる夢野の契りわかれ牡鹿の草まくら

花の下紐解く春雨に濡れて嬉しいゆめ見草

思ふ湊へ届いて見れば波風立てたも今は夢

はれて逢ふ夜のない此の春は夢も臆のむねのうち

ほんに目出度や昔の苦勞女蝶男蝶のゆめにして

### 3 性慾夢生起の原因

さて、一般に夢の生起するは如何なる經驗、印象、刺戟であつても、はた其の如何なる種類のものであつても、殆其の原因と成り得ないものは無い。唯夢像の鮮明、不鮮明、其の出現の頻繁の度に差がある計りである。だから、性慾夢に於ても其の原因としては或は(一)フロイドの云ふ如く遠く、小兒時代の男兒は母親を戀ひ、女兒は父親を親むてふ頃に淵源しても居らう、乃至(二)青春の血に燃ゆる男女が相思ふより、相互に夢を見るのもあらう。はた(三)晝間戀人に似たる人に出逢ひしとか、戀人と同じ名前を聞きしとかと云ふ精神上に受けたる刺戟が其の夜の夢となる可く、又(四)榮養や血行の加減、たとへば就寢前に飲酒するなど又は病氣等の爲に、生殖器官の中樞乃至局部に刺戟を受けたる時か、(五)又は附近の器官の状態たとへば膀胱が充滿してゐるなどから刺戟や影響をうけるか又は六外

物、たとへば、衣服だの蒲團だの、自身の手などに觸れたる刺戟の爲に交接夢を結ぶ事もあらう。(末尾の表参照)

就中フロイドは、よく人が親の死去を夢る事實をも次の如くに説明するのである。「兩親死去の夢としては、主として、男子が父親の死を、女子が母親の死を夢る事が屢である。是れ上にも一言して置いた通り、小兒期に於て、已に異性相寄り同性相反する特性を表して、女子は父を、男子は母をば、言はゞ初戀ひをして、爲に男の子は父に、女の兒は母に對して、夫々嫉妬反感的の情も起り得る筈である。而して、古代の各民族並びに野蠻人に見る處の父子相姦の事は言ふ迄もなく、現今の文明人種と雖、此の痕跡は或る場合に於ては現れるのである。吾人に經驗する親の死去する夢が即ち夫れで、又實際神經病性又は精神病性の素因ある子供は其の兩親の孰れかに對して、上述の法則に適應せる異常の愛情又は過度の反感を表す事がある。フロイドは此の種の例として、精神病に罹れる少女に就いて述べてゐる。即此の少女が思力混亂を來す時は甚しく母を嫌忌厭惡する。そして該患者が沈靜に成つた時は、正に母の死を夢みつゝあつたのである。遂

に此の母に對する此の感情はこゝに止まらずして、今度は此の感情を過度に調整せん爲の反動として、何か母親に事件は有りはすまいかとの恐怖症に陥つて了つた。斯かる場合には、例のフロイドの慾望説が適應する。けれども、之を以て包括のできない種類も有るのは上述の如く、即ち精神又は身體に對して内界又は外界から受けて起る刺戟夢がある。

抑夢が刺戟によりて起るものの中には、手や足を引き搔かれたとか、眼や耳に波動の影響を受けたとかの外界よりの刺戟と、心臟や肺臟や胃腸や腎臟、膀胱乃至内部生殖器等に受けたる影響又は其の病的變化の爲に起る内界よりの刺戟とに區別する。其の主要な相違點は内界刺戟は一般にぼんやりとして、廣く、又判然と捕捉し難い。之に反して外界刺戟は耳なり、目なりによく特殊の感覺を起し、且鮮明である。其の原因は此處には略する事として、只一つ、最も注意すべきは、性慾上の夢である。之は男子に於ても、女子に於てもあらゆる夢のうちの最も鮮明なる種類で、明かに交接夢と成つて現れ、勿論局部は甚しく興奮状態にある (Ellis)。そして必ず交接夢はそれのみ單獨に現れて、他の夢に見る如く友人

が現はれたり、景色が見えたりする種々雑多の分子が存しないのも一特色である。尤も婦人の子宮、卵巣などは腹腔の臓器として吾人が茲に身體の内界外界の刺戟を述べる際は、之に受くる影響は内界の刺戟として何等支障は無い。けれども、生殖器は他の内臓諸器官とは同一に見る事が出来ない。たとへば腸が刺戟を受ける際には、之はどうしても内部丈けより外には道がない。生殖器に於ては男子は陰莖、女子は陰唇に、並びに股間等に、即ち純然外的刺戟と見做す可き者が同時に全生殖器の反射的興奮を來し得る。だからして女子に於ては子宮の妊娠時の刺戟は純內的のものであるが、其の他の場合には、内外兩様の刺戟の存する事を知らねばならぬ。其の原因は肉食時の榮養状態、醫化學的又は摩擦等の外部刺戟に由るか、又は豫め睡眠中に異性の夢を見て居り、夫れが反射的に局部に傳りて後再び之が全般に影響せしむる事となつて、兩々相俟つて其の度を愈、強くするものと信ぜられる。

## 4、性慾夢の種類

## 4 性慾夢の種類

尙茲に一言すべきは異性に對する夢、即ち性慾夢の中にも(1)只夢裡に戀人同

志が親しげに相見え、相語らう丈の事もあり(戀愛夢)、(2)追想として往昔の戀人が現はれる事もあり、追憶夢、又(3)肉の上の交接夢もある。余は此の第一の戀愛夢と、第三の交接夢とは性質上別種であると信ずる。何故なれば交接夢は、(1)其れ自身の行爲は極めて鮮明に覚えてゐるが、其の對手の顔貌の誰なりしやは不明の事が甚多い(余の蒐め得たる種々の人の實例中より見て、又覺醒後も局部は興奮して居る。(2)上にも書いた通り、交接夢は只其れ丈けが現はれて、他の添加的分子は存しない(3)青春期の男女であるならば、全く戀人を有せずとも、交接夢は現はれ得る。之に反して一定の戀人と嬉しく相見るときの戀愛夢に於ては、(1)其の顔貌は明に己が戀人なるを知らしめ、笑顔や行動迄も一々分明であるが、陰部の興奮は必ずしも之に伴はない。(2)戀人と相語らふ様は他の夢に於ける如く複雑で、室内で談話の場もあるべく、手に手を取りて、野外に散歩の夢もあるらう。(3)戀を知らざる男女には全く現れない。之を要するに前者は身體に受けし刺戟より、後者は精神作用の影響より發するものと思ふ。(之につきても末尾の表を参照せられよ)



但、已に述べた如く、兩々相互的に影響し合ひて構成する複合性性慾夢も素より想像せられる。そして、之は其の人の年齢境遇情調等に由る者であらう。若し夫れ第二の追憶夢は必ずしも異性に對する性慾の發動のみには限らず、何か往時を回顧せしむる刺戟があつて現れ得る事もあらう。されば性慾夢の種類を區別する際には上記の戀愛夢と交接夢とはたとひ其の實體上に於て異性質のものなりとはいへ、共に實際的の現象を夢るものであるから之を一纏めにして眞性性慾夢第一種と呼び他を夫々表徴夢第二種追憶夢第三種と呼ぶが便利であると思ふ。

例に依り、左に都々に就いて、如何に世俗は謠ふかを聞かう。併し戀人に逢うた夢を謠つた中にも其の種類が精神上からの内的原因に依るか、物理的の外的刺戟に由るかは素より知り様がない。随つて截然たる區別は付けられないが、其の歌詞、句意等に察して、兎に角類別的に駢べて見やう。

## (a) 戀愛夢

思ひ餘りて見みえしゆめよ覺めて涙の外ぞなき

逢うたゆめ見て笑うて醒めて邊り見廻し涙ぐむ

見捨てられたと見たのも嬉し夢は逆さと言ふからは

主に逢うたる夢さめたのも嬉し涙のつめたさに

雪の降る夜に殊更通ふ解けて嬉しき夢を見た

泣いた拍子に覺めたが惜しい夢と知つたら泣かぬのに

夢にこぼした涙の雨が降つてゆるむか春の夜半

五臓の勞れと言ふとも嬉し主に逢うたる夢なれば

粹をきかして喰ふなよ貌よ主に優しくされた夢

ゆめはさめても胸一杯に春の夜空の朧がち

ゆめでありしを若しやと思ひ雨戸開ければ朧月

までと來ぬ主怨んで寢ては逢うた夢見て濡す袖

## (b) 實際に二人相見たる事の夢

楽しい思もあの淡雪と消えて悔しい夢の首尾

來ぬ夜刺したる蚤さへ憎む首尾の夢をば覺まさせて

共に嬉しく逢うたは夢で胸も轟く春の雨  
 待てど來ぬ主恨んで寝ても逢う夢見りや憎くない  
 逢うて嬉しく結んだ夢を戀路しらぬかあけがらす  
 はれて逢うたる夢さへ覺めて眼にもお顔が朧月  
 阿波す戻した切ない夢はまゝに鳴戸の辻うらか  
 夢かと思つた昨夜の首尾を辛や今宵は夢に見る  
 憎くや雨のみ誠であつてさめて悔しき夢の首尾

(c)以上の孰れとも屬し兼ねる者

はれぬ思ひでまどろむ夢が覺めりや憎らし朧月  
 案じ疲れて寝付いた夢を憎くや破つたうかれ猫  
 うかとやどがと天聲立てゝ獨り恥ぢらう留守のゆめ  
 笑ひ顔してゆうべの夢を思ひ出しては書く火鉢  
 啼いて留守居のゆめ覺まさせる雁は歸らでよいものを  
 どうせ遅いと宵寝のゆめの覺めりや憎らし春の雨

(d)戀の追憶夢

夢に見てゐる昔の苦勞添うて氣樂の春の間  
 添うてゐながら昔のゆめを見ては鴉に目を覺ます  
 うかと寢言に昔の夢が知れて恥づかし新世帯

以上余は實際の性慾夢の各種を擧げ成るべく其の各項に相應する様に都々  
 一も分類配置して來たが、かゝる歌謠の性質として更に(1)戀人同志の睦まじき  
 狀景乃至物思ひの様を描けるもの、又は(2)戀人の相談れて後の感じ乃至(3)文學  
 的に夢の熟語を使用して歌へるものなどがある。

(1)戀人の情景

(a)單獨に居る時

冷える涙は夢をば破る残る寒さの獨りねに  
 いやな夢をば蚤蚊が刺して獨り眺めた蛸の月

(b)二人居る時

涼し曙蓮吹く風か紹蚊帳二人の夢さます

見ぬ迄も夢現とも思ひしに今見焦るゝそもじなるかな  
逢うたゆめでも見てゐるらしい主の晝寝の笑ひ顔  
よその夢見る浮氣な主に貸して悔しい膝枕  
打ちやってお置きよ寝たうちなりと樂な夢でも見させたい  
(2)戀人と訣れて後の心事  
泣いて別れた其の夜の夢に主の笑顔のちら／＼と  
宵のすぐ六寝てまで夢に主と嬉しう春のたび  
偶の日永に遇うたと思や夜半は苦勞の夢を見る  
(3)文學的、技巧的

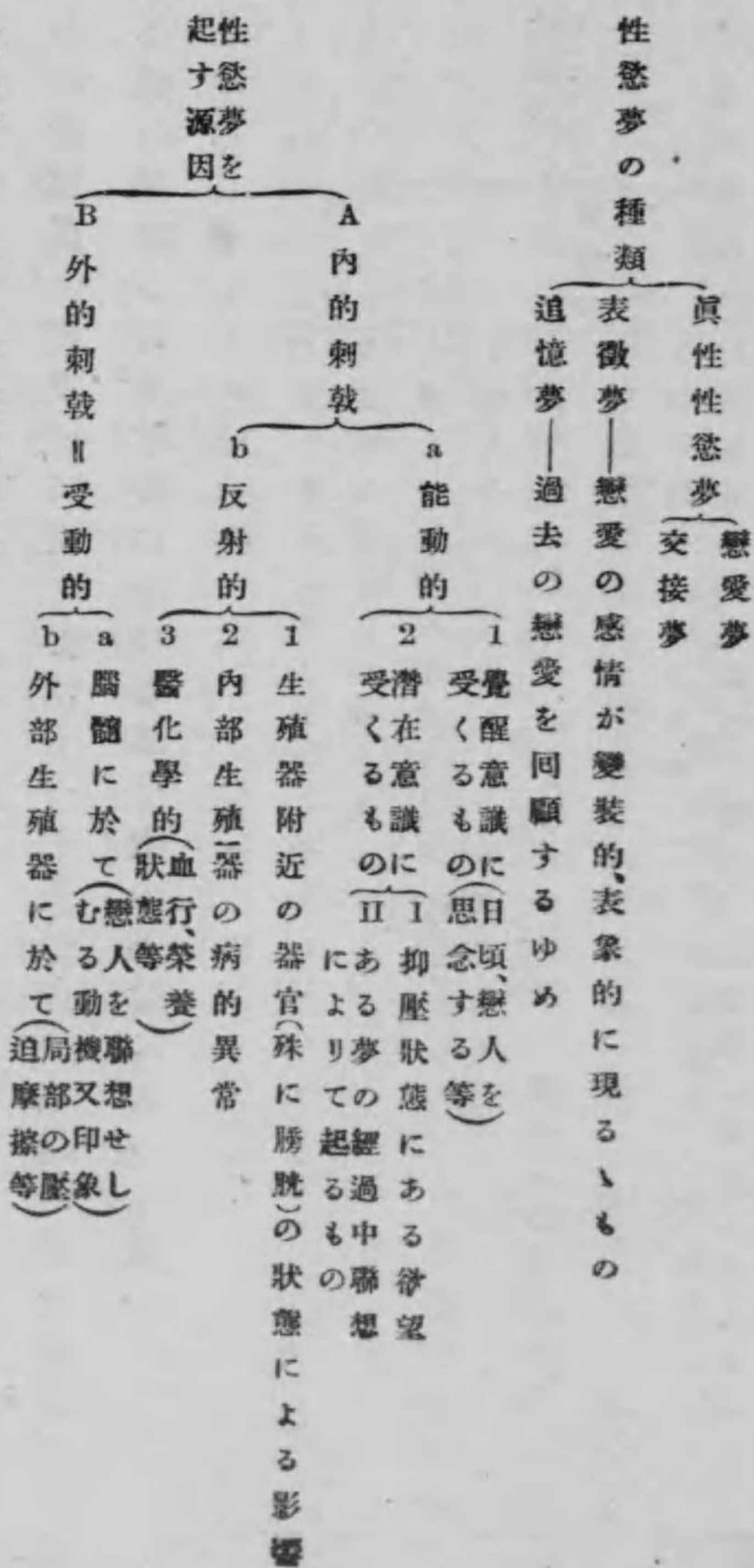
桐壺の更衣の比翼連理の契も定めなき世の習ひとて  
夢のうちぞ悲しき。(小唄なり。「小歌惣まくり」より)  
夢の間のうきよ死んではいらぬ、おなさけあらば命あるうちに  
生れ來りし古へ問へば君に契れと夢に見た(筑前俗話)

謎 曲

夢でみめぐり來るかたまつ乳あへば心もすみ田川  
昔見しゆめ振り捨てゝ今は昔のゆめ戀ひし(上總俗話、山家鳥龜)

5. 結論

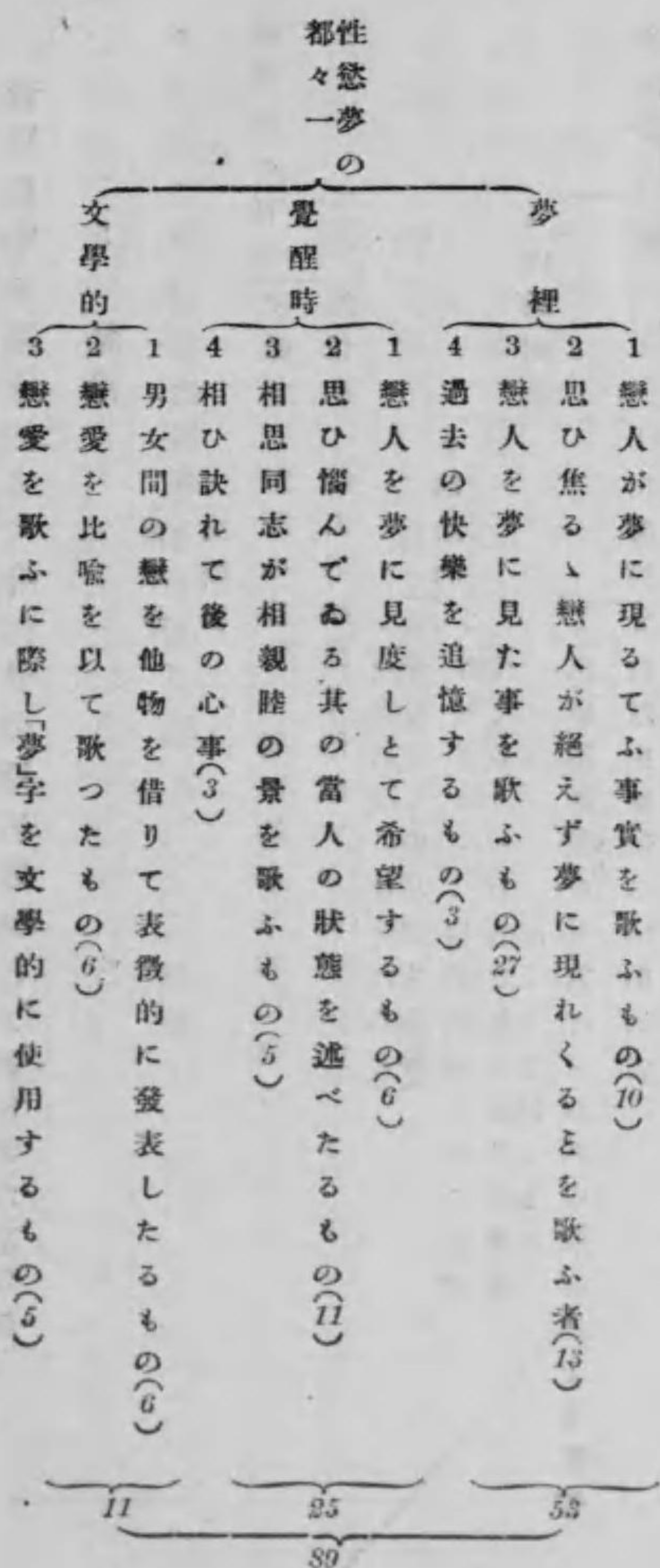
以上の表



即ち、フロイドの欲望説は性慾夢に於て、其の原因中僅かA— aのIと及び特に2の1とを説明するに足るもので其の他には適合しない。

次に、都々一の夢には左の如く、性慾夢を歌ふもの、外「夢」の文字を性慾に關して文學的技巧的に應用するものもある事に注意すべきである。左に性慾夢の都々一の表を掲げて一と先づ此の總論の部を結ばう。尙理論の不備の點並びに端歌等に於ける夢は次の各論に入りて説かう。

性慾夢の表



二、各論 上、附端唄に現れたる夢

性慾夢の諸形式

前項に於て、性慾夢には(1)眞性性慾夢(戀愛夢及交接夢)(2)追憶夢(3)表徴夢の三種類を區別する事を述べた。けれども、其の各夢が如何なる形式を取つて現れるかはまだ説かなかつた。今左に多少詳細に記載して見やうと思ふ。尤も形式と云つても、夢者各自の經驗狀態等に依りて異り、殊に性慾上の追憶夢に至つては、其の生起の條件が他の一般の追憶夢に於けると何等相違が無いから、随つて其形式も千差萬別である。併し乍ら他の二種に於ては、各多少共通の乃至規則的な形式を認める事が出来る。

(1)印象的性慾夢

萬葉集卷四相聞の部に左の如き歌がある。

○山口女王の大伴宿禰に贈り給へる歌五首のうち  
吾が背子は相思はすとも敷妙の君が枕は夢に見えこそ

○湯原王の娘子に二首贈り給へれば、娘子がそれに報贈ける歌二首のうち

1、印象的性慾夢

幾許思ひけめかも敷妙の枕片去る夢に見え來し

又萬葉集卷十一には、

山吹の匂へる妹が唐棣色の赤裳の姿夢に見えつゝ、

と云ふ歌がある。即、唐棣色の赤裳が見えたり敷妙の枕が現れたりするのは、戀人自身ではなくして、其の衣服乃至夜具類の際立つて夢に見えた事であつて、之は實際よく性慾夢に見る形式の一つである。Stanley Hallも此の事を左の如くに述べてゐる。

「先づ大抵の場合は、たとひ夢中の行爲の爲に、目が醒める程であつても、其の心に残つてゐる姿は支離滅裂せるもので、一言や一擧手一投足の行動を覚えて居るに過ぎぬ。だからして、そんな物の大抵は普通ならば大した感情を刺戟するとも思へぬものである。屢精神作用も遠くなつて居つて、翌朝目覺めて見れば、唯衣服の特種な縞柄だの、指の爪の形だの、後襟だの、頭のうなづき加減だの、足の運び様乃至髪の毛の分け方だのを覺えて居る丈で他は何も知らぬ事が多い。こんな場合には暫時は斯様な幻象が浮き彫の如く明瞭に意識に残存して、やが

て彼の生殖器崇拜の思想は主として、斯かる性慾夢に淵源するものならんと思はせる。

甚稀なれど、生殖器自身を夢に見る事がある。兎に角、其の幻象の鮮明の度が甚強烈であるから、此に關聯せる他の行爲現象を迄も思ひ浮べしめ、勢ひ此の種の經驗は長らく留まり、そして他の如何なる經驗よりも明確な印象を與へ得る者である。其の夢の直後に覺醒する際でも、何だか、もつといろんな夢象が有つた様に思へる丈で、判然之を想ひ出す事は出來ない、そして恐らく其の理由はあまり慣れ切つた、いつもの事であるから印象が無いものらしく、其中何か通常見慣れぬ事件のみが明瞭の印象を捺押して残つてゐるものゝ様な感じがする。凡て、如上の心的經驗は壯年の人にこそ常に見る現象であるが、之が春機發動期頃の夢者に於ては、遙にもつと明瞭であること。

(2) 間斷性性慾夢。

(例) 三十五歳の一婦人が嘗て性慾夢を見た。けれども未、何等の興奮状態に達せずして醒めた。やがて再、睡に陥ると、又もや性慾夢が現れたが、今度も亦

興奮せずして目が醒めた。再度睡に入つて、復三度目に同じく性慾夢を見、

しかも此の度は興奮状態に在つたといふ(Ellis)。

斯かる現象は近者Hakeも記載し、千九百九年之を間斷性夢精 Pollutio interrupta と云ひ、之に相當する覺醒時の現象をば Rollader は間斷性手淫 Masturbatio interrupta と名づけた(千九百八年)。

斯く性慾夢中に中途反復覺醒するは、睡眠中にも生殖器官及び膀胱(後篇参照)に對する抑制的作用の維持せらるるものたる可く、又之は催眠術應用の際、被術者の往々暗示に罹り難い事あるのに似て居る。

### (3) 聯想的融合夢

之は、或る何等かの刺戟の爲に、性慾夢の發現は有つても、其の儘純粹に夢現せずして、前日晝間見聞したりし事件の聯想も共に混入融合して、云はゞ不純な性慾夢を構成する種類を指すものである。エリス自身の實例としては、氏は嘗て Joest なる人が、或る若き黑人種の女の入墨模様を寫生して居た所が突然其の黒女が機嫌を損じ出して、兩手を胸に當るや否や乳房から二條の乳汁を注出し、寫

間斷性手淫

3、聯想的融合夢

生者の顔面へ打つ掛けつゝ、嘲り笑つて逃げ去つたと云ふ記事を讀んだ事がある。其の夜の夢にエリスは夫れと同じ行動を爲したる一婦人の夢を見た。但し相異の點は胸から乳汁を迸射するのではなくて、其の婦人には陰莖を有し、其處から注出させてゐた。

他の一例は普通の男子で、且今迄男色などの經驗もなく、又そんな希望も有つた事の無い人であるが彼は一夢を語つてゐる。曰く、自分は大きな少年であつて、自分より年下の男子が自分に密著して臥して居る。しかも自分達或は彼丈(け)は遺精してゐた。又快樂と云ふ點に於ても自分は受動的の方であつて、其の少年が人に見付かつた時は、自分も大に面目なく感じた。さて醒めて見れば自分は遺精をして居らず、唯自分の妻女に甚密接して横はつてゐた。此の前日競泳會を見に行つて、泳ぐ男兒を見た」と。思ふに此の夢は妻女に近接してゐた事が刺戟となり、加ふるに前日の游泳してゐた男兒の印象が混入したものである。

### (4) 鶏姦夢又は反性夢

前項には前日の印象より一男子が他の男子と同衾の夢を見た例を述べたが、

4、鶏姦夢

上述の如き聯想的條件無くして、鶏姦的の性慾夢を見る事がある。しかも大抵容姿は婦人で、器官のみ男性であるのが多く、随つて此の種の夢は殆、男子にのみ見らるゝ所である。

(例)或る健康にして、品性の純潔なる男子、從來生殖作用には無經驗であり、又未嘗て婦人の裸體姿を見た事が無いといふ人が、其の性慾夢には常に男根を具したる女子を夢む。其の夢者は一度も同性慾を感じた事も無く、又女子をも戀愛した事も無き由。

5、手淫夢

(5)手淫夢  
手淫の夢は比較的尠くして、エリスも四例を知つてゐるのみといふ。

6、性慾  
性夢魘

(6)性慾性夢魘  
之は反性夢の男子に多きに反して、女子に多き種類である。凡そ、晝間恐しき印象があつたり、物凄き物語などを聞いた夜は其の夢にも恐怖すべき夢を見る事は乏しある。さて婦人は體力の點に於ても男子よりは弱きが故に、月なき夜など淋しき街路の獨り歩るきは怖れ嫌がるものである。斯かる恐怖心が絶え

7、精神  
性病  
性慾夢

ず心裡に彷徨して居るから、不消化等の加減によりて生ずる所の所謂「うなされ」以外に、荒くれ男に追驅けらるゝ等の夢も往々見る。尙次章、夢魘の條を見よ。

(7)精神病性性慾夢

一般に女子は夢中に見た處を、恰覺醒時にあつたものの如くに思ひ做す傾向が強く、健康なる普通の婦人に於ても往々然りといふ。されば勿論男女の性慾夢に於ても其の法則に漏れず、殊に其の程度は精神病者に於て著しい。

(第一例)ある舞蹈病に罹つてゐる女學生が男子に暴行せられた夢を見て、校長に訴へ出た。Hersman は此の例を見て、之を米國の各精神病學者に聞き質すと、凡て精神病的の患者には上記の如き夢がともすると實際事なりと妄想して告訴するものだと知つた。Burr は「性慾夢は甚鮮明なるを以て婦人の夢者をして實際交けたりと思はしむ」と曰ひ、C. H. Hughes は各種の狂者に就て親く調べし結果、夜中の狂者の性慾夢は日中の幻想と成り、患者は其の眞實なる事を辯じ立てることを知つた。

(第二例) Hersman の他の一例には癲狂院に收容せる一婦人は夜々幻影を描い

て、一醫員が毎夜彼女の許に入り非行を爲すと妄想した。

(第三例) Pines も略同様の實例を記載してゐる。或る「ヒステリー」の女子が最初は其の受持ちの助手に信頼してゐたが、後に其の態度が一變した。其の理由は彼は夜な夜な窓から竊ひ込み、彼に措り寄つて、馴れ親み、果ては三回又は四回の強姦を行ひ、全く彼女を疲憊せしむと述べた。

(第四例) Ellis は強度の神經質性の若き一婦人の手紙を提供してゐる。

「數年來、私はどうかして自分の感情の強過ぎる性質を治さうと存じて居りましたが、追々其の甲斐も現れて参りました。然るに昨秋不思議な現象を實驗したので御座ります。一夜寢牀に臥して居りますと、誰か男子が私の傍に居る様な感覺を起しまして、私は羞恥と驚愕とで眞赤になりました。私は慥か、仰臥して居りました。やがて此の魅せられた様な切ない感じが消失致しました。其の男子と云ふのは、どうも私が平素此上無く信仰し、敬服して居ります或る牧師のお方で御座い致したが、決して其の方に戀慕する様な心は平素から御座りませぬ。何故なれば、とても私共と其の牧師

様とは比べものになりませぬから。此の奇妙な感應的な力は其れ以來現れまして、時には晝間にも生じますが、大抵は夜分で御座ります。夫から私は熟睡に陥り、朝迄グスリと寝込むのが常で、目を覺ましますと大變氣分が晴々致しました。此の感應の力は私の身心に著しい影響を與へました。私は之を以て正しく適度な愛情を蒙り、爲に私の將來には何等障礙も無うて、好結果があつたことゝ存じて居ります。但、時々私の心配致しましたことはヒョットすると之は神經病ではあるまいかと思ふたからで御座ります。

(第五例) 數年以前オーストリアで一人の男子が少女強姦未遂罪として十八ヶ月間の禁錮を宣告せられた事がある。理由は十三歳の少女が斯かる告訴に及んだが故で、結局之は單に幻想の爲だと白狀して該男子は無罪になることを得た。

斯かる例は敢へて珍しきものでなく、夜中の性慾的幻像を以て説明せらるべきものである。



(8) 表徴夢(狭義に於ける)

上述の七種は實際的に其の行動や姿態等が夢現するのであるが尙他に表徴的に全く無關係的な事物と成つて性慾夢の意義を成すものがある。即ち表徴夢である。茲に斷つて置く可きは一夢の全體が何か別趣の如き形式の許に表れる者は總論に述べたる廣義の表徴夢である。此處に指すのはたとへば第五〇三頁に於て記載した如く一婦人が他人に斬首せられんよりは己が戀人に絞め殺されん事を希望したなどは夫れてつまり特殊の行動なり其の他一定の事物を以てする表徴夢を云ふのである。即ち今述べた絞殺なる事件は一見甚しく性慾上の問題とは縁遠きが如くなれども事實上には往々此の形式を取り此の假面を着て夢現する。

第二には蛇である。Freud 一派は婦人の夢に於ける蛇は一種の性慾的表徴であつて此の事はかの野蠻人の會話や乃至神話等に見出されると云つて居る。Ellis は之を解釋して之れ蛇に對して吾人は一般的一種恐怖の感を有するものにて殊に小兒時に其の然るものとし其の性慾夢と成るものは唯僅少の場合の

みなるを知らざる可からずと言つて居る。之等に就きては余は表徴と夢なる條下に寧ろ精しく書いたから同處を見られよ(第六八九頁以下)。

第三には鳥が性慾の表徴と爲る事である。夙に De Gubernatis は鳥の男根的表徴たる事は人の善く知れる所也と云ひ Maeter は鳥は人の覺醒時並に夢裡に於て性慾的意義を有するもの也と述べてゐる(千九百七年)。

次に千九百四年一月の亞米利加心理學雜誌 American Journal of Psychology に遺精なる題下に記載せられたるものなりとて Ellis は其の著に次の匿名者の一文を紹介してゐる。其の前過半部は已に記載したる印象的性慾夢の實例に相當する者であるが終尾の一項は今しがた述べた表徴夢に相ひ當るのである。但、該筆者は三十歳と三十八歳との間に於て健全且性交には無經驗な男子であると云ふ。

「脚部や胸部は性慾夢中には往々判然と現ずるが他の生殖器官等の部は甚稀に見る所。又其の際は夫れ大抵男根である。交接の夢は唯二回あるのみ。夢中の人物は普通少女か若き婦人で又奇妙にも其等は挑んで來るのが屢である。時

には其の顔を能知つてそのもあり、又時には唯見覚えの有るのもあり、又全く未知のものもある。色情亢進は其の夢の最も挑發的な時に於てし、生理状態と心理状態とは互に並行して興奮する。

夢中射精

所で其の夢中の一番挑發的な實感的な個所が往々にして何でも無い様な光景を呈する事がある。例へば自分は夢に街路を歩いてゐたが見知らぬ一婦人を追ひ越した。すると彼の女は後から何か話し掛けた。最初は夫れに頓著しなかつたが二度目に呼ばれた時には、振り回へつて返事を爲やうか、それとも黙つて居やうかと躊躇した此の際射精があつた。

又他の一例では、自分が若き婦人の側傍を歩いて居ると彼の女は、あなたのお腕を拜借しても宜しう御座いますかと云うた。自分は手を差し出すと彼の女は之を取つて、自身の腕を捲き付けて高く振つた。こゝに射出があつた。

彼の女が自分に問を發した時に一層強く射精のあつた事を感じた。射精發作は往々一言にして足ることあり、又一舉動でも充分である。或る時などは若い女の細い指の爪を見た時に射精があつた。

他の一例では、一少女の衣服上の美しい刺繡模様を見て、色情興奮があつた。又或る夜に見た例こそ甚、面白い、自分は夏期に鸚鵡を見て居つたが、自分は之に戀を仕掛け、其の鳥を可愛がつて居る中に、奇麗な美しい女となつた。しかもまだやはり何處となく野生の鳥らしき氣のきかぬ處と、優美な點や、愛嬌もあつた。恰もウンヂイナ *Undina* (女性の水神) の如くに。

尙鳥と性慾との關係は、後編に述べんとする性慾的夢占なる條下に譲る。參照せられよ。(上)又上記外人の實例の射精の條は後文(第五五頁以)(第七〇三四頁)

更に Freud の流を汲む *Karl Abraham* は、木の實を以て、甚よく現れる表徴となし、婦人の妊娠を意味すと云ふ。即イブがアダムを誘惑したのは林檎を以てしたのである。又柘榴は其の核も多き故、頻回妊娠の意をなす事あり。されば多核なる柘榴の *Juno* に於ける又種子の多き芥子球の *Venus* に於けるも皆、以上の性質の表徴である。又一説には *Venus* は鯉に變化したともいふ。之も雌の鯉は卵を澤山持つて居るので古代は之を俗諺的に用ゐた。其の他各國の風習に花嫁花婿の結婚の時、米穀の粒を之に向つて投げかけるのも子孫繁昌の意であ

る。尙之に關しては Kleinpanl を參照せよと言つて居る。

西洋人は自分達に縁の深い希臘神話や、北歐神話等を材料にして色々な理窟をくつ付けるが果實と云つても、西洋人の多く好んで食べると、日本人等の嗜好とも異なるべく、又其の實のことも地勢や風土によりて適不適が有るから、強いて理由をつけやうとすれば精密な調査なるかに見えて實は牽強附會に墮する。寧ろ日本神話を見れば矢を以て男根の表徴とすべきかに思はれる。尤も胸に白羽の矢の立つと云ふのは西洋式だらうが、讀者は同時に古事記や日本紀の傳説を想起せらるゝであらう。

II、男女の性欲夢に於ける差異

以上余は性欲夢の諸形式八種を述べた。そして一般に性欲夢は男女の孰れにも現るゝは勿論なれど、其の種類に因りて、夫々性的特殊性がある。

(1)形式上の性的差別

印象的性欲夢、間斷性性欲夢、聯想的融合夢、表徴夢は均しく男女兩性に現るゝ者なれども、反性夢、手淫夢は男子に多く、性的的魔夢及び精神病性性欲夢は女子

夢と性欲

II、性的差別

I、形式

に多い。

(2)心理上の性的差別

一般に女子の夢隨つて其の性欲夢が、ともすると恰晝間にありし事實の如くに思ひ做さるゝ事多く、此の傾向は健全なる女子に於てすら認める所て、男子には極めて稀の事である。

(3)藥品に對する性的差別

女子は、クロ、フォルム、や酸化窒素の作用の爲に性慾上の興奮を來す事がある。之れ男子には殆又は全然見ざる所て、又其のうち本人は實際に遂行せられて居るものゝ如くに思ふ夢幻的現象が頻回ある事も知らねばならぬ。

(4)其の他の男女の性欲夢に於ける差別

(i)男子に於て——男子の睡眠中の自發性性欲現象は甚簡單である。通常青春期に初まりて、性交を知らざる間は、鬼に角、時折りの消長はあるが、追々性欲をも結ぶに至り遂に此の種の夢を結ぶこと最も頻繁なる時期に達する。其の夢の生起する原因は已に總論に述べた通りである。

上、心理

的、藥理

4、其の他の差別

i、男子

又時には一定の週期的に、たとへば週毎に又は年毎に其の夢現の度数に消長のあることもある(Ellis)。

要するに男子の性慾夢は大體に於て誰にてもきまつた規則的な現象を呈するので、覺醒後の影響も特に言ふ可き程の者無く、多少疲勞を感ずるか、頭痛を覺える事がある位である。

(ii) 女子に於て——然るに女子に至りては睡眠中に於ける性慾現象の自發的發作の形式は甚雜多、不規則且散漫で、エリスは春機發動期又は小兒期の處女が性慾夢を見る事は寧ろ例外に屬すと云ふ。今左に結婚前後を區別して述べよう。

女、未通

未通女に於て

處女が其の覺醒時に於て、たとひ如何なる状態の許にしる、兎に角慾情亢進が發作する時期に達せずんば、睡眠中に於ても興奮は生起しない。又随分色慾旺盛であり乍ら、平常之を抑壓しつゝ、暮して居る状態の婦人でも興奮現象は往々比較的頻繁ならざるものである(Ellis, Löwenfeld)。又 Rollet の如きは純粹無垢

の處女には生理上に、分泌射出は不可能であると迄云つて居る。但、之は極端の説である。何となれば一婦人の言ふ處に依れば其の十六歳の時に已に甫めて夢中に最初の局部興奮を経験した。其の夢は忘れたが、あまり愉快なものでもなく、又さして肉慾的の者でもなかつた。然るに二三年の後に至つて、偶發的に興奮作用が覺醒時にも時々生起する様になり、以後は睡眠中も一週に二回乃至三回は規則的に發作した。但、まだ性慾夢は知らなかつた。唯欲情の興奮する事を夢みて其の發作する時に目を醒ますのであつたと云ふ。或る女醫の自家経験を述べたる言には、私は善く睡りまして、まるで夢見は御座いませぬ。けれども甚稀な事ですが時によると或る感じの爲に突然目を醒す事が御座います。夢と申すべき者ではなくて、唯ある衝動的の種類であります。別に何等之と指す事は出来ませぬが兎に角性慾的實感あるが爲に、夫れと思はれるので御座いますと。

上述の如く、女子の睡眠中には自發的性慾發作現象が、然く頻繁ならざる事實のあると同時に、又他面には睡眠中に完全なる性慾興奮を來す事の可能なるを